

札幌市文化財調査報告書

XII

1975

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 Ⅻ

N309 遺 跡

1975・8

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和49年10月1日から11月10日にかけて実施した北海道住宅商工協同組合の宅地造成現場に所在するN309遺跡の発掘調査報告書である。地番は、札幌市西区手稲前田106番地11である。昨年調査した、N293遺跡の東側隣接地である。
- 2 本調査は、札幌大学石附喜三男助教授および札幌市教育委員会羽賀憲二が担当したが、現場の仕事は、加藤邦雄、高橋和樹、内山真澄の協力をえて上野秀一が遂行した。
- 3 本書は、上野秀一と高橋和樹が編集を担当したが、執筆は編集者と発掘調査に従事した下記の者が、各項目別に担当し、文末に文責を明記した。
- 4 発掘調査、整理において下記の人々より助言と協力を賜った。
北海道大学文学部教授 大場 利夫
札幌市文化財保護委員
北海道教育委員会振興部文化課
北海道開拓記念館学芸員 野村 崇
北海道大学文学部付属北方文化研究施設
- 5 発掘調査には、下記の人々が従事した。長谷川克浩、山下芳教、笠井衛二、藤井則明、高田正雄、伊藤加代子
北海道大学、北海道工業大学学生ほか
- 6 挿図浄書には、小尾榮子(トレース)、佐々木裕美子(遺物実測)、長谷川克浩、山下芳教、藤井則明(復元・拓本)らが主にあたった。
- 7 石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館赤松守雄氏をお願いした。
- 8 発掘期間中、整理、報告書出版まで北海道住宅商工協同組合には、たえざるご協力とご理解を賜ったことを記し、感謝の意を表する次第である。

凡 例

- ① 挿図は竪穴住居址状遺構実測図縮尺40分の1、ピット実測図縮尺20分1の、30分の1。
- ② 挿図の土器実測図縮尺4分の1、土器拓影図縮尺3分の1、石器実測図縮尺2分の1。
- ③ 写真は、土器縮尺3分の1、4分の1（図版8上）、石器縮尺2分の1、3分の1（図版44B～47B）。
- ④ 石器実測図輪郭に沿った（——）線は、ニッジに整形ないし使用による細かい割離があるか、あるいは磨耗していることを示している。
- ⑤ 石器説明中、a面とは背面ないし実測図中の左側正面図をさし、b面とは腹面ないし右側正面図をいう。

目 次

例 言

第1章 発掘までの経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 発掘調査の方法と層序	9
第1節 発掘調査の方法	9
第2節 層堆積について	9
第4章 遺構および出土遺物	12
第1節 竪穴住居址状遺構	12
第2節 ビット	29
第3節 考 察	71
第5章 発掘区出土遺物	82
第1節 土 器	82
第2節 石 器	101
結 語	126
(引用・参考文献)	

挿 図 目 次

- 第1図 N309遺跡と周辺の遺跡の位置
 第2図 遺跡付近地形図
 第3図 遺跡発掘区配置図および遺構関連区
 第4図 第1号竪穴住居址状遺構実測図
 第5図 第2号竪穴住居址状遺構実測図
 第6図 第3号竪穴住居址状遺構および第54号ピット実測図
 第7図 第4号竪穴住居址状遺構実測図
 第8図 第5号竪穴住居址状遺構実測図
 第9図 第6号竪穴住居址状遺構実測図
 第10図 竪穴住居址状遺構出土石器実測図(1)
 第11図 竪穴住居址状遺構出土石器実測図(2)
 第12図 竪穴住居址状遺構出土石器拓影図(1)
 第13図 竪穴住居址状遺構出土石器拓影図(2)
 第14図 竪穴住居址状遺構出土石器実測図(1)
 第15図 竪穴住居址状遺構(第4号)出土石器実測図(2)
 第16図 第1号, 第2号, 第3・4号ピット実測図
 第17図 第5号, 第6号, 第7号, 第8号ピット実測図
 第18図 第9号, 第10号, 第11号, 第12号ピット実測図
 第19図 第13号ピット実測図
 第20図 第14, 15号, 第16号ピット実測図
 第21図 第17, 18, 19号, 第20号ピット実測図
 第22図 第21, 22, 23, 24, 25, 26号ピット実測図
 第23図 第27, 28, 29, 30号ピット実測図
 第24図 第31号ピット実測図
 第25図 第32, 33号, 第34号ピット実測図
 第26図 第35号, 第36号, 第37号, 第38号ピット実測図
 第27図 第39号, 第40号, 第41・42号, 第43号ピット実測図
 第28図 第44号, 第45号, 第46号ピット実測図
 第29図 第47, 48号, 第49, 50号ピット実測図
 第30図 第51, 52, 53号ピット実測図
 第31図 ピット出土石器実測図
 第32図 第54号ピットおよび周辺(P-←)15, 16, O-←(16区)出土石器実測図
 第33図 ピット出土石器拓影図(1)
 第34図 ピット出土石器拓影図(2)
 第35図 ピット出土石器拓影図(3)
 第36図 ピット出土石器拓影図(4)
 第37図 ピット出土石器拓影図(5)
 第38図 ピット出土石器実測図(1)
 第39図 ピット出土石器実測図(2)
 第40図 N293, N309遺跡ピットのタイプ別分布図
 第41図 発掘区出土石器拓影図(1)
 第42図 発掘区出土石器拓影図(2)
 第43図 発掘区出土石器拓影図(3)
 第44図 発掘区出土石器拓影図(4)
 第45図 発掘区出土石器拓影図(5)
 第46図 発掘区出土石器拓影図(6)
 第47図 発掘区出土石器拓影図(7)
 第48図 発掘区出土石器拓影図(8)
 第49図 発掘区出土石器拓影図(9)
 第50図 発掘区出土石器拓影図(10)
 第51図 発掘区出土石器実測図(1)
 第52図 発掘区出土石器実測図(2)
 第53図 発掘区出土石器実測図(3)
 第54図 発掘区出土石器実測図(4)
 第55図 発掘区出土石器実測図(5)
 第56図 発掘区出土石器実測図(6)
 第57図 発掘区出土石器実測図(7)
 第58図 発掘区出土石器実測図(8)
 第59図 発掘区出土石器実測図(9)
 第60図 発掘区出土石器実測図(10)
 第61図 発掘区出土石器実測図(11)
 第62図 発掘区出土石器実測図(12)
 第63図 発掘区出土石器実測図(13)
 第64図 発掘区出土石器実測図(14)
 第65図 発掘区出土石器実測図(15)
 第66図 発掘区出土石器実測図(16)

図 版 目 次

- | | |
|--|---|
| <p>1 A 遺跡遠景 (南より)
 B 遺跡近景 (南西より)</p> <p>2 A 第1号竪穴住居址状遺構 (西より)
 B 第2号竪穴住居址状遺構 (南より)</p> <p>3 A 第3号竪穴住居址状遺構 (北より)
 B 第3, 4号竪穴住居址状遺構および第54号ピット (北東より)</p> <p>4 A 第4号竪穴住居址状遺構 (北東より)
 B 第4号竪穴住居址状遺構土器出土状態(1) (西より)</p> <p>5 A 第4号竪穴住居址状遺構土器出土状態(2) (北西より)
 B 第5号竪穴住居址状遺構 (南より)</p> <p>6 A 第6号竪穴住居址状遺構 (北西より)
 B 竪穴住居址状遺構出土土器(1)</p> <p>7 A 竪穴住居址状遺構出土土器(2)
 B 竪穴住居址状遺構出土土器(3)</p> <p>8 第4号竪穴住居址状遺構出土土器(4)</p> <p>9 第4号および第6号竪穴住居址状遺構出土土器(5)</p> <p>10 A 竪穴住居址状遺構出土土器(1)
 B 第4号竪穴住居址状遺構出土土器(2)</p> <p>11 A 第1号ピット (北より)
 B 第2号ピット (北より)</p> <p>12 A 第3, 4号ピット (北より)
 B 第5号ピット (東より)</p> <p>13 A 第9号ピット (東より)
 B 第10号ピット (東より)</p> <p>14 A 第11号ピット (南東より)
 B 第14, 15号ピット (南より)</p> <p>15 A 第13号ピット (北より)
 B 第13号ピット土器出土状態 (南より)</p> <p>16 A 第17, 18, 19号ピット (北より)
 B 第27・28号ピット (北西より)</p> <p>17 A 第31号ピット (西より)
 B 第32, 33号ピット (東より)</p> <p>18 A 第34号ピットおよび土器出土状態 (北東より)
 B 第34号ピット土器出土状態(1) (南西より)</p> | <p>り)</p> <p>19 A 第34号ピット土器出土状態(2) (西より)
 B 第37号ピット (東より)</p> <p>20 A 第39号ピット (西より)
 B 第41, 42号ピット (西より)</p> <p>21 A 第45号ピット (北より)
 B 第47, 48号ピット (北より)</p> <p>22 A 第49, 50号ピット (南西より)
 B 第51号ピット土器出土状態 (西より)</p> <p>23 A 第51, 52, 53号ピット(1) (東より)
 B 第51, 52, 53号ピット(2) (東より)</p> <p>24 A 第54号ピット (東より)
 B 第54号ピット土器出土状態 (南より)</p> <p>25 A P-←15区土器出土状態 (東より)
 B P-←16区土器出土状態 (東より)</p> <p>26 第54号ピットおよびP-←15, 16区出土土器(1)</p> <p>27 第54号ピットおよびP-←15, 16区出土土器(2)</p> <p>28 A P-←15, 16区出土土器(3)
 B P-←15区出土土器(4)</p> <p>29 ピット出土土器(1)</p> <p>30 ピット出土土器(2)</p> <p>31 A ピット出土土器(3)
 B ピット出土土器(4)</p> <p>32 A ピット出土土器(5)
 B ピット出土土器(6)</p> <p>33 A ピット出土土器(7)
 B ピット出土土器(1)</p> <p>34 A ピット出土土器(2)
 B 発掘区出土土器(1)</p> <p>35 A 発掘区出土土器(2)
 B 発掘区出土土器(3)</p> <p>36 A 発掘区出土土器(4)
 B 発掘区出土土器(5)</p> <p>37 A 発掘区出土土器(6)
 B 発掘区出土土器(7)</p> <p>38 A 発掘区出土土器(8)
 B 発掘区出土土器(9)</p> |
|--|---|

- 39 A 尧掘区出土石器(0)
B 尧掘区出土石器(1)
- 40 A 尧掘区出土石器(2)
B 尧掘区出土石器(3)
- 41 A 尧掘区出土石器(1)
B 尧掘区出土石器(2)
- 42 A 尧掘区出土石器(3)
B 尧掘区出土石器(4)
- 43 A 尧掘区出土石器(5)
B 尧掘区出土石器(6)
- 44 A 尧掘区出土石器(7)
B 尧掘区出土石器(8)
- 45 A 尧掘区出土石器(9)
B 尧掘区出土石器(10)
- 46 A 尧掘区出土石器(11)
B 尧掘区出土石器(12)
- 47 A 尧掘区出土石器(13)
B 尧掘区出土石器(14)

表 目 次

第1表	第1号竪穴住居址状遺構小ピット一 覧表	第5表	第5号竪穴住居址状遺構小ピット一 覧表
第2表	第2号竪穴住居址状遺構小ピット一 覧表	第6表	第6号竪穴住居址状遺構小ピット一 覧表
第3表	第3号竪穴住居址状遺構小ピット一 覧表	第7表	N 309 遺跡ピットの規模
第4表	第4号竪穴住居址状遺構小ピット一 覧表	第8表	N 309 遺跡ピット一覧表
		第9表	N 309 遺跡遺構出土石器一覧表
		第10表	N 309 遺跡発掘区出土石器一覧表

第1章 発掘までの経過

札幌市教育委員会は、昨年、札幌市西区手稲前田所在の北海道住宅商工協同組合所有地内のN293遺跡の調査を行なった（上野編1974）。この時点では、地所内西側N309遺跡も宅地造成予定地内に入っていたが、未だ買収が終っておらず、次年度以降に造成が予定されていた地域であった。

N293遺跡の調査に際して札幌市教育委員会では、N293遺跡と、その西側隣接地のN309遺跡は、若干時期を違えつつも一連の遺跡であり、これらの遺跡の中心は、むしろN309遺跡である旨を連絡していた。

しかし、遺憾ながら、本年度に入って、北海道住宅商工協同組合と札幌市教育委員会との間に一部連絡の不備があり、N309遺跡地の表土がブルドーザで除去されるという事態が起きた。

急遽、札幌市教育委員会では、破壊の程度を知るため予備調査を実施したが、その結果率にも遺跡の中心部は殆ど元の姿で残っており、表土が除去されているのは、遺跡の外縁部のみであることが判明した。

ともかく、このことは、文化財保護行政にあたって住民側の理解と行政当局の積極的なアピール啓蒙活動が必要であることを痛感させる大きな教訓となった。

調査は、大きな成果を上げて終了したが、とりわけ、縄文時代中期後半の竪穴住居址状遺構群と数多くの土壌の発見は、この時代の生活領域のパターンとその構造を明らかにし、また豊富に検出できた遺物群は、道央部における縄文中期後半期の土器隔年の柱となるであろう。

破壊にせよ発掘調査にせよ、一度消滅した遺跡は、二度と甦えることはない。住民側も、調査に携わる側も、その取扱いに当っては、十二分の配慮が必要であろう。 （石附育三男）

第2章 遺跡の位置と環境 (第1図, 図版1A)

北海道を南北に大きく縦断する石狩低地帯(札幌—苫小牧低地帯)は、文化史的にも、地質学的にも重要な意味をもつ地域である。この低地帯の北側端が石狩海岸であり、この石狩海岸には、地形的に三つに区分される砂丘列がある。この内、最も内陸側にあるのが「紅葉山砂丘」と呼ばれるものである。

本遺跡は、この紅葉山砂丘の南西端に立地している。紅葉山砂丘の後背地には、幅広い泥炭地が広がり、また砂丘の内側には軽川・旧発寒川が流れている。

この紅葉山砂丘は、縄文海進の高頂期ないしはそれ以後に形成されたもので、沖積世の新砂丘である(北川芳男ほか1973, 上杉・遠藤1973)。紅葉山砂丘の形成史を、山田(山田1974a)の記述を借りて表現すれば以下の如くである。「沖積世プレボREAL期に上昇をはじめた海面は平野内部に進入し、札幌市屯田、同西発寒地域に発達する、現地地表下-8~-20m付近に、アカガイ、カガミガイなどの貝殻—C¹⁴年代; 6,800±150Y.B.P. (Gak-4,347)—を含む砂丘を堆積した。紅葉山砂丘列の基礎となる礫堤もこの頃形成された。これとは別に、石狩町生振では標高3mに縄文海進の最大上昇期と考えられる貝殻—5,850±210Y.B.P. (Gak-4,053)—を含む海成砂層が、紅葉山砂丘列の海側に堆積している。ほぼ同時に、砂丘列の内陸側では西発寒でみられるようにプレボREAL期の海成層の上部に、豊平川水系、発寒川水系の礫からなる砂礫層、砂層、シルト層—C¹⁴年代; 5,090±100Y.B.P. (Gak-4,054)—などによって構成される陸成層が堆積した。これらの事実は、アトランティック期の縄文海進が始まる頃には、礫堤列に風で運ばれた砂が集積し、紅葉山砂丘列の形成がはじまっていたため上昇した海面は砂丘を越えて内陸側に入り込まず、現砂丘列の海側に海岸線をたもち、内陸側は広い後背湿地となっていた……その後、後背湿地では……泥炭の堆積がはじまり今日に至っている。」

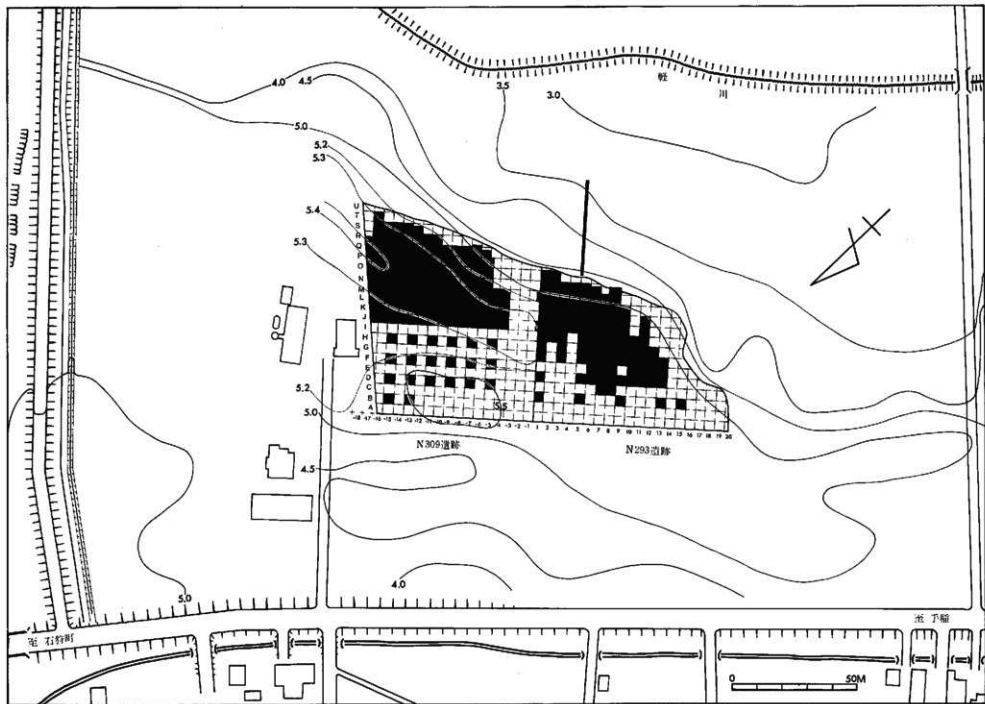
考古学的資料からみた固定年代は、本砂丘に所在する遺跡からサイベツV式(縄文中期初頭)が出土していることから、縄文中期初頭であったろうと思われる。中間列砂丘は、トコロ第6類(C¹⁴; 4,150±400Y.B.P.; Gak-188)が出土していることから縄文中期中葉頃であろうと結論できる(上野編1974)。

本遺跡の営まれた年代は、後述するとおり4,000年B.P.を中心とする縄文中期後半の時期である。花粉分析の結果では、この時期は、Quercus-Juglans 帯に入り、Atlantic 期末期~Sub-boreal 期初期に相当し、現在よりも温暖な時期であった。この後、Sub-boreal 期に当る Quercus-Abies 帯に入ると砂丘の後背地では泥炭層の形成が開始されている(山田1974a, b, 五十嵐・熊野1974)。

(上野 秀一)



第1図 N309道路と周辺の道路の位置 (この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭50道産、第62号)



第2圖 遺跡付近地形圖



第3図 通障免振区配置図および通障開通図 (注: 網をかぶせた部分は免振部分)

第3章 発掘調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法 (第2, 3図, 図版1B)

昨年度調査が実施されたN293遺跡の北東に隣接する本遺跡は、立地条件は勿論のこと、遺跡の営まれた時代や遺跡の性格なども、N293遺跡のそれに極めて近いものであることが、既に予備調査の段階で知られていた。

従って、本遺跡の調査に際して、N293遺跡との関連を考える上での便宜を図るためもあって、発掘区の設定や調査の方法は、全てN293遺跡のそれを踏襲した。

すなわち、発掘区は、N293遺跡の発掘区の区画を延長し、同様に4×4mのグリッドを組んだ。本遺跡においても、4×4mのグリッドの北側と東側に1mずつのブリッジを残す方法で発掘を進めたが、N293遺跡と同様、ほぼ5.0mから5.3mのコンタラインに沿って、遺構と遺物の殆ど大部分が集中しており、この区域では最終的にブリッジを総てはずし、全面的に調査した(第2, 3図)。

なお、N293遺跡との間は、遺構ながら北西から南東に一直線にのびる舗道がつくられ、幅約12mにわたって、一切の調査がなされぬままに、既に破壊されてしまっていた。

従って、発掘総面積は、約2,010m²であった。

第2節 層堆積について

第1章に触れたように、本調査が実施される少し前、宅地造成の第一段階としてか、ブルドーザーによる一帯の削平が敢行され、耕作土の多くが失われていた。この削平は幸い遺構確認面の深さまでには達せず、遺構の大部分は破壊を免れた。

これとは別に、本遺跡の存在する一帯は最近まで畑地として利用されており、N293遺跡におけると同様に、包含層は既に耕作による攪乱をうけている。すなわち、発掘対象区域のうち、遺構や遺物の分布に乏しい部分では、耕作土の直下に、いわゆる地山とも称すべき砂層が直接続くのが普通であった。この部分における遺物の分布は極めて稀薄で、G-(-)15区の耕作土中から若干の土器片および石器が採集されたほかは、F-(-)8区、J-(-)11区の耕作土中から石片がそれぞれ1点ずつ出土したのみである。

耕作土は茶褐色を呈する色調の暗い砂質土で、褐鉄分や火山灰を含有し、やや粘性が認められる。地山と称すべきは、サラサラした粒子の細かな砂の純一な堆積であり、その色調は明るい黄灰色であったり、明るい青灰色を呈したりと、場所によって微妙な差がみうけられた。

一方、遺構や遺物の分布の密な部分では、様相がやや複雑なものとなっている。既述のように、

遺構や遺物は、5.0mから5.3mのコンタラインに沿った砂丘の内陸側に偏在して分布するが、その中でも特に遺構や遺物の集中が顕著に認められる部分がある。この数カ所の遺構、遺物の密集部の周縁では、遺構や遺物に乏しい部分と同じく、耕作上の直下に地山の砂層が続き、遺構が検出された場合には、耕作土を剥いだ地山の砂層の上面が遺構確認面となっている。

ところが密集部内では、耕作土を剥いだ段階で、黒く汚れた砂層や厚く褐鉄分の沈着する砂層などが、不整形に連続して拡がっており、遺構の個々を分離して確認することは容易ではなかった。これら黒色がちの砂層や褐鉄分の多い砂層には、いずれもかなりの量の遺物が含まれている。この密集部での層堆積の様相を以下に個別に説明しよう。

N～P－(－) 5～6区：第21～26号の6連ビットを中心に、既に破壊されていた西部に至るまで、耕作土の下には黒色がちの色調を呈する砂層が拡がっていた。この黒色の砂層が個々のビットに落ち込んだ窪みには、白灰褐色火山灰含砂層がその上の上のっていることがある。この黒色の砂層の拡がりの東端、第2号竪穴住居址状遺構のある一帯では、黒色の砂層が殆ど消失し、かわって褐鉄分の厚く沈着する固い砂層が、耕作土の下に拡がっていた。

O～Q－(－) 8～10区：第3号竪穴住居址状遺構から第13号ビット、第6号竪穴住居址状遺構の検出された一帯にも、耕作土の下に黒色がちの砂層の拡がりが認められた。個々の遺構の上部では、黒色の砂層の堆積がとぎれ、暗灰茶褐色を呈し、部分的に火山灰を含有する砂層が落ち込んだり、灰褐色の火山灰含砂層がのっている場合があった。

Q～S－(－) 15～16区：ここでは耕作土の下に褐鉄分の厚く沈着した砂層が連続と拡がり、遺構の検出には小トレンチを設定する必要がある。遺構の数こそ多くはないが、遺物の分布はかなり濃密であった。遺構の上に形成された窪みには、若干量の火山灰を含有する灰茶褐色の砂が比較的厚く堆積する傾向が認められる。

N～P－(－) 15～17区：耕作土の直下にQ～S－(－) 15～16区から続く、比較的厚く褐鉄分の沈着する砂層が拡がっているが、北へ向うにつれ次第に薄くなり第3号竪穴住居址状遺構のあるあたりでは殆ど消失してしまう。この褐鉄層の下に黒色がちの色調を呈する砂層が堆積するが、これは逆に北へ向って厚くなっていく傾向が認められた。この両者が全面的に遺構をおおいかくしており、個々の遺構確認には、グリッドの区画と同方向の幅50cm程の小トレンチを2m間隔に縦横に走らせなければならなかった。黒色がちの砂層は、遺構のそれぞれの窪みにかなり厚く堆積し、さらにその上に白灰褐色火山灰含砂層がのっている場合が多い。

遺構や遺物の分布の密な部分とそうではない所とで、どうして層の堆積に差が認められるのであろうか。耕作はほぼ同じ深度に及んだはずであり、両者の差は明らかに耕作によるものではない。遺構の営まれた場所では、後の植生や水分の保持などに周囲との差が生じ、黒色がちの砂層の堆積や褐鉄分の沈着などが促進される傾向が強いのかも知れない。はっきりとは分らぬが、保水力に乏しい砂地にあっては、遺構の存否が後の土壌形成に大きく影響することは十分考えられよう。

さて、それぞれの遺構の深さは、それぞれ遺構確認面から測った数値で示されるが、以上述べて

きたように、遺構確認面が必ずしも同一の層ではないことを予めお断りしておく。

また、砂の色調は、その日その日の天候や、乾燥の程度によって微妙に変化するものであり、個々の遺構の覆土の層名は、命名時の諸条件を反映して、かなりまちまちである。これも敢えて統一してはいないことをお断りしておきたい。覆土の層堆積に関しては、後章（第4章第3節）でまとめて述べる。

（高橋 和樹）

第4章 遺構および出土遺物

本遺跡からは、竪穴住居址状遺構が6軒、ピットが都合52基検出された(第3図、図版1B)。

これらの遺構は、第3章に触れたように、ほぼ5.0mから5.3mのコンタラインで示される、砂丘の内陸側の周縁沿いに分布するが、そのうちでも特に、N~P-(-) 5~6区、O~Q-(-) 8~10区、Q~S-(-) 15~16区、N~P-(-) 15~17区の4ヶ所に集中して検出された。

以下に竪穴住居址状遺構およびピットをそれぞれ個別に報告するが、これらのうちには、人為的に掘り込まれ遺構とは見做し難いものも数例含まれている。

第1節 竪穴住居址状遺構

第1号竪穴住居址状遺構(第4図、図版2A)

明るい色調の白灰褐色砂層に掘り込まれた遺構で、平面プランはだまかにいうと南端部の尖った将棋駒型であるが、北東壁の一部がやや外に張り出している。竪口部での大きさは490×348cmを測り、長軸はほぼ南-北の方向をとる。壁の掘り込みは比較的ゆるやかであり、床面は中央部がやや高くなるものの全体的にはほぼ水平な平坦面となっている。深さは26cmとごく浅い。

床面から掘り込まれた小ピットが8個見出されており、それぞれの形や大きさなどは第1表に示した通りである。これらの小ピットの内容物はSP-1, 2, 6には灰色味の強い黄灰褐色砂、SP-3, 4, 5, 7, 8は、褐色がちな黄灰褐色砂である。これら同種の砂層が充填された小ピットは、それぞれ同様の性格をもつものと考えられる。

従って、その配列は、SP-1, 2, 6が三角形に存在し、SP-3, 4, 5とSP-7, 8とは東西両側縁にあって対応関係にあると考えることができる。このあり方は、上屋構造を考える上で極めて示唆的なものといえるかも知れない。

覆土中には多くの遺物が含まれており、中央部北東よりの覆土上層からは大形の扁平な河原石を素材とする石皿(図版47A)と大きな土器破片(トコロ第6類、第12図10)が出土している。

層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、黒色砂層で炭化物の含有が認められる。第Ⅱ層、黒灰色砂層で炭化物および火山灰の含有が認められる。第Ⅲ層、暗灰褐色砂層で若干量の火山灰、木炭の含有が認められ、褐鉄の含有はかなり多い。第Ⅳ層、やや暗い暗灰褐色砂層。第Ⅴ層、青灰褐色砂層で褐鉄の含有はかなり多い。第Ⅵ層、やや暗い青灰褐色砂層。第Ⅶ層、黄灰褐色砂層。第Ⅷ層、やや暗い黄灰褐色砂層。

なお、セクション図で示したKとは、後世に攪乱をうけた部分である。他の遺構に関しても同様で、Kという表記がある場合、それらはいずれも攪乱層を意味する。(高橋 和樹)

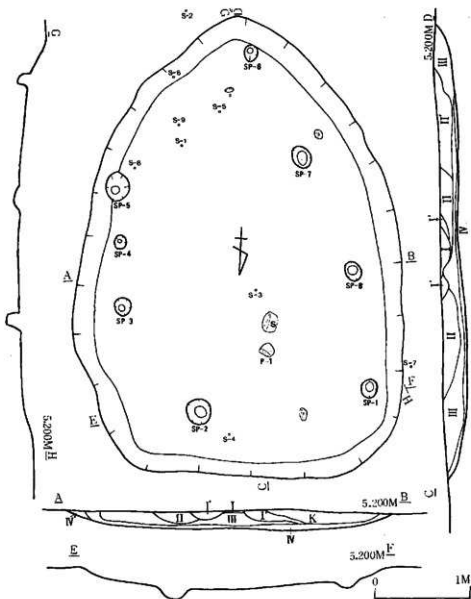
第1表 第1号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表

No.	平面形	規模 cm	深さ cm	内 容 物	備 考
1	不整楕円形	21×17	8.5	黄 灰 褐 色 砂 (灰色味が強い)	軟らかい
2	不整円形	28×26	1.20	黄 灰 褐 色 砂 (灰色味が強い)	内部・底が堅い
3	不整卵形	19×18	8.0	黄 灰 褐 色 砂 (褐色味が強い、砂粒が細かい)	軟らかい
4	不整円形	14×13	4.5	黄 灰 褐 色 砂 (やや褐色味が強い)	先が細い
5	不整楕円形	30×24	4.0	黄 灰 褐 色 砂 (やや褐色味が強い)	
6	不整楕円形	18×14	1.10	黄 灰 褐 色 砂 (灰色味が強い)	
7	不整楕円形	24×19	6.0	黄 灰 褐 色 砂 (やや褐色味が強い)	内部がやや硬い
8	不整楕円形	21×17	15.0	黄 灰 褐 色 砂 (褐黄味が強い)	内部が硬い、カーボンが入っている

遺 物 (第12図1～14, 第14図1～15, 図版6 B, 10A)

1は、肥厚帯上に「く」の字状に、小さい丸棒工具による突引文(沈線文)がある例である。2は、二連の小突起がある例である。3は、低い肥厚帯がある。4、5は、小突起があり、小突起に向けて集合する貼付帯がある。貼付帯上には、撫糸正痕文があり、貼付帯間は、角棒状工具による刺突がある。6は二本単位の貼付帯があり、その間に半截竹管による連続刺突文がある。7も、半截竹管による連続刺突文がある。8は、無節の縄文地に、口唇部上および口唇部直下に、平筥による連続刺突文がある。さらに懸垂状の貼付文があって、その側面にも連続刺突文がある。なお、この貼付文には、中空に穴が開けられている。裏面にも、同様の縄文がある。9～12は、トコロ第6期である。11の肥厚帯上の刺突文の、工具は半截竹管であり、9、10は、平らな筥である。13、14は、底部片である。

石器は、1が定角式半磨製石斧で、刃部を欠損する。2は、敲石。図下端は、繰返しの際打で、耗磨しており、全体に焼けて、黒ずんでいる。3は石錐、4は砥石で、共に砂岩製である。5、6は、有茎尖頭器(石鋸?)の基部破片である。6は、硬質頁岩である。7、8は、縦形石匙であるが、つまみは明瞭ではない。9、10は、つまみのない縦形の削器(ナイフ)である。刃部の加工は背が高い。各々2個に割れて出土した。11～13は、縦長剥片に簡単な調整をした削器である。14は、小形の五角形に近い有茎石鏃である。両面共、幅広く素材面が残る。15は、部厚い掘器である。b面は原石面で、扁平石核を再利用した例かもしれない。図版47Aの右に示したものは、大形の扁平な河原石の側縁の一部(1/2程)を打割し、形態を整えた石皿で、写真図版で示した面は、軽く燃った痕がある。大きさは22.1×16.2cm、厚さ6cm、重量は3,280gで、石質は角閃石安山岩である。(上野秀一)



第4図 第1号竪穴住居址状遺構実測図

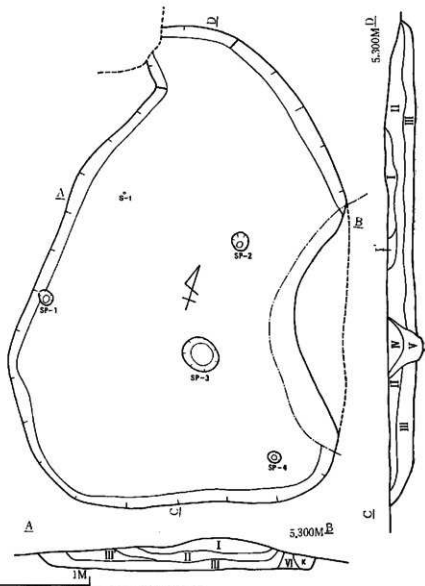
第2号竪穴住居址状遺構 (第5図, 図版2B)

耕作土を取り除いた段階で、かなり広い範囲にわたって灰茶褐色を呈する暗い色調の砂層が厚く堆積する部分が見出され、その下に何らかの遺構の存在が想定された。そこで十文字にベルトを築し、この砂層を掘込んでゆくと、次いで褐鉄分の含有がかなり多くて非常に堅い砂層が現われた。さらにこの層を取除くと色調の明るい、やわらかくてサラサラした暗青灰色を呈する砂層に変わる。これを地山とみなし、堅い砂層を取除いて認められるものがこの遺構の実体であると一応の判

断を下した。ところがこの堅い砂層は部分的に堅さが大きく異なる上、色調も微妙に変化しており、北～北東部、南東部、西部の一部は堅い部分を取除いてすぐに壁や床が確認されたが、他は、壁・床の検出に困難を極めた。必ずしも明確ではないが、最終的には平面図に示したようなプランを有する遺構と思われる。

東壁の大部分はいわゆる風倒木痕で削りとられ、また北西端に奇妙な張出部が付属しているが、全体的には不整五角形の形状を呈し、壕口部での大きさ506×(354)cmを測る。長軸方向は北北西—南南東をとる。壁の掘り込みはほぼ45°に近く、床はほぼ水平な平坦面である。深さは34cm程である。床面には3個の小ピットが見出されている、充填されていた砂層の観察から、床面の一部の色調が多少変化しただけのものである可能性が高い。なお、SP-3は最上層から掘り込まれており、本遺構とは直接には関係のない小ピットである。

層の堆積は以下の通りであるが、かなり褐鉄分の多い砂層に残んど上から下まで覆いつくされ、堆積状態は他の竪穴住居跡状遺構の層堆積とはかなり異なっている。第Ⅰ層、灰茶褐色砂層で若干量の火山灰が含まれている。第Ⅰ'層、第Ⅱ層と同様だが色調のやや明るい灰茶褐色砂層。第Ⅲ層、褐鉄をかなり含有する暗灰褐



第5図 第2号竪穴住居跡状遺構平面図

色砂層。第Ⅲ層，非常に堅い暗青灰色砂層。第Ⅲ'層，第Ⅲ層と同様だがやや褐色がちの暗青灰色砂層。第Ⅳ層，灰黒褐色砂層。第Ⅴ層，やや褐色がちの暗灰色砂層。

第Ⅵ層，暗黄灰色砂層である。

(高橋 和樹)

第2表 第2号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表

No.	平面形	規模	深さ	内 容 物	備 考
1	不整楕円形	17×14 cm		暗 青 灰 色 砂 (地山か?)	
2	不整円形	19×18		暗 青 灰 色 砂 (地山か?)	
3	不整楕円形	40×33	37.5	暗 灰 色 砂 (やや褐色味がある)	最上層から掘込まれている
4	不整卵形	14×12		暗 青 灰 色 砂 (地山か?)	

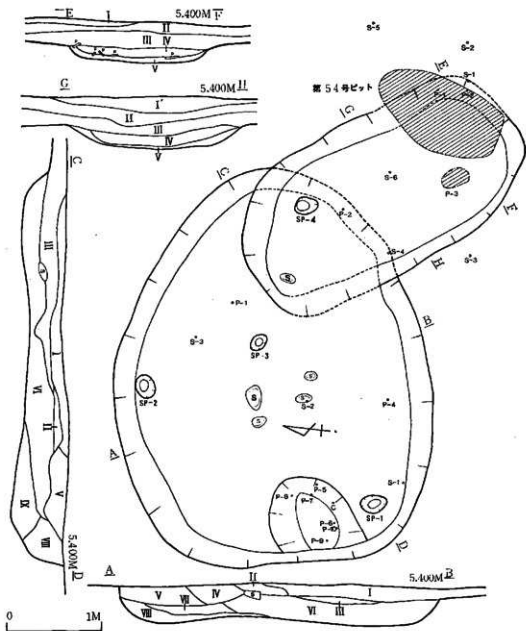
遺 物 (第12図15~17, 第14図22, 図版6B, 10A)

15は，低い肥厚帯と小突起を有し，小突起下には，縦の貼付文がある。これと連結するように横方向の貼付文もある。肥厚帯上および貼付帯上には，沈線文(刻文)がある。16は，肥厚帯上には，縄文原体を押し，凹みを付けている。17は，弧状，縦方向の細い貼付文がある。22は，有基石銘の基部破片である。a面とb面右に擦痕が観察される。
(上野 秀一)

第3号竪穴住居址状遺構 (第6図, 図版3A, B)

規模は，長軸425cm，短軸最大幅335cmの不整五角形を呈する遺構である。長軸方向は，東北東一西南西をがし，深さは，遺構確認面より57cmを測る。壁の状態は，急傾斜で立ち上り，床面は，中央部が若干高く，壁に沿った所が低い傾向が認められるが，ほぼ平坦である。床面には4個の柱穴状小ピットがあり，3個はコーナーに，1個は中央部に配されている。西壁部に87×85cm，深さ17cmの不整楕円形を呈するピットが確認され，数点の土器片を検出した。

東側部分は，第54号ピットの一部を削平し，構築されている。新旧関係は，本遺構の方が新しい。埋没状況は，第Ⅰ層，白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層，若干の火山灰を含む黄茶褐色層。第Ⅲ層，火山灰を含む黄灰色砂層。第Ⅳ層，やや黄味のある黒色砂層。第Ⅴ層，黒灰色砂層。第Ⅵ層，暗青灰褐色砂層。第Ⅶ層，暗灰褐色砂層。第Ⅷ層，暗黄灰色砂層。第Ⅸ層，黒褐色砂層である。本遺構中より5個の河原石が検出されているが，すべて第Ⅵ層上面にて確認されている。南側部分では鉄分の沈着が顕著に認められた。
(内山 真澄)



第6図 第3号竪穴住居址状遺構および第54号ピット実測図 (●は土器集中出土地点)

第3表 第3号竪穴住居址状遺構小ピット一覽表

No.	平面形	規模	深さ	内 容 物	備 考
1	不整楕円形	28×20	8.6	黒 褐 色 砂 暗 青 灰 褐色 砂	
2	不整楕円形	25×20	5.4	暗 青 灰 褐色 砂 (地山か)	
3	不整楕円形	20×15	6.5	暗 黄 灰 褐色 砂	
4	不整楕円形	25×17		黄 灰 褐色 砂	

遺物 (第12図18~30, 第13図1~5, 第14図16~21, 図版6B, 7A, 7B, 10A)

18は、肥厚帯上に斜めの連続貼付文と環状の貼付文があり、肥厚帯下には、横走する絡繩体圧痕文と半載竹管文が繰り返し横走する。19は肥厚帯上に斜めの貼付文があり、その上に捺糸圧痕文がある。20は、横走する貼付帯があり、その間に、棒状工具による刺突文がある。21は肥厚帯上に縦位の貼付文が連続してあり、この上とその間に絡繩体圧痕文がある。肥厚帯下には、一条の絡繩体圧痕文が横環し、その下には捺糸による馬蹄形圧痕文がある。22は、剝脱しているが、2本単位の横走する貼付文がある。23は、風化しているが肥厚帯と小突起を有し、突起下には、中空の肥手状の貼付文がある。24は、肥厚帯があり、胴部には捺糸文が横走している。25は、肥厚帯があり、この上は地文と同じ縄文がある。26は、肥手部分の破片と思われる。全面に沈線文が八の字状に入っている。中央には、刺突がある。27は、胴部片で、斜行縄文がある。28~30は、トココ第6類である。28には、裏面に縄文はない。第13図1~4は、幅広の扁平な貼付帯が縦横に走り、この上に平笥による連続刺突文がある。トココ第6類の胴部片である。5は底部片である。

石器は、16が磨製石斧の柄部破片である。17, 18は、頁岩製の縦形石匙である。ただし、17は、素材は少し幅広である。19は、幅広の縦長剝片に調整を施した削器（つまみのないナイフ）である。20は扁平石核の ridge flake に簡単な調整を施した例である。21は、頁岩製の有蓋石鏝である。(上野 秀一)

第4号壑穴住居址状遺構 (第7図, 図版3B, 4A, B, 5A)

壑口部での大きき 457×280cmを測る、南西端の角が尖ったやや細身の不整五角形プランを呈し、長軸方向は北西-南東をとる。壁の掘り込みはほぼ45°に近い角度をとる。床面は多少緩やかに波打つが、全体的にはほぼ水平な平坦面と見なしうる。深さは43cm程である。床面西半部には南北方向にほぼ直線的に並んだ3個の小ピットが見出され、いずれもかなり色調の黒っぽい暗黄灰色砂が充填されていた。

層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、黄灰色火山灰含砂層。第Ⅱ層、黒色砂層で若干褐色がちの色調を呈しやわらかい。第Ⅲ層、灰色がちの色調を呈する黒色砂層でサラサラしている。第Ⅳ層、真黒で堅い黒色砂層。第Ⅴ層、黒灰色砂層。第Ⅵ層、黒色砂層で灰褐色がちの色調を呈しネバっこい。第Ⅶ層、暗黄灰色砂層。

以上の層のうち第Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ, Ⅵ層の各層は、その黒色がちの色調、遺物の出土状態や密度などより判断して、ほぼ一連の砂と理解しても大過ないものと思われる。P-1, 2, 3として示される土器片のまとまりをはじめとする数多くの遺物は殆ど全てこの一連の黒色がちの砂層に含まれていた。ここで問題となるのはこの一連の黒色がちの砂層の遺構外への拡がりであり、本遺跡の営まれた時代とはほぼ同時期の壑穴住居址の調査例に照らして、床面より一段高いベンチ状の構造の存在は十分考えられるところである。床面の範囲内に堆積する黒色がちの砂層と、さらにその外へと拡がる層との間に殆ど何の断絶もないことは、床面の範囲内のうちでも特に西~南西部に堆積する

黒色がちの砂層中に包含されていた無数の黒耀石のチップが間断なくさらに床面の範囲外まで続いで分布していた事実から間違いない所と思われる。そこでこの黒色がちの砂層の分布はというと、ある部分では明瞭な立上りをみせて消失したり、ある部分では次第に色調が薄れてゆき他の砂層との境も不明瞭のうちに断ち消えてしまったり、第3号壑穴住居址状遺構の第Ⅳ、Ⅴ層として表現されている部分のように他の遺構に落ち込んでしまっていたり、遂にベンチ状の付属構造が存在するの否かは確認できずにおわった。

(高橋 和樹)

第4表 第4号壑穴住居址状遺構小ピット一覧表

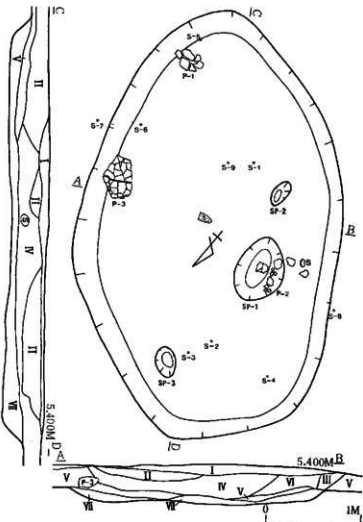
No.	平面形	規模	深さ	内 容 物	備 考
1	不整楕円形	71×50	12	暗 黄 灰 色 砂 (かなり黒い)	
2	不整楕円形	30×15	8.0	＃	
3	不整楕円形	32×21	8.6	＃	

遺 物

(第10図、第11図1、2、
第13図6～18、第15図1～
16、図版4B、5A、7B
8、9、10B)

第10図は、口唇部を欠損するが、現存高47.8cm、現存最大径36.8cm、底径14.9cmの深鉢形土器で、器厚は12～18cmで、部厚い。胴最大幅は、口縁部近くにある。口縁部には、幅12mm程の貼付文が2条以上横環し、その間には同様の貼付文が鋸歯状に施されている。貼付文と貼付文上には、地文と同様の縄文があり、貼付文の交点には、円形刺突文がある。地文は、第二種結節（アヤクリ文）を有する羽状縄文で、胎土には、繊維は含まれていない。色調は、灰褐色で白っぽい。内面は、特に整形されていない。

第11図1は、底部を欠損し、



第7図 第4号壑穴住居址状遺構実測図

現存高は19.5cm, 推定口径25.7cm, 器厚10~13mm程の半完形の深鉢形土器である。肥厚帯を有し、現存部で、二連の小突起があるが、全部で幾つあるかは明確ではない。肥厚帯上には、幅6mm程の貼付文が鋸歯状に巡り、突起下ではそれが渦巻いている。口縁部には2本単位の同様の貼付文が横環し、この間を2本ないし1本単位の貼付文が半弧状（ループ状）に施されている。ただし、この貼付文の繰返りのパターンは同じではない。これらの貼付文上およびその間には、一原体の長さ2.7cm程の絡繩体疋痕文が施されている。地文は、第一種結節のある羽状繩文かと思われる。胎土には、繊維を少量含み、内面は整形されている。色調は茶褐色である。

第11図2も、底部を欠損するが、現存高20cm, 口径27.4cm, 器厚14~15mmの深鉢形の半完形土器である。胴張りし、口縁部は心待ち外湾する。口縁には、肥厚帯があって、この上には平らな筥による連続刺突文が二段巡る。この下には、円形刺突文が一列横環している。地文は、第一種結節のある羽状繩文で、内面は特に整形していない。胎土には、若干の繊維を含んでいる。色調は、茶褐色である。

第13図6, 7は、低い肥厚帯と突起を有し、この上およびその下に貼付文が施され、貼付文上そしてその間を燃糸疋痕文で充填している例である。8は、弁状突起の破片と思われ、それを縁どりするように2本単位の貼付文があり、その間に燃糸疋痕文、半截竹管文がある。突起中央には、丸窓が開けられている。9は、部厚い貼付帯が口唇部直下にあり、小突起上まで連なっている。その下に斜・縦方向の貼付帯がある。貼付帯上には、繩文原体を押し込んでいる。10は、縦と環状の貼付文が肥厚帯上にある。この上とその間に絡繩体疋痕文がある。11は、縦の貼付文があり、同様にこの上とその間に燃糸疋痕文がある。12, 13は、2本単位の横走る貼付帯がある。12には、この上とその間に絡繩体疋痕文があり、13は繩文原体を押し込んでいる。14~17は、トコロ第6類である。16は、円形刺突文がかなり下にある。18は、底部片である。

石器は、出土数が多い。第15図1は、有茎の石鋸であり、2~5は、大形の有茎石鏃である。2は、尖頂部が大きく石鋸のそれと似るが基部が小さいので石鏃と考えるのが妥当である。6は、有茎石鏃の基部破片であろうか。7~10は、両面体石器の破片である。形態からいってすべて削器（ナイフ）であろうと思われる。11は、両面共に原石面であるが、一側縁の両面に二次加工がある。12, 13は、共に少し幅広の縦長剥片を素材にした削器（ナイフ）である。12は、簡単なつまみがあるとみえる。14~16も、矩形ないしは縦長の剥片に簡単な二次加工を施した削器である。17は、石質がもろく風化しているが、擦痕が観察されるので、砥石ないしは擦石の一種と考えられる。（上野 秀一）

第5号壑穴住居址状遺構（第8図, 図版5B）

規模は、長軸390cm, 短軸の最大幅350cmで、東壁部分が250cmを測る。不整五角形を呈し、長軸方向は西北西—東南東を示す。深さは、遺構確認面より58cmである。壁の状態は緩やかに立ち上り、床面はほぼ平坦で、軟弱ではあったが地山との区別は明瞭であった。床面に柱状穴の小ビッドが、コーナーに3個、東側部分に1個配され、西壁部に35×20cmの範囲で炭化物（第8図C）が検出された。

埋没状態は、上層南側全域が、深さ20~30cmにわたって大きく攪乱を受けている。第Ⅰ層、火山灰を含む白灰褐色砂層。第Ⅱ層、火山灰を含む黄灰色砂層。第Ⅲ層、火山灰を少量含む灰褐色砂層。第Ⅳ層、暗灰褐色砂層。第Ⅴ層、灰褐色砂層。第Ⅵ層、暗灰茶色砂層。第Ⅶ層、黒色砂層。第Ⅷ層、やや暗い暗黄灰色砂層。第Ⅸ層、青灰褐色砂層。第Ⅹ層、暗灰色砂層である。(内山 真澄)

第5表 第5号竪穴住居址状遺構小ピット一覧表

No.	平面形	規模	深さ	内 容 物	備 考
1	不整円形	28×26 cm	9.0 cm		
2	不整楕円形	39×34	14.7	暗 灰 色 砂	
3	不整卵形	22×16	7.2		
4	不整卵形	21×19	9.7		

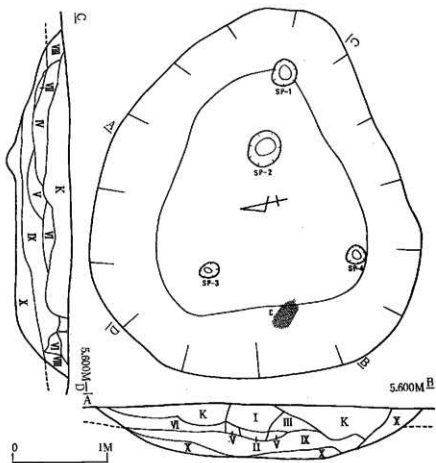
遺 物

(第13図19~

22, 図版7 B)

19は、小突起と部厚い貼付文があり、この上に絡縄体痕文がある。20は、肥厚帯上に縦位の連続貼付文のある例で、貼付文上には縄文がある。21は、口縁部に近い胴部片で、第二種結節（アヤクリ文）があり、裏面にも縄文がある。22も、胴部片でやはり第二種結節がある。色調は灰褐色で、器は厚い。石器は出土していない。

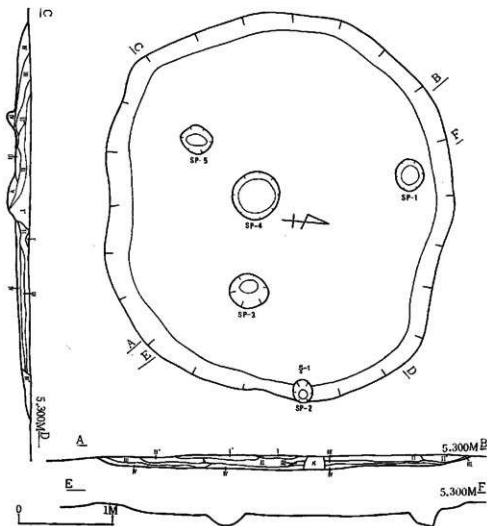
(上野 秀一)



第8図 第5号竪穴住居址状遺構実測図

第6号竪穴住居址状遺構 (第6図, 図版6A)

上述してきた竪穴住居址状遺構がほぼ不整五角形といった形状の、長軸上的一端に尖った角が突き出す平面プランを有するのとは異なり、本遺構は不整六角形あるいは不整形円形といった形状で、尖った角が認められない。開口での大きさは、416×370cmを測り、強いていうなら長軸方向はほぼ東-西をとる。掘り込みは比較的ゆるやかで、床はほぼ水平な平坦面をなす。深さは16cm程。床面には比較的大きな小ピットが4個穿たれており、南北の方向に対をなすSP-1とSP-5にはやや硬い砂層が、東西の方向に並ぶSP-3とSP-4にはやわらかな砂層が充填されていた。東壁上のSP-2には耕作土がつまっております、かなり新しい時代の所産と判断される。



第9図 第6号竪穴住居址状遺構実測図

層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、暗灰色火山灰質砂層。第Ⅰ'層、明灰色火山灰質砂層。第Ⅱ層、暗茶褐色砂層で若干量の火山灰の含有がみられる。第Ⅱ'層、黒灰色砂層。第Ⅲ層、灰茶褐色砂層。第Ⅳ層、黄灰層色砂層、第Ⅳ'層、暗灰色砂層。第Ⅴ層、明灰褐色砂層。第Ⅴ'層、灰褐色砂層。
(高橋 和樹)

第6表 第6号竪穴住居址状遺構小ピット一覽表

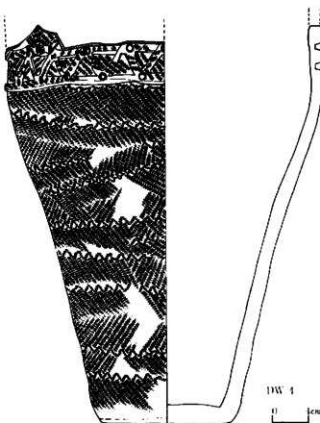
No.	平面形	規模	深さ	内 容 物	備 考
1	不整円形	34×30 cm	17.5 cm	明 灰 褐 色 砂	やや硬い
2	不整楕円形	24×20	12	耕 作 土	軟らかい
3	不整卵形	41×36	13	明 灰 褐 色 砂	軟らかい、先が細い
4	不整円形	51×49	8.3	明 灰 褐 色 砂	軟らかい
5	不整方形	30×28	12.4	黄 灰 褐 色 砂	硬い

遺 物 (第11図3, 第14図23, 図版9)

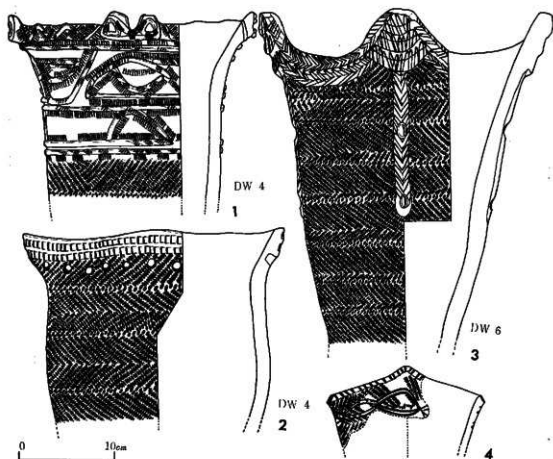
第11図3は、底部に欠損するが、現存高35.3cm、推定口径28cm、器厚14~19mmの半完形土器である。

器形は、深鉢形で、胴張りは顕著ではない。弁状の突起は4個あったものと思われる。口縁部には、幅広の貼付帯が2条巡り、肥厚帯を形造っている。この幅広の貼付帯は、突起部分では段になっており、突起下にも懸垂状に長い貼付文が施されている。これらの貼付帯(文)上には、半截竹管による連続の内面突引文がある。また、懸垂状貼付文の中央と末端には、指頭によるへこみをつけている。地文は、第一種結節のある羽状縄文で、胎土には少量の繊維を含んでいる。内面は研削されていて、色調は黄褐色である。

第14図23は、縦長剥片の側縁に簡単な調整を施した削器(ナイフ)である。バルブ部分を欠損する。(上野 秀一)



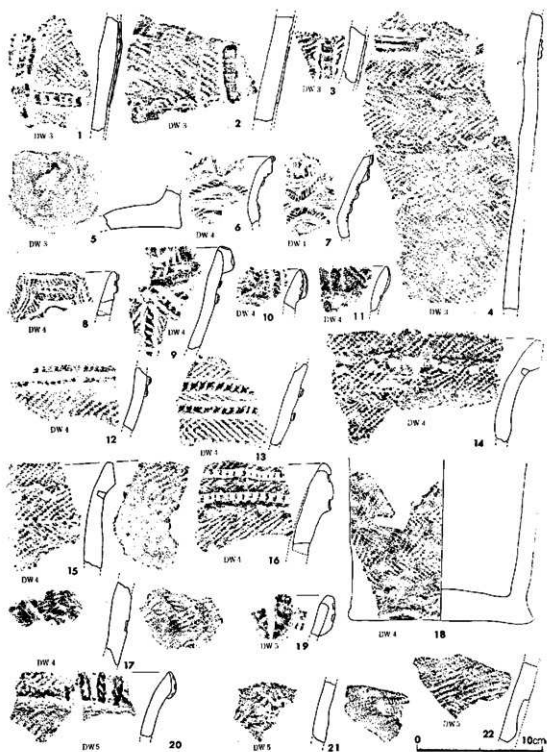
第10図 竪穴住居址状遺構(第4号)出土土器実測図(1)



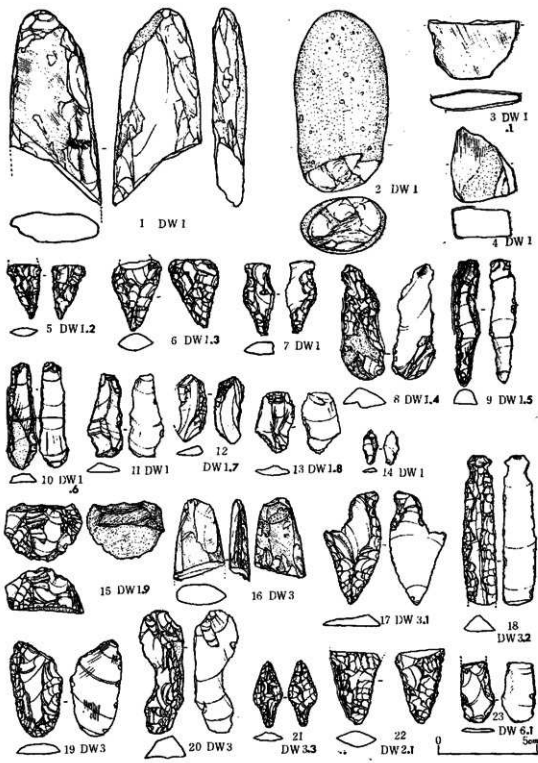
第11図 竪穴住居址状遺構出土土器実測図(2) (DWとは、竪穴住居址状遺構をさす)



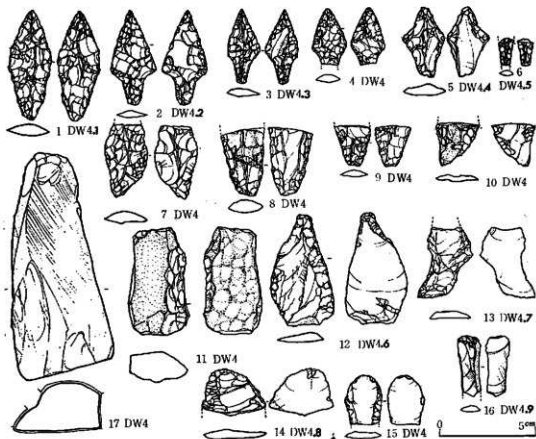
第 12 圖 壁穴住居址狀遺構出土土器拓影圖(1)



第 13 图 整穴住居址状遺構出土土器拓影图(2)



第14图 聚穴柱居址状遗址出土石器实例图(1)



第15图 窑穴住居址状遺構(第4号)出土石器実測図(2)

第2節 ビ ッ ト

第1号ビット (第16図, 図版11A)

横口75×63cmの不整円形を呈するビットで、深さ23cm、断面形はボール状である。

層は3つに分かれるが、同じ茶褐色砂層で下層ほど色調が明るくなっている。

本ビットからは、ほぼ一個体分の土器が東側の覆土から底面にかけて出土した。

(伊藤 加代子)

遺 物 (第31図1, 図版29)

器高23cm、口径23.6cm、底径10cm、器厚7~11mmの深鉢形の完形土器である。胴部はややふくらみ、口縁部は大きく外筒する。肥厚帯はないが、口唇部直下に幅5~6mmの貼付文が鋸歯状に巡っている。貼付文上には、墨糸瓦痕文が施こされている。口縁部は平縁で、平氏である。底部の張り出しは顕著ではない。地文は、第一種結節のある羽状縄文であるが、所々擦り消されている。擦消部分には、横に走る整形痕がある。土器内面は、滑らかに整形され、光沢をもっている。胎土には、繊維を含んでいて、色調は、黄褐色~黒褐色である。

(上野 秀一)

第2号ビット (第16図, 図版11B)

94×86cmを測る不整円形のビットであるが、その東側に長さ62cmの舌状の突出部が付属する。長軸方向は、西北西~東南東である。突出部の體は軟弱で、掘り込みは浅く緩やかである。ビットの断面形は、ボール状を呈する。層の堆積は、第Ⅰ層、灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色火山灰含砂層。第Ⅲ層、灰茶色砂層。第Ⅳ層、暗灰茶色砂層。第Ⅴ層、青灰褐色砂層。第Ⅵ層、灰黒色砂層。このうち第Ⅱ、Ⅲ層には若干の火山灰が含まれていた。

(山下 芳教)

遺 物 (第33図1~3, 第38図1, 図版31A, 33B)

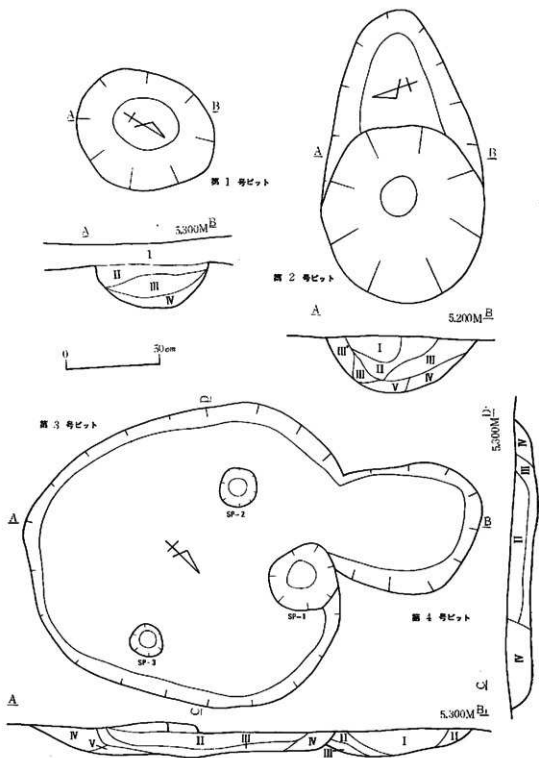
第33図1, 2は、天神山式、3は、サイベ沢Ⅳ~Ⅵ式に相当するものである。第38図1は、縦長剝片の側縁に調整を施こした削器(ナイフ)である。バルブ部分は欠損する。硬質頁岩製。

(上野 秀一)

第3, 4号ビット (第16図, 図版12A)

両ビットは、切合い関係から第3号ビットの方が新しい。

第3号ビットは横口170×160cmの不整台形を呈し、深さは遺構確認面より13cm程である。立上りは、南側部がやや緩やかなほかは急傾斜である。床面はほぼ平坦で非常に硬く、3個の小ビットがある。SP-1は、37×36cm、深さ9.3cmを数え、内容物は黒色砂層で硬い。SP-2は、22×21



第16図 第1号、第2号、第3号、第4号ピット実測図

cm、深さ16.5cmで、内容物は黒色砂層で、底面・壁共に非常に硬くしっかりしている。若下の木炭を含む。SP-3は、18×16cm、深さ3.5cmで浅く、内容物は暗灰色砂層で、床面・壁共にやわらかい。

埋没状況は、第Ⅰ層、耕作土と思われる暗灰茶色砂層。第Ⅱ層、黒色砂層。第Ⅲ層、灰黒色砂層。第Ⅳ層、灰茶色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層である。

第4号ピットは、第3号ピットによって、東側壁が一部削り取られており、現存開口(85)×71cmで、不整楕円形を呈し、深さは約13cmである。長軸方向は北西—南東をとる。

埋没状況は、第Ⅰ層、青灰褐色砂層。第Ⅱ層、明青灰褐色砂層。第Ⅲ層、黄灰褐色砂層である。

(内山 真澄)

遺物 (第31図2, 第33図4~6, 第39図4, 図版29, 31A, 34A)

第31図2は、第3号ピットから出土したほぼ完形の土器である。器高35cm、口径25cm、底径11.8cmで、器厚は6~8mmを数える。器形は、深鉢形で、胴部はややふくらんでいる。底部は平底で、少し張り出しが認められる。口縁部には、肥厚帯があり、小突起は推定4個ある。突起の形状はいずれも破損していて不明である。肥厚帯上には、横方向の幅6mm程の貼付文が2条施され、各突起の下部はボタン状の貼付があり、この上にも環状に貼付文がある。さらにこの下口縁部に、懸垂状に貼付文がある。この突起下の懸垂状貼付文の間は、7本の貼付文が半弧状に施されている。上、下3本単位で中央に1本ある。これらの貼付文上には、縄文原体の圧痕がある。補修孔が対になって一組ある。地文は、第1種結節のある羽状縄文である。内面は、きれいに磨かれ、光沢をもっている。胎土には、繊維を含み、色調は黄褐色~黒褐色である。

第39図4は、第3号ピットから出土した小形狭長な石斧の基部破片である。

第33図4~5は、第4号ピットから出土した土器である。4は、羽状縄文地に鋸歯状および横方向の貼付文があり、その上に縄文原体による圧痕文がある。6も横走する貼付文上に同様の圧痕文がある。サイベ沢Ⅳ式か。5は、底部片である。

(上野 秀一)

第5号ピット (第17図, 図版12B)

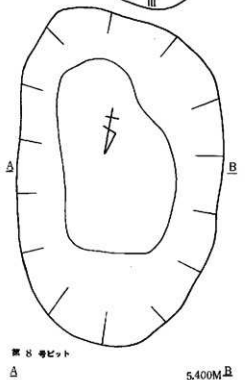
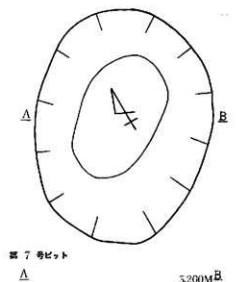
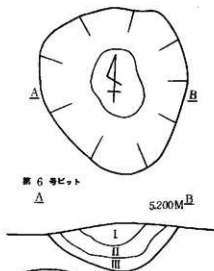
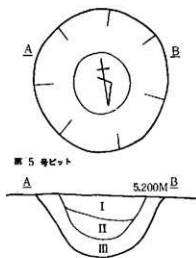
直径75cmのほぼ円形の開口部を有し、深さは33cmである。断面形はボール状をなす。層の堆積は、第Ⅰ層、灰茶褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰色砂層。第Ⅲ層、黄灰褐色砂層であり、全体にしまっているが、第Ⅰ層は、第Ⅱ、Ⅲ層よりも若干やわらかい。

(笠井 衛二)

遺物 (第33図7, 8, 図版31A)

7, 8共に、第1種結節の羽状縄文を有する胴部片である。焼成はよく、内面は滑らかで、サイベ沢Ⅳ~Ⅴないし天神山式のグループである。

(上野 秀一)



0 50cm

第17図 第5号、第6号、第7号、第8号ピット実測図

第6号ピット (第17図)

不整な卵形を呈し、大きさは88×78cm、深さ26cm。壁は東側がやや急角度に掘り込まれているが、西側では緩やかで、断面形は、ボール状である。長軸方向は北北西—南南東をとる。

層の堆積は、第Ⅰ層、黒色と暗灰色の火山灰含砂層で、古い時代の攪乱と思われる。第Ⅱ層、暗灰色火山灰含砂層。第Ⅲ層、白灰褐色砂層である。

遺物は、全く出土していない。 (高橋 和樹)

第7号ピット (第17図)

横口124×94cmの不整楕円形を呈するピットである。深さは29cm。横断面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立上っている。長軸方向は北東—南西をとる。

覆土は、第Ⅰ層、火山灰を含む白灰褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰茶褐色砂層。第Ⅲ層、灰茶褐色砂層。第Ⅳ層、暗灰褐色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層である。 (伊藤 加代子)

遺物 (第33図10, 11, 図版31A)

共に副部片で、10は羽状縄文、11は斜行縄文である。焼成はよく、内面は比較的滑らかである。

(上野 秀一)

第8号ピット (第17図)

不整楕円形の横口部を有するピットで、大きさは、181×110cm、深さ51cm程である。横断面は、丸味を帯びており、平坦ではない。断面形はボール状である。長軸方向は北北西—南南東である。層の堆積は、第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ、Ⅲ層、灰褐色砂層で、若干の火山灰を含み、第Ⅳ層は、第Ⅲ層よりやや白っぽい。第Ⅳ、Ⅴ層は、黄灰褐色砂層で、第Ⅳ層は、第Ⅱ、Ⅲ層よりやや明るく、第Ⅴ層は、第Ⅳ層よりやや暗い。両層には褐鉄が多く含まれている。

(長谷川 克治)

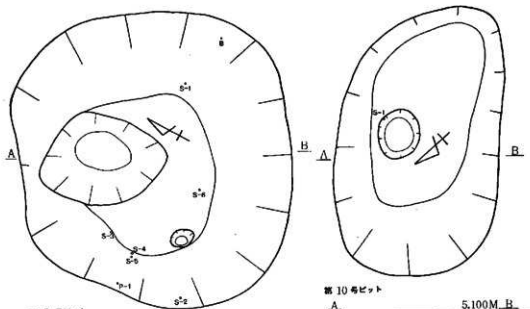
遺物 (第33図9, 第38図2, 図版31A, 33B)

9は、底部片で少し張り出しがある。第38図2は、有茎石織の破片である。 (上野 秀一)

第9号ピット (第18図, 図版13A)

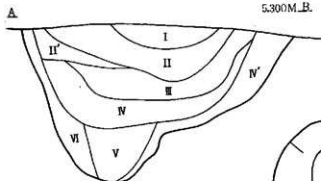
横口部は不整な隅丸方形を呈し、大きさは167×157cmを測る。長軸方向は必ずしも明瞭ではないが、北北西—南南西をとるものと思われる。

このピットの北東から南西にわたる部分では、比較的急角度に掘り込まれて横底部に至る。さらにその面から急角度に掘り込みがあり、二段構造を示す。一方、北西側の壁は最深部に至るまで段差なく急角度に掘り込まれ、その深さは84cmを測る。上方の横底部の南西端には、13×9cmの不

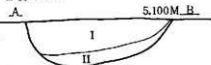


第 9 号ピット

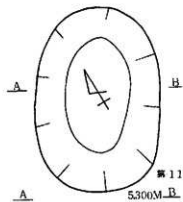
第 10 号ピット



5.300M.B.

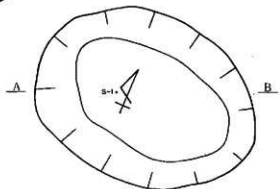


5.100M.B.



第 11 号ピット

5.300M.B.



第 12 号ピット



5.200M.B.



第18図 第9号, 第10号, 第11号, 第12号ピット実測図

整楕円形の小ピットが掘られている。覆土中には比較的多くの遺物が見出されているが、その多くは北東から南西にわたる部分に分布が集中するようである。

層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、第Ⅱ層よりやや明るい暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、白灰褐色砂層で第Ⅰ層より暗い。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層。第Ⅵ層、殆ど褐鉄を含まず第Ⅳ層より暗い黄灰褐色砂層。第Ⅶ層、灰色砂層で若干量の火山灰が含まれている。第Ⅷ層、灰褐色砂層。これらのうち第Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ層にはそれぞれ若干量の褐鉄が含まれている。

(高橋 和樹)

遺物 (第33図12~16, 第38図3~10, 図版31A, 33B)

12, 13は、肥厚帯上に貼付がある例で、14は肥厚帯上およびその直下に、棒状工具による刺突がある例である。16は、羽状縄文地に横走する貼付帯が観察される。貼付帯上には、地文と同様の縄文が施されている。15は、複節縄文である。

第38図3は、小形の両面体石器、4は削器の破片、5, 8は、硬質頁岩製の両面体石器(石槍?)の破片、6, 7は、かなり部厚い片面体石器の破片である。9は、石鏝の破片である。10は、硬質頁岩製の縦形石匙である。

(上野 秀一)

第10号ピット (第18図, 図版13B)

隅丸長方形の南端が若干張り出した平面形を呈するピットで、その開口部の大きさは、149×86 cm、深さ25cmを測る。坑底は丸味を帯びており平坦ではない。掘り込みは東側ではかなりの急傾斜である。長軸方向は、北西-南東である。ピットの内部には、27×22 cmのほぼ円形の小ピットが1個見られた。層の堆積は以下の如くである。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、灰褐色砂層で、若干の火山灰が含まれている。

(長谷川 克浩)

遺物 (第33図17~19, 第38図11, 図版31B, 33B)

17は、肥厚帯と小突起を有しこの上に沈線文を施している。その下には貼付文が観察できる。18, 19は、幅広の深い沈線文が横走する。18には、口唇部上にも、地文と同様の縄文がある。第38図11は、石鏝である。

(上野 秀一)

第11号ピット (第18図, 図版14A)

坑口部での大きさ98×66cmを測る不整楕円形のピットで、深さは15 cm。掘り込みは緩やかで断面形は皿状を呈する。長軸方向は北東-南西をとる。層の堆積は、第Ⅰ層、灰茶色砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層。第Ⅲ層黄灰褐色砂層となっている。

遺物は、土器片若干と石片が1個出土したのみである。

(高橋 和樹)

第12号ピット (第18図, 第38図12, 図版33B)

坑口部での大きさ120×90cmを測る不整形円形のピットで、深さは21cm程である。掘り込みの角度は東側でややきついほかは、全般的になだらかで、坑底面は比較的平坦である。長軸方向はほぼ東一西をとる。層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、黒褐色砂層。第Ⅱ層、茶褐色砂層。第Ⅲ層、黒色砂層。第Ⅳ層、黒灰色砂層。

このピットは、覆土・壁も非常に固く、層堆積も、他の例とは著しく異なっている。人為的な遺構ではない可能性もある。

遺物は、削器の破片が出土している (第38図12)。 (高橋 和樹)

第13号ピット (第19図, 図版15A)

坑口部での大きさ241×240cmを測る大きなピットで、平面形は西側のややすぼまる卵形であるが、大まかには不整形とみることできる。掘り込みは緩やかで壁から坑底への移行もその境は必ずしも明瞭ではなく、断面形は皿状を呈する。深さ23cm。長軸方向を強いて求めるなら東北東一西南西をとると思われる。坑底中央部に16×14cmのはぼ円形の小ピットが見出されている。

層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、暗茶褐色砂層。第Ⅱ層、黒灰色砂層。第Ⅲ層、黒色砂層。第Ⅳ層、青黒灰色砂層。第Ⅴ層、灰茶褐色砂層。第Ⅵ層、Ⅳ'層、共に暗灰褐色砂層で、第Ⅳ'層は、第Ⅳ層にくらべやや褐色味が強い。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層。 (高橋 和樹)

遺物 (第31図3, 第33図20~23, 図版15B, 29, 31A, B)

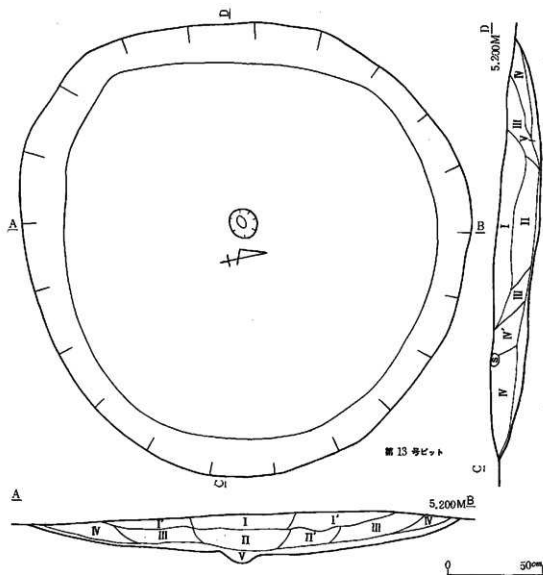
第31図3は、器高23.3cm, 推定口径19cm, 推定底径9.5cm, 器厚6~9mmの半完形土器である。器形は、深鉢形で、胴部はややふくらんでいる。底部は欠損していて不明であるが、張り出しは顕著ではない。口縁部には、肥厚帯があり、この上に貼付文がある。この回りには摺糸瓦痕文があるが、現存する口縁部が少ないので、詳しい文様構成は不明である。地文は、第1種結節のある羽状編文である。内面は磨かれている。胎土には、若干繊維を含み、色調は茶褐色~黄褐色である。

第33図20は、肥厚帯上に環状に貼付文を施し、その中に刺突している。21は、肥厚帯上に貼付文を有する。22は、胴部に横走する2本単位の貼付文があり、この上に縄文原体を圧痕している。23は、底部片である。これらの土器群は、サイベ沢Ⅵ~Ⅶ式に相当しよう。 (上野 秀一)

第14, 15号ピット (第20図, 図版14B)

第14・15号は2連ピットである。新旧関係は切合い関係から第15号ピットの方が新しい。

第14号ピットは113×(91)cmの楕円形プランである。東側の壁の上半分ほどは第15号ピットに切られているが、断面形は半円に近く、掘り込みの角度は比較的急である。深さ46cm。長軸方向は北北西一南南東をとる。

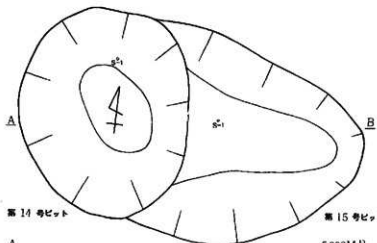


第19図 第13号ピット実測図

第15号ピットは、122×104cmの不整三角形を呈するもので、壁の掘り込みは比較的急角度で、深さ22cm。横底部は二等辺三角形の等辺がくびれたような平面形を有し、横底面はほぼ平らである。長軸方向は東—西をとる。

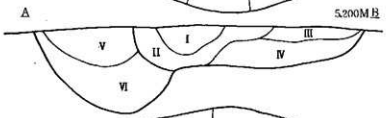
層堆積は、第15号ピットが、第Ⅰ層、暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、灰褐色砂層。第Ⅲ層、第Ⅱ層よりやや明るい灰褐色砂層。第Ⅳ層、非常に硬い暗黄灰色砂層で、第14号ピットが、第Ⅴ層、暗黄褐色砂層。第Ⅵ層、暗黄灰色砂層となっている。

(伊藤 加代子)

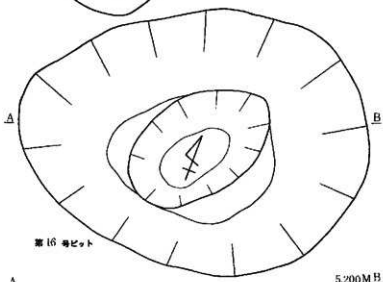


第 14 号ビット

第 15 号ビット

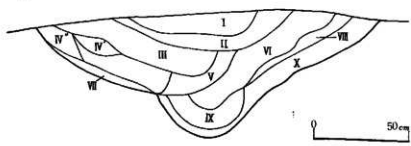


5.200MHz



第 16 号ビット

5.200MHz



0 50cm

第20図 第14, 15号, 第16号ビット実測図

遺物 (第33図24, 25, 第38図15, 16, 図版31B, 33B)

第14号ピットからは、第33図24, 25, 第38図15の資料が出ている。24, 25は斜行縄文が施された胴部片である。胎土に、繊維を若干含み、焼成はあまりよくないが、内面は比較的滑らかである。

15は、少し幅広の縦長割片である。特に加工はない。

第15号ピットからは縦形の刮器(ナイフ)(第38図16)が出土している。バルブ部分を欠損する。
(上野 秀一)

第16号ピット (第20図)

城口部での平面形は西端部がすばまる不整卵形を呈し、その大きさ186×140 cmを測り、長軸方向は東—西をとる。さらに一段深く掘り込みがあり、これは長軸方向が東北東—西南西をとる不整楕円形を呈する。最深部までの深さは66cm程。層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、灰茶褐色砂層。第Ⅱ層、やや明るい灰茶褐色砂層。第Ⅲ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅳ層、黒灰色砂層。第Ⅳ'層、やや暗い黒灰色砂層。第Ⅳ''層、やや赤褐色味の強い黒灰色砂層。第Ⅴ層、白灰褐色砂層で若干の火山灰を含み第Ⅲ層よりも暗い。第Ⅵ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅶ層、青灰色砂層。第Ⅷ層、茶褐色砂層。第Ⅷ層、若干量の火山灰を含む灰色砂層。第Ⅸ層、ほんの少し火山灰を含む灰褐色砂層。これらの各層は、以下の如く概括的に理解することが出来る。即ち第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ層は火山灰を含む比較的色調の明るい砂層(a)であり、第Ⅴ, Ⅵ層は火山灰を含む比較的色調の暗い砂層(b)で、第Ⅳ, Ⅳ', Ⅳ'', Ⅶ層は、褐鉄を含む暗い色調の砂層(c)、第Ⅷ層は砂層(c)とほぼ同様の砂層(c)'、さらに第Ⅸ, Ⅷ層は火山灰を含む灰色がちな色調を呈する砂層(d)としてまとめることが可能である。この理解に従えば、このピットの層堆積はまず東側から砂層(d)が流れ込み堆積したのに引き続き、砂層(c)が西側から、砂層(c)'が東側からはほぼ同時に流れ込み、次いで砂層(b)が東側から流れ込み、さらに砂層(a)が残りの窪みを充填したということになる。こうした火山灰を含む(a)~(d)の各層が、順に流れ込み堆積していることは、他の多くのピットの覆土にはみられない現象である。従って、このピットが人為的に掘られたものとは考え難い。しかし、いわゆる風倒木痕の層堆積とも異なっており、それ以外の何らかの自然の営為を考慮せねばならない例である。

遺物は、一切出土していない。

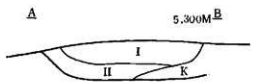
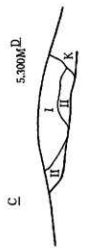
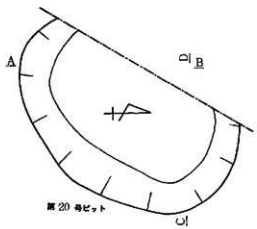
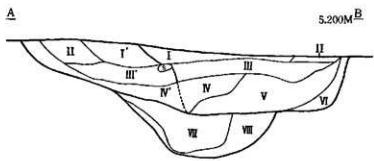
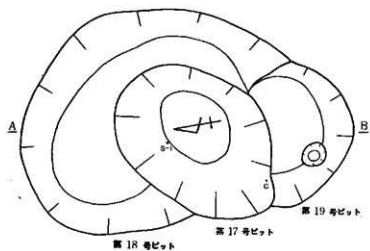
(高橋 和樹)

第17, 18, 19号ピット (第21図, 第38図13, 図版16A, 33B)

この三連ピットの新旧関係は切合い関係から明らかなように、第17号ピットが掘られた後、第18号ピットが掘り込まれ、その後さらに第19号ピットが掘り込まれたものと理解される。

第17号ピットは現存城口部(98)×(70)cmを測る不整楕円形のプランを呈する。長軸方向は北東—南西をとる。掘り込みは南側ではやや急角度であるが、北側では比較的ゆるやかである。城口面は比較的平坦で、最上部からの深さは56cmである。

第18号ピットは城口部で150×(116)cmを測る不整楕円形のピットで、長軸方向は北西—南東を



第21図 第17, 18, 19号, 第20号ピット実測図

とる。掘り込みは比較的ゆるやかで、墳底部も中心に向いつれ次第に深くなってゆき、33cmを測る。第Ⅱ'層上部には長径7.5cm、厚さ3.5ほどの河原石がみつまっている。

第19号ピットは、墳口部で94×77cmを測る北側のすばまった不整卵形のピットで、長軸方向は北北西—南南東をとる。壁の掘り込みは垂直に近く、墳底面は水平で平坦である。深さは33cm。西壁に14×12cmを測る不整楕円形の小ピットがある。この小ピットには青灰褐色砂が充填されていた。

層の堆積については3つのピットを一括して以下に述べる。第Ⅰ層、灰褐色砂層。第Ⅰ'層、やや暗い灰褐色砂層。第Ⅱ層、灰褐色砂層で、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ層よりもやや暗い色調を呈する。第Ⅲ層、灰褐色砂層。第Ⅲ'層、灰褐色砂層で第Ⅲ層よりもやや暗い。第Ⅳ層、黄灰褐色砂層で、第Ⅳ'、Ⅴ、Ⅵ層などより褐色味つよく明るい色調を呈する。第Ⅳ'層、黄灰褐色砂層で、第Ⅳ層よりもやや白っぽい。第Ⅴ層、暗灰褐色砂層。第Ⅵ層、黄灰褐色砂層。第Ⅶ層、暗灰褐色砂層。第Ⅷ層、黄灰褐色砂層である。なお、遺物は、第17号ピットから有蓋石罫（第38図13）が1点出土しただけである。基部先端が欠損する。

（高橋 和樹）

第20号ピット（第21図、第38図22、23、図版33B）

西側に攪乱をうけてはいるが、ほぼ隅丸長方形を思わせる楕円形のプランを有するピットで、その墳口部での長径は127cmを測る。現存の最大幅70cm。深さ21cm。長軸方向は北東—南西をとる。壁の掘り込みは比較的ゆるやかで、墳底面は平坦である。層の堆積は、第Ⅰ層、暗灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、黒灰色砂層である。

遺物は、第38図22、23に示した石器が出土している。22は、両面を利用した砥石で、23は礫器であるが、その性格は判然としない。

（高橋 和樹）

第21、22、23、24、25、26号ピット（第22図）

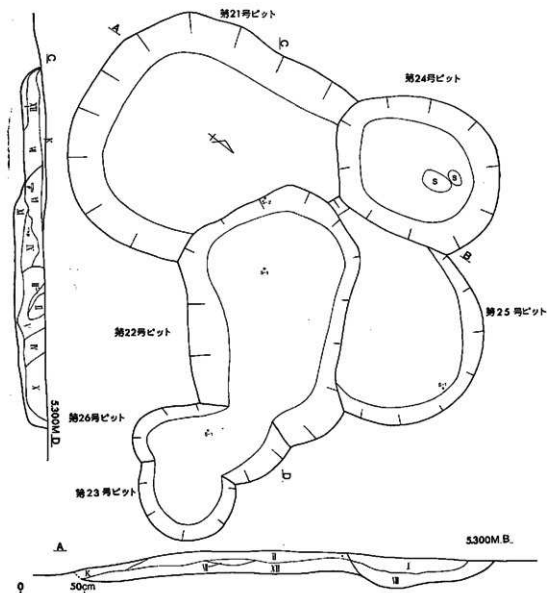
これらの6連ピットが存在した一帯は、黒色を帯びた砂層が広く分布し、その中に数多くの黒曜石のチップが含まれていた。この黒色の砂層とピットの覆土の砂の色調とが殆んど区別できない場合があり、確実にはピットの輪郭を決定しがたい例もあった。また、これら6連ピットの新旧関係についても、セクションラインの関係で、一部明確ではない。結論的には、第24号ピットは第21号ピットより新しく、第21号ピットは第22号ピットより古く、第22号ピットは第25号ピットより新しい。しかし、第23、26号ピットに関しては新旧関係は不明である。

第21号ピットは、北東部を第22号ピットに、北西部を第24号ピットに切られていて全容を窺いえないが、ほぼ隅丸長方形プランを呈するピットと思われる。墳口部の現存最長径213cm、最大幅188cmで、長軸方向は北—南をとる。掘り込みは垂直に近く墳底はほぼ水平な平坦面となっている。深さ19cm程。層の堆積は、第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、茶褐色砂層。第Ⅲ層、黄灰褐色砂層となっている。

第22号ピットは、東部がやや膨れているが、ほぼ等辺のくびれた不整二等辺三角形に近い平面形

を有するピットで坑口部での大きさ193×145cmを測る。北東部での掘り込みは垂直に近いが、南西部ではその角度は緩やかである。坑底はほぼ平坦面で、深さは24cm程である。長軸方向は北東—南西をとる。層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅰ'層、やや暗い白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、黒褐色砂層。第Ⅲ層、暗茶褐色砂層。第Ⅳ層、茶褐色砂層。第Ⅴ層、やや明るい茶褐色砂層。第Ⅵ層、灰茶褐色砂層。第Ⅶ層、黄灰褐色砂層。

第23号ピットはほぼ不整形円形プランを有するものと思われ、坑口部での直径ほぼ78cmを測る。



第22図 第21, 22, 23, 24, 25, 26号ピット実測図

掘り込みは垂直に近く、墳底は平坦な面である。深さ4.5cm程で、層の堆積は上から1.5~2.0cm程の厚さに灰黒色砂層がほぼ水平に堆積し、その下には床面まで2~3cm程の厚さに暗黄灰色砂層が堆積する。

第24号ピットは、不整楕円形のプランを呈し、墳口部での大きき142×110cmを測る。長軸方向はほぼ北一南をとる。掘り込みはやや急角度で墳底はほぼ水平な平坦面である。深さ24cm程。大きき14×8.5cmおよび24×14cmの2ヶの河原石がみつまっているが、いずれも第1層に含まれていた。層の堆積は第1層が茶褐色砂層で、耕作土の可能性もある。第2層は暗黄灰色砂層である。

第25号ピットは南側を第22号ピットで切られており、その平面形は明瞭ではないが、ほぼ南西部のすばまる不整卵形を呈すると思われる。墳口部での長径190cm、現存最大幅139cmを測り、長軸方向は北北東一南南西をとると推定される。掘り込みは緩やかで、それに続く墳底部は中心に向かって次第に深くなってゆく。一番深い所で、12cmを測る。層の堆積は、北東部中央にほぼ55×36cmの範囲で暗茶褐色砂層が最大厚7cmで存在するほかは上面から墳底面まで総べて茶褐色砂層が充填されている。

第26号ピットは、長径123、短径60cmを測り、北西一南東方向に長軸をとる不整長楕円形のピットかとも思われるが、明確ではない。層の堆積は第23号ピットに極めて類似したものであったが、人為的なピットである確証はない。

(高橋 和樹)

遺 物 (第33図26~30, 第34図1~20, 23, 第38図17~21, 図版31B, 33B)

第21号ピットからは、第33図26~28, 第38図17の資料が出土している。26は、折返し口縁で、低い肥厚帯がある。サイベ沢Ⅵ式か。

27は、トコロ第6類。28は、底部片で、張り出しがある。17は、扁平石核である。矩形剝片を生産している。

第22号ピットからは、第34図1~5, 第38図18, 20の資料が出土している。1は、肥厚帯上およびその下に貼付文があり、貼付文上には捺糸圧痕文がある。肥厚帯上の貼付文は懸垂状で、その間にも捺糸圧痕文がある。胴部の貼付帯は、鋸歯状およびそれを区切るように横環する貼付帯からなり、その間には、捺糸による馬蹄形圧痕文がある。2は、胴部破片で地文は、羽状縄文である。補修孔がある。3は口縁部に二条の貼付を横環し、その間に捺糸による馬蹄形圧痕文がある。4は、肥厚帯上に鋸歯状の貼付文がある。肥厚帯上には捺糸文、貼付文上には縄文の圧痕がある。5は、底部片で軽い張り出しがある。サイベ沢Ⅵ式に相当しようか。

18は、横長剝片のバルブ部分の両面に二次加工を施した例で、一部欠損する。削器であろうか。20も、横長剝片の削器であろうか。やはりバルブ側に加工がある。

第25号ピットからは、第33図29, 30, 第38図21の資料が出土している。

29は、肥厚帯上およびその下に貼付文がある例で、貼付文の上には縄文を圧痕している。30は、羽状縄文の胴部片である。サイベ沢Ⅵ式に相当しようか。

21は、有茎石鏃で、b面に素材面が残る。

第26号ピットからは、第34図6～20, 23, 第38図19の資料が出ている。

6は、肥厚帯上に斜めの連続貼付文があり、その上に燃糸圧痕文がある。7は、肥厚帯上に幅広いの貼付文を縦・横に施し、その上から深い燃糸による圧痕を施している。8は、低い肥厚帯上に斜めの連続沈線文がある。9, 10, 14～17は、半截竹管による内面沈線文、内面突引文などがある天神山式土器である。12は、小突起を有し、口縁部に二本単位の貼付文および環状の貼付文を有する例、11はV字状の貼付文がある例である。13は、貼付文の剝脱したもので、爪形文などが観察される。18, 19, 23は、胴部片で、斜行縄文がある。18は、複節である。20は、底部片で軽い張り出しがある。

19は、削器ないし掘器の刃部破片である。

(上野 秀一)

第27, 28号ピット (第23図, 第38図14, 図版16B, 33B)

この2つのピットは、いずれも南半部がいわゆる風倒木痕の上に掘り込まれているため、それらの南半部の平面プランは必ずしも明瞭には捉えられなかった。両者の新旧関係はC-Dセクションに明らかなように、第27号ピットの方が新しい。

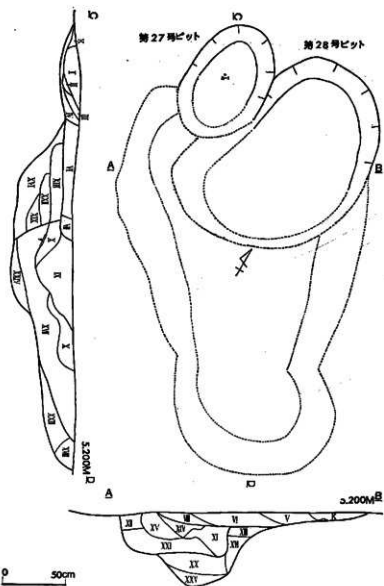
第27号ピットは、堀口部で98×65cmを測る不整形円形のプランを有し、長軸はほぼ北一南方向をとる。掘り込みは南側ではかなり急角度であるが、北側では比較的ゆるやかである。堀底面は比較的平坦で、深さは17cm程。

第28号ピットは南西部がやや膨らむ不整形円形プランを呈し、堀口部での大きさ170×120cmを測る。南側の掘り込みはかなり急角度で比較的平坦な堀底面を有する。深さ12cm程。長軸方向はほぼ南一北をとる。

層の堆積は、第I～IV層までが第27号ピット、第V～VIII層までが第28号ピットの覆土で、あとはすべていわゆる風倒木痕の層堆積である。まとめて説明すると以下の如くである。第I層、灰色砂層で若干量の火山灰が含まれている。第II層、白灰色砂層。第III層、灰褐色砂層。第IV層、暗灰褐色砂層。第V層、灰黒色砂層。第VI層、暗茶褐色砂層。第VII層、暗灰茶色砂層。第VIII層、黄灰褐色層。第IX層、灰褐色砂層で若干量の火山灰を含む。第X層、白灰褐色火山灰含砂層。第XI層、やや暗い白灰褐色火山灰含砂層。第XII層、暗灰褐色砂層で第XIV層より褐鉄分多く、色調はやや白っぽい。第XIII層、灰褐色砂層で火山灰を少し含み、全体に灰色がちな色調を呈する。第XIV層、暗灰褐色砂層。第XV層、黒灰色砂層。第XVI層、黒褐色砂層。第XVII層、青灰褐色砂層。第XVIII層、やや暗い黄灰褐色砂層。第XIX層、暗灰褐色砂層で第XII層に近いがそれより褐鉄分が多い。第XX層、暗灰褐色砂層で、第XII, XIV層より全体にやや暗い。第XXI層、黒灰色砂層で、第XV層より全体に白っぽい。第XXII層、黄灰褐色砂で地山にごく近い層。第XXIII層、黄灰褐色砂層。第XXIV層、やや暗い青灰褐色砂層。第XXV層、黄灰褐色砂層。

遺物は、第27号ピットから半両面体石器(石鈹?)の先端部破片と思われるものが出土している(第38図14)。ナイフ状石器の可能性もある。

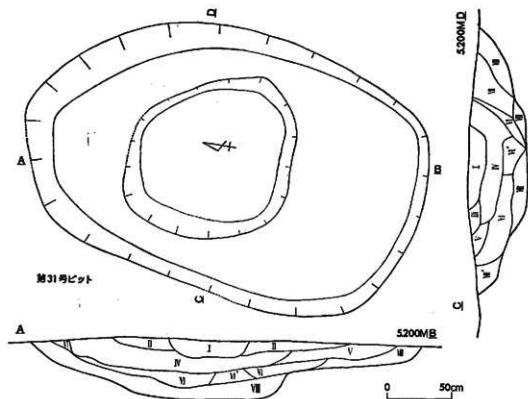
(高橋 和樹)



第23図 第27、28号ピット実測図

第31号ピット (第24図, 第35図1, 図版17A, 32B)

319×206cmを測る不整五角形の坑口部を有する大きなピットで、長軸は北北東—南南西の方向をとる。壁は全般にほぼ45°くらいの角度で掘り込まれ、坑底面は平坦で中央部に向かうにつれ次第に深くなる。中央部ではこの坑底面からさらに掘り込みがあり、その深さは47cmを測る。この掘り込みの大きさは135×127cmで平面形は不整台形を呈する。この中央部の掘り込みがどのような性格のものであるかは不明で、層堆積からも判断を下し難い。



第24図 第31号ピット実測図

層堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層で、褐鉄を含む。第Ⅲ層、茶色砂層。第Ⅳ層、暗灰褐色（黒灰褐色）砂層。第Ⅴ層、やや暗い青灰褐色砂層。第Ⅵ層、青灰褐色砂層。第Ⅵ'層、黄灰褐色砂層。第Ⅶ層、暗灰褐色砂層。第ⅦⅡ層、暗黄灰色砂層。第ⅦⅢ層、黄灰褐色砂層。

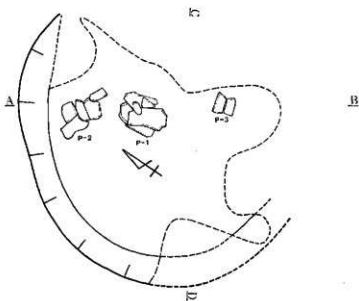
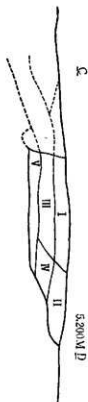
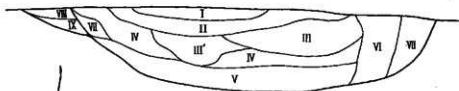
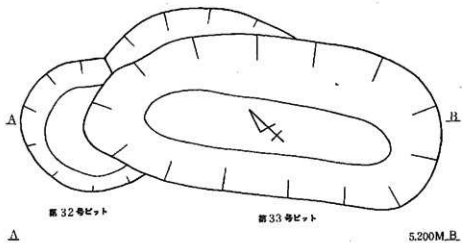
遺物は、覆土から斜行縄文を有し、胎土に繊維を含んでおり、内面が滑らかな胴部片が出土している（第35図1）。
（高橋 和樹）

第32、33号ピット（第25図、図版17B）

この二連ピットの新旧関係は切合い関係から、第32号ピットの方が古い。

第32号ピットは、不整形の開口部を呈するピットと思われ、その開口は70×(72) cmで、深さ15cm以上である。掘り込みはなだらかで、壊底は明確ではない。層の堆積は、第ⅦⅡ層、暗灰褐色砂層。第ⅦⅢ層、黄灰褐色砂層である。

第33号ピットは、不整形長楕円形を呈し、その大きさは189×83 cm、深さ44 cm程である。掘り込みはかなり急傾斜で、壊底は少し丸みを帯びているが平坦に近い。長軸方向は、北西—南東である。層の堆積は以下の如くである。第Ⅰ層、茶褐色砂層。第Ⅱ層、赤灰褐色砂層。第Ⅲ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅳ'層、暗灰褐色火山灰含砂層。第Ⅳ、Ⅴ層、暗灰褐色砂層で、若干の火山灰が



第25図 第32、33号、第34号ピット実測図

含まれ、第Ⅴ層の方がやや明るい。第Ⅵ層、灰褐色砂層で火山灰はほとんど含まれていない。第Ⅶ層、黄灰褐色砂層で褐鉄分が多く含まれている。

遺物は、覆土中にも全く含まれていない。(長谷川 克浩)

第34号ピット (第25図, 図版18A)

北部から東部、さらに南部に至るまで、いわゆる風倒木による攪乱を被っており、平面形および大きさなどは不明である。現存部で見える限り、掘り込みの角度はほぼ45°、深さは南東部が約24cmと深くなるほかは、全般に15~20cm程の深さで、塘底は平坦面である。層地積は以下に列記する通りであるが、A-Bセクションに示される如く、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅴの各層からそれぞれ一拵土器が出土している。第Ⅰ層、灰茶色砂層で若干量の火山灰が含まれている。第Ⅱ層、灰褐色砂層。第Ⅲ層、黒褐色砂層。第Ⅳ層、暗褐色砂層。第Ⅴ層、暗灰褐色砂層。(高橋 和樹)

遺物 (第31図4~6, 第35図6~16, 第39図1, 2, 図版18B, 19A, 30, 32B, 34A)

第31図4(P-3)は、器高27.8cm, 口径23.1cm, 底径10.1cm, 器厚9~13mmの半完形土器である。器形は、深鉢形であるが、胴部の張り出しは顕著ではない。底部は平底で、少し張り出しがある。口縁部には、肥厚帯があり、この下に3段ないし4段、半截竹管による刺突文が巡る。地文は、第1種結節のある羽状縄文である。内面は、研磨され、胎土には繊維を含んでいる。色調は、黄褐色である。

5(P-1)は、器高26.9cm, 口径21.9cm, 推定底径9cm, 器厚7~8mmの深鉢形の半完形土器である。底部と突起部分を欠損するが、突起は4個あったものと思われる。胴張りは、顕著ではない。突起部分には、横方向に幅7mm程の貼付文があり、この下にY字状の同様の貼付文がある。Y字状貼付文の下端は環状貼付文がつく。これらの貼付文上および口唇部上には、縄文本体の卍痕文がある。このY字状貼付文の間は、2本単位の幅3mm程の浅い沈線文が、逆V字状・半弧状・横方向に施されている。地文は、斜行縄文である。ただし、一部原体を縦位に転がして縄文の方向が違う所がある。内面は研磨し、胎土には若干繊維を含んでいる。色調は、黄灰褐色で白っぽい。

6(P-2)は、底部を欠損し、現存高20cm, 口径27.3cm, 器厚8~12mmの半完形土器である。やや大形の深鉢形土器で突起は4個あったと推定される。口縁部には、低い肥厚帯が巡り、この上に「く」の字状の細い丸棒状工具による刻文(沈線文)がある。幅は3mm程である。突起部分には、横方向とV字状の幅7mm程の貼付文があり、この上には縄文が施されている。この下にV字状に肥手(貼付文)がつく。この肥手は、現在剥脱しているが、この上にも刻文がある。この下7cm位の所にも、楕円形の貼付文があり、この上に肥厚帯上にあるのと同じ工具による横方向の刻文が4本ある。各突起の下の肥手および楕円形貼付文の間には、幅3mm程の3本単位の沈線文が半弧状に2単位づつある。地文は、斜行縄文で、内面は研磨され光沢をもっている。胎土には、若干の繊維を含むようで、色調は茶褐色である。

第35図6は、口縁部の破片で肥厚帯がある。7は、2本単位の横走貼付文があり、その間に半截

竹管による刺突文がある。8は、横走する貼付帯があり、その上とその間に絡繩体疋痕文および半截竹管による刺突文がある。この3片はサイベ沢Ⅴ～Ⅵ式に相当しよう。9は、貼付帯上に半截竹管による内面突引文がある。10も、同様に貼付帯の側縁に内面突引文がある。この2つは天神山式である。11, 12は、トコロ第6類である。13～15は、沈線文のある例である。13は、肥厚帯を有し、この上にも沈線文がある。13, 15共に、口縁部の沈線文は3本単位で、ループ状のモチーフである。共に補修孔がある。16は、口唇部上に刻目があり、円形刺突文を有することからトコロ第6類に相当するものであろうか。

第39図1は、棒状の部厚い縦長割片を素材にして、えぐりを片方に入れた縦形石匙と思われる。硬質頁岩製。2は、削器(ナイフ)の破片である。(上野 秀一)

第35号ピット (第26図, 第39図3, 図版34A)

横口161×76cmの長楕円形を呈し、長軸方向は北北西-南南東を示す。深さは、遺構確認面より24cmを測る。壁の状態は、かなりの傾斜をもっており、横断面は、ほぼ平坦である。壁・横断面ともに軟弱である。

埋没状況は、第Ⅰ層、茶褐色砂層。第Ⅱ層、第Ⅰ層より明るい茶褐色砂層。第Ⅲ層、黄灰褐色砂層で横断面全体を覆っている。

遺物は、覆土中から、石槍ないし両面加工のナイフ状石器などの両面体石器の破片が出土している(第39図3)。(内山 真澄)

第36号ピット (第26図)

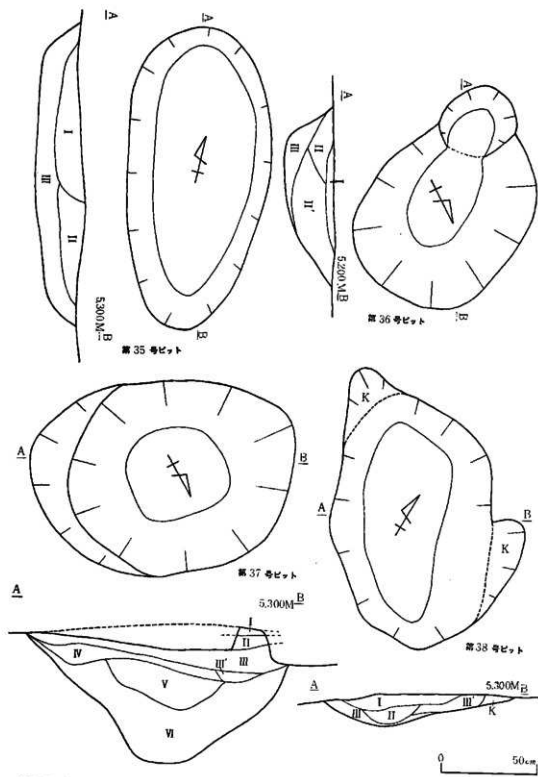
第36号ピットは、南西部に40cm程の大きさの丸い瘤状の張り出しの付属する不整楕円形のピットである。大きさは120×83cm、深さ26cmである。掘り込みの角度は北東部では緩やかであり、長軸の方向は北東-南西である。層の堆積は、第Ⅰ層、灰茶褐色土層。第Ⅱ層、黒灰色砂層でやや堅く、暗い。第Ⅲ層、黒灰色砂層でやや堅い。第Ⅳ層、暗黄灰色砂層で堅い。遺物は、一切出土していない。(山下 芳枝)

第37号ピット (第26図, 図版19B)

横口139×104cmの不整楕円形を呈し、長軸方向は、西北西-東南東である。深さは74cmを測る。壁の状態は、西壁および東壁下部は約45°の立ち上りを示すが、東壁の上部は緩やかで段を有する。底面はほぼ平坦であるが、底径が口径に比べ極端に小さい。

埋没状況は、第Ⅰ層、火山灰を含む白灰褐色砂層。第Ⅱ層、火山灰を若干含む暗灰色砂層。第Ⅲ層、第Ⅱ層より火山灰の少ない灰茶褐色砂層。第Ⅳ層、灰茶褐色砂層で、やや明るい。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層。第Ⅵ層、暗黄灰色砂層。第Ⅶ層、灰黒色砂層である。これらの層は、基本的に、第Ⅰ～Ⅲ層の火山灰を含む層と第Ⅳ～Ⅶ層のそれを含まない層との二つに分けられる。

(内山 真澄)



第26図 第35号、第36号、第37号、第38号ピット実測図

遺物 (第35図2~5, 第39図6, 図版32B, 34A)

2は、半截竹管による横走する沈線文がある。天神山式であろうか。3, 4は、剝脱部が多く文様は不明であるが、縄文原体を深く圧痕した沈線文と小さく、深い刺突文が観察される。5は、斜行縄文の付された胴部片である。

第39図6は、小形の両面体石器で、尖頭部を作出している。某部は欠損する。石鈺の破片であろうか。
(上野 秀一)

第38号ピット (第26図, 第35図17, 図版32B)

北西部と東部の2ヶ所に擾乱を被っているが、坑口部の平面形はほぼ不整長六角形で、その大きさは135×86 cmを測る。長軸は北西-南東方向をとる。掘り込みはごく緩やかで、壁と坑底面との境も判然たるものではない。

最深部の深さはほぼ17 cmである。層の堆積は、第Ⅰ層、茶色砂層。第Ⅱ層、暗茶色砂層。第Ⅲ層、青黒灰色砂層。第Ⅳ層、やや暗い青黒灰色砂層。

遺物は、半截竹管による沈線文と貼付文がある天神山式土器が出土している (第35図17)。

(高橋 和樹)

第39号ピット (第27図, 図版20A)

坑口196×129 cmで、楕円形を呈し、長軸方向は、北西-南東のピットである。深さは27 cm程。壁は四周とも緩やかに立ち上り、坑底面は平坦である。埋没状況は、第Ⅰ層、若干の火山灰を含む暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、第Ⅰ層よりやや明るい暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、火山灰を含む灰茶色砂層。第Ⅳ層、灰黒色砂層で、第Ⅳ層は底面全面を覆う。

(内山 真澄)

遺物 (第35図18~22, 図版32B)

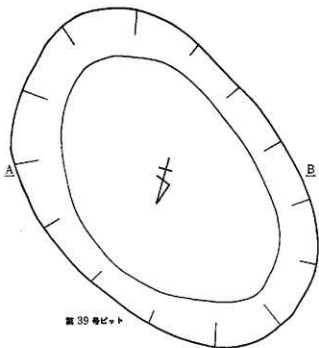
18, 19は、横走する結繩体圧痕文と平筥の連続刺突文がある例である。20, 21は、胴部片で、20は羽状縄文である。22は、底部片で軽い張り出しがある。

(上野 秀一)

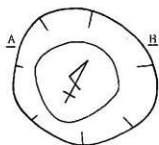
第40号ピット (第27図)

78×69 cmを測る不整円形の坑口部を有するピットで、深さは39 cm程である。掘り込みの角度は東側ではほぼ45°に近いが、西側ではかなり急である。坑底面はボール状に窪んでいる。層の堆積は、第Ⅰ層、黒色砂層。第Ⅱ層、黒褐色砂層。第Ⅲ層、暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、やや白っぽい黄灰褐色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層。第Ⅵ層、やや明るい暗灰褐色砂層。第Ⅶ層、暗灰褐色砂層。第Ⅷ層、暗黄灰色砂層である。

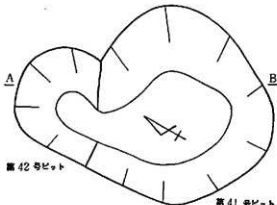
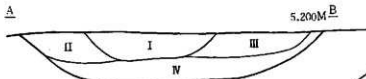
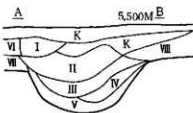
(高橋 和樹)



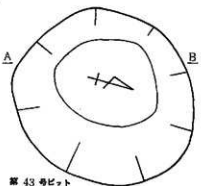
第39号ピット



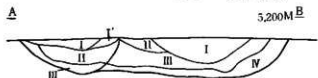
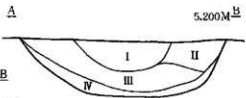
第40号ピット



第42号ピット



第43号ピット



第41号ピット



第27図 第39号, 第40号, 第41号, 42号, 第43号ピット実測図

遺物 (第35図23, 25~27, 図版32B)

23は、口縁部に段状の横走する断面三角形の貼付帯があり、その間は絡繩体疋痕文がある。25は、横走する燃糸疋痕文のある貼付文があり、補修孔が1個ある。26は、横走する貼付文とその上下にやはり横走する連続刺突文が観察される。27は、23と同様の断面三角形の貼付帯が横走し、その間に絡繩体疋痕文がある。

(上野 秀一)

第41, 42号ピット (第27図, 図版20B)

この2つのピットは、切合い関係から第42号ピットの方が新しいと判断される。

第41号ピットは、第42号ピットに北西部を切られているが、不整隅九方形を呈し、擴口部での大きさ100×85 cmを測る。長軸はほぼ北-南の方向をとると思われる。壁の掘り込みは比較的急角度になされ、擴底部はほぼ平坦である。深さは22 cmを測る。層の堆積は、第Ⅰ層、黒褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、灰褐色砂層。第Ⅳ層、黄灰褐色砂層である。

第42号ピットは不整円形プランを呈し、擴口部での大きさ55×53 cmを測る。掘り込みは南側では急角度であるが北側では比較的緩やかである。擴底部はボール状に窪んでいて、深さ19 cmを測る。層の堆積は、第Ⅰ層、暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、やや褐色味のつよい暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、灰褐色砂層で、褐鉄分が多く含まれやや暗い色調を呈する。第Ⅳ層、やや暗い黄灰褐色砂層である。

遺物は、両ピットからは全く出土していない。

(高橋 和樹)

第43号ピット (第27図)

擴口98×90 cmの不整円形を呈し、深さは29 cm。底面はほぼ平坦である。壁の状態は北~西側壁は急傾斜で、東側壁は緩やかである。底面・壁は、共に軟弱であった。埋没状況は、第Ⅰ層、黒色砂層。第Ⅱ層、茶褐色砂層。第Ⅲ層、火山灰を若干含む暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、黄灰褐色砂層である。

(内山 真澄)

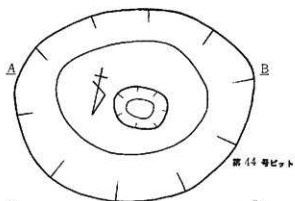
遺物 (第35図24, 28, 29, 図版33A)

24は、肥厚帯と小突起を有し、突起の下には垂れ下り状の貼付文がある。28, 29は、胴部片である。斜行ないし羽状羅文がある。

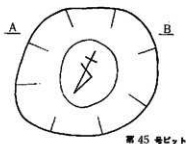
(上野 秀一)

第44号ピット (第28図)

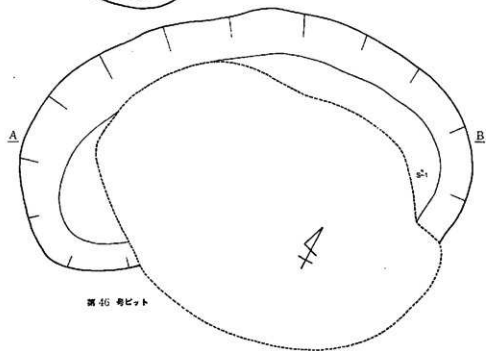
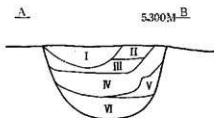
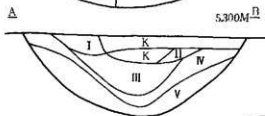
角のない五角形あるいは不整卵形といったプランを呈し、大きさは127×102 cmを測る。断面形は丸く窪んだ形で、壁と擴底面との境は必ずしも明瞭ではない。深さ43 cm。長軸は北東-南西の方向をとる。擴底中央部には29×22 cmの不整五角形の小ピットが見出され、その深さは10 cm程である。層の堆積は、第Ⅰ層、黒色砂層。第Ⅱ層、黄灰褐色砂層で、Ⅱ層よりも褐鉄分が多くみら



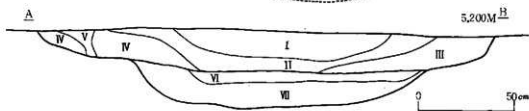
第44号ピット



第45号ピット



第46号ピット



第28図 第44号、第45号、第46号ピット実測図

れた。第Ⅲ層、灰茶褐色砂層。第Ⅳ層、暗灰褐色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層である。なお、第Ⅰ、Ⅱ層ともに攪乱をうけていた。(笠井 衛二)

遺 物 (第34図21, 22, 24~28, 図版32A)

21は、肥厚帯と小突起があって、肥厚帯上には、環(頂)状に貼付文があり、口縁部には鋸歯状および横走する貼付文がある。貼付帯上には縄文の圧痕がある。22も、同様であるが、貼付帯上は燃糸圧痕文である。24~26は横走する貼付文が観察され、各々燃糸圧痕文がある。27, 28は、胴部片で斜行縄文がある。(上野 秀一)

第45号ピット (第28図, 図版21A)

不整円形の横口部を有するピットで、その大きさは81×70cm、深さ44cmほどである。横底は少し丸味を帯びて窪んでおり、平坦ではない。掘り込みはかなり急角度である。セクションラインは遺憾ながら横底部をはずれてしまったが、層の堆積は以下の如くである。第Ⅰ層、黄灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、青灰褐色砂層。第Ⅲ層、黄灰褐色砂層。第Ⅳ層、灰褐色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層。第Ⅵ層、暗灰褐色砂層。このうち第Ⅱ、Ⅲ層には若干量の褐鉄が含まれている。

遺物は、全く出土していない。(高橋 和樹)

第46号ピット (第28図, 第39図5, 図版34A)

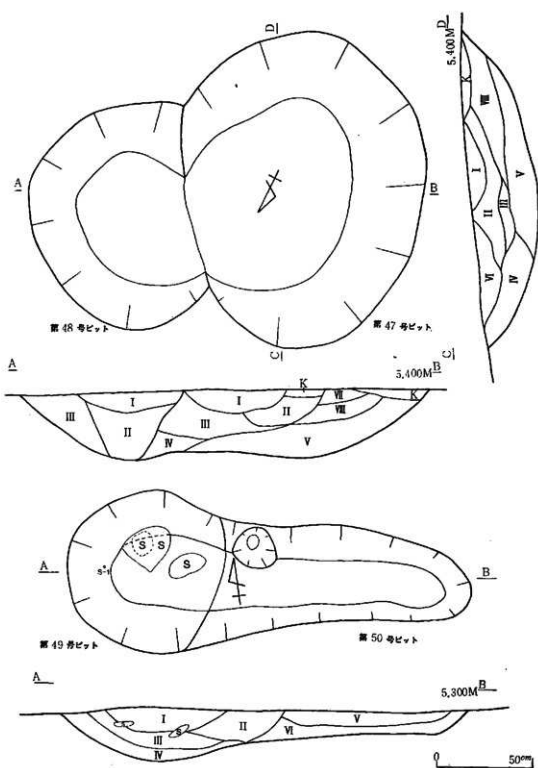
このピットはいわゆる風倒木痕に重複して構築されているため、その壁面や横底面の追求が非常に難しく、特に南西部においては遂に明確なプランを頼むことができなかった。しかし、北東-南西の方向に長軸を有する大きな不整楕円形のピットであることは想定できよう。横口部での大きさは長径237cm、最大幅はほぼ130cmを測る。北東部における掘り込みは比較的急角度になされているが、他の大部分ではかなり緩やかである。横底面はほぼ水平な平坦面で、深さ22cmを測る。層の堆積は以下に記す通りであるが、第Ⅵ、Ⅶ層はいわゆる風倒木痕に属するものである。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、火山灰を若干量含む暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、火山灰を殆ど含まずやや黄色っぽい暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、黄灰褐色砂層。第Ⅴ層、茶褐色砂層。第Ⅵ層、暗灰褐色砂層で火山灰をほんの少し含み、第Ⅱ、Ⅲ層よりやや白っぽい。第Ⅶ層、灰褐色砂層。

遺物は、砂岩製の砥石が1点出土している(第39図5)。(高橋 和樹)

第47, 48号ピット (第29図, 図版21B)

この2つのピットは、切合い関係から、第48号の方が新しいと判断される。

第47号ピットは、第48号ピットにその北東部が切られており、平面形は必ずしも明からではないが、ほぼ北北西-南南東に長軸方向をとる不整楕円形のプラン有するものと思われる。横口部での大きさは168×(130)cmを測る。掘り込みはかなり緩やかである。横底面は皿状を呈し、平坦ではない。深さ36cmを測る。層の堆積は以下の通りである。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、



第29図 第47, 48号, 第49, 50号ピット実測図

黒灰色砂層で、第Ⅲ層にくらべやや色調が暗く、褐鉄分を多く含んでいる。第Ⅲ層、黒灰色砂層。第Ⅳ層、黄灰色砂層。第Ⅴ層、堅くしまった暗黄灰色砂層。第Ⅵ層、黒色砂層。第Ⅶ層、暗黄灰色砂層で第Ⅴ層よりやわらかく、第Ⅷ層より色調が暗い。第Ⅷ層、やや明るい暗黄灰色砂層。

第48号ピットは横口部で118×88 cmを測る不整形円形のピットで、長軸方向はほぼ東-西をとる。掘り込みは東部ではやや緩やかであるが、西部では非常に急角度である。横底面は丸く窪み平坦ではない。深さ36 cm。層の堆積は、第Ⅰ層、黒色砂層。第Ⅱ層、やや白っぽい色調の黒色砂層。

第Ⅲ層、暗灰褐色砂層となっている。

遺物は、全く出土していない。

(高橋 和樹)

第49, 50号ピット (第29図, 図版22A)

この2つのピットは、切合い関係から第49号の方が新しいと判断される。

第49号ピットは、第50号ピットの西側を切って構築されている。横口部での大きさ119×86 cmを測り、不整形で東側がすぼまっている。長軸方向は西北西-東南東である。掘り込みは比較的ゆるやかで、横底面も丸く窪んでいる。深さ28 cm。横底面に直接接してはいないが、第Ⅲ層中に3個の河原石が存在した。

第50号ピットは、第49号ピットにその西側を切られているため、その全貌は不明であるが、細長い不整形円形といったプランを有するものと推察される。現存横口部での大きさ(117)×52 cmで、長軸はほぼ東-西の方向である。掘り込みの角度はほぼ45°に近く、横底面はほぼ平砥であるが、西へゆくにつれ次第に深さが増してゆく。北西壁に23×21 cmを測る不整形三角形の小ピットが見出されている。

層の堆積については第49, 50号の両者を一括して以下に述べる。第Ⅰ層、擾乱の可能性のある黄色味の強い茶褐色砂層。第Ⅱ層、茶褐色砂層。第Ⅲ層、暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、青灰褐色砂層。第Ⅴ層、やや明るい茶褐色砂層。第Ⅵ層、青灰褐色砂層。(高橋 和樹)

遺物 (第35図30~33, 第39図7, 図版33A, 34A)

第49号ピットから以下の遺物が出土している。30は、肥厚帯がある口縁部片である。31は、肥厚帯上に懸垂状の連続貼付文があり、この上およびその間に絡縄体圧痕文がある例で、肥厚帯下には、絡縄体による馬蹄形圧痕文がある。32は、肥厚帯上には、鋸歯状、口縁部には横走する貼付文があり、この上には縄文を圧痕している。33は、複節の縄文のある胴部片である。

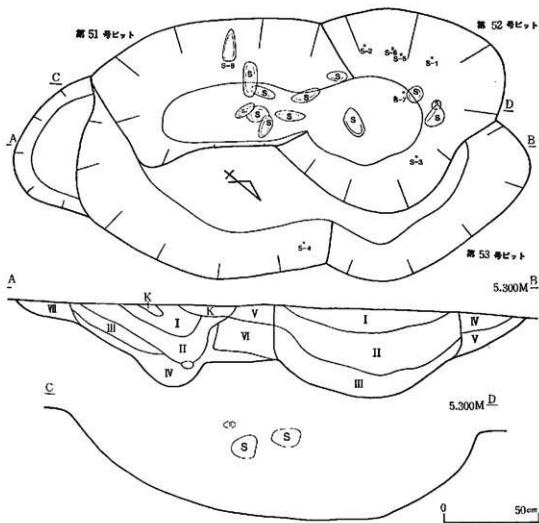
第39図7は、縦形の削器(ナイフ)で、b面パルプ付近に擦痕がある。(上野 秀一)

第51, 52, 53号ピット (第30図, 図版22B, 23A, B)

第51号ピットは、第52号ピットにその西側を切られており、後者より古い時期に構築されている。現存横口部での大きさは南北158 cm, 東西159 cmを測るが、平面形は甚しく不定で掘り込み、横底面の様相なども理解に苦しむ所がある。西側部分は一段深く掘り込まれている。この西側

の部分、覆土の中～下層にはS-8の石器をはじめ数多くの河原石が集中して認められた。本ピットの南東には第Ⅶ層が充填されたピット様のものが付属するが、性格は不明である。層の堆積は、第Ⅰ層、暗黄褐色砂層で火山灰の含有が認められる。第Ⅱ層、黒灰色砂層。第Ⅲ層、暗黄灰色砂層。第Ⅳ層、黄灰褐色砂層。第Ⅴ層、灰褐色砂層で若干量の火山灰が含まれている。第Ⅵ層、黒灰色砂層で色調は第Ⅱ層にくらべやや暗く、褐鉄分の含有が認められる。第Ⅶ層、暗黄褐色砂層である。

第52号ピットは第51、53号の両ピットを切り込んで構築されたもので、3つのピットの中で一番新しい。横口部の平面形はやや北西端の張出した不整形形で大きさ112×105cmを測る。長軸は北北西-南南東をとると判断される。掘り込みはほぼ垂直である。横底面は中央部に向うにつれ深さが増し丸く窪んでいる。深さは47cm。覆土の中～下層からは多くの石器、河原石が出土しているが、特に西側に集中して見出された。層の堆積は単純である。第Ⅰ層、暗黄褐色砂層で火山灰の含



第30図 第51、52、53号ピット実測図

有が認められる。第Ⅰ層、白灰褐色火山灰含砂層。第Ⅱ層、黒褐色砂層。

第53号ピットはその大半を第52号ピットに削り取られているため、その規模や壁・墳底のつくりだしなどがどのようであったか不明である。現存開口部の大きさは120×(50)cmで、深さ24cmを測るが、南に向うにつれてさらに深さが増すものと推定される。層の堆積は、第Ⅳ層、やや暗い暗黄褐色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層となっている。(高橋 和樹)

遺 物 (第36図1～21, 第39図8～15, 図版33A, 34A)

第51, 52号ピットから出土した土器は、第36図1～21に示したもので、1は、大形の突起と肥厚帯を有し、突起上には貼付文が横走る。全体に風化している。2は、肥厚帯上に連続する縦の貼付文があり、貼付帯上およびその間に燃糸圧痕文がある。3は、肥厚部分の破片と思われ、この上に横走る貼付帯がある。貼付帯上には、縄文の圧痕がある。4～7, 11は、肥厚帯を有し、その上に縄文のみある例である。4は、肥厚帯下に燃糸圧痕文がある。8は、半截竹管による横走る沈線文を有する。9は、縦・横の貼付帯が観察されるが、風化していて判然としない。10は、横走る貼付帯が3本観察でき、その上とその間に、絡縄体圧痕文が施されている。12は、縦位の貼付文がある例である。13, 14は、貼付文と半截竹管の内面突引文がある。12～14は、天神山式土器であろう。15は、浅く狭い沈線文がある。16は、半截竹管による沈線文が縦・横・斜めに走る。17は、沈線文が縦・横に走り、その集合する所にボタン状貼付文がある。18, 19も、沈線文のある例である。18は、肥厚帯があり、この上にも縞歯状に沈線文を施している。20, 21は、底部片である。(上野 秀一)

第39図8と10は、第52号ピットから出土した石器で、8は、礮器であるが、性格は明確ではない。一種の敲打器であろうか。10は、両面体石器である。尖頭部を作出する傾向を認めるが、用途は不明である。

同図9, 11～15は、第51号ピットから出土した石器で、9は、半両面体石器であるが性格は不明である。狭長の石斧の未成品であろうか。11, 13, 14は、有茎石鏃である。14は先端、基部を欠損する。12は、両面体石器(石鋸あるいはナイフ)の破片である。15は、縦長割片のバルブ部分の破片で、少し二次加工がある。

第54号ピット (第6図, 図版24A)

開口316×165cmで北東端が張出す不整長方形のピットで、長軸方向は、ほぼ北西-南東方向を示す。深さは20cmを測り、北側部で第3号竪穴住居址状遺構と切り合っているが、新旧関係は本号が古く、深く掘り込んで構築されている。壁の状態は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。この地帯は褐鉄分の沈着が顕著で非常に硬い壁と底面を作り出している。本号を含め半径4mにわたって、多量の土器・石器が検出され、本遺跡における最高密度の分布を示している。本遺構内より出土した土器群は平面図中に斜線をもってその出土範囲を示した。埋没の状況は、第Ⅰ層～第Ⅲ層が遺構確認面上方に堆積し、遺構内堆積は、第Ⅳ, Ⅴ層である。第Ⅰ層、火山灰を含む白灰褐色砂層。第Ⅱ層、火山を含む暗灰色砂層。第Ⅲ層、暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、褐鉄分を含む青灰褐

第54号ピットおよび周辺出土遺物 (第32図，第36図22~24，第37図，第39図16~22，
第43図1・2，図版24B，25A，B，26，27，28A，B，34A)

第32図に示した7個体の土器は，第54号ピットおよびその周辺のP-115，16，O-116などから
まとも出土した土器群である。この内，2，3，6，7例は第54号ピットから出土している。

1は，推定器高36cm，口径27cm，底径11.8cm，器厚7~10mmの深鉢形の半完形土器である。
底部は平底で心持ち張り出している。胴部の張り出しは強くはなく，口縁部は若干外湾する。
口唇部にはかなり厚い肥厚帯があって，この上に幅1.2cm程の貼付文が鋸歯状に施されている。
この貼付文上と肥厚帯直下には，絡繩体圧痕文が押圧されているが，貼付文上のは，原体の側縁を
押しつけたものである。地文は第一種結節のある羽状縄文で，数多くの補修孔が認められる。内面
は整形され，色調は黄褐色である。

2は，底部を欠損し，現存高18.8cm，口径20.3cm，器厚7~8mmの半完形土器である。胴
張りはなく口縁部に肥厚帯があり，この上に鋸歯状に貼付文が巡る。貼付文上には刻目がある。こ
の肥厚帯下には，竹管による円形文が三条横環している。この部分は地文はなくその下には第一種
結節のある複節の羽状縄文が施されている。内面は整形され胎土には多量の繊維を含んでいる。色
調は茶褐色である。

3も，底部を欠損する。現存高19.7cm，口径28.3cm，器厚7~9mmである。心持ち胴張りし
肥厚帯がある。肥厚帯上には縦位に貼付文があり，その間に4カ所隅九方形の貼付文が配されてい
る。これらの貼付文の上と間には絡繩体が圧痕されている。この絡繩体は，隅九方形の貼付文の中
にある例で明らかな如く，半載した竹管に撚糸を巻いたものである。地文は，第一種結節のある羽
状縄文で，内面は整形され光沢をもっている。胎土には，少量の繊維を含むようである。色調は，
灰茶色で，補修孔がある。

4は，口縁部のみの半完形土器で，口径24.3cm，器厚は6~8mmである。肥厚帯上には，縦位
の貼付文が巡る。この貼付文上およびその間には，撚糸圧痕文がある。地文は，第一種結節のある
羽状縄文で胎土には繊維を含んでいる。内面は整形されていると思われるが，風化していて明瞭で
はない。色調は茶色である。

5も，口縁部のみの例で，推定口径14.4cm，器厚7~8mmをはかる。心持ち胴張りし地文は，
第一種結節のある羽状縄文である。肥厚帯上には連続して縦位の貼付文が施され，貼付文間には絡
繩体圧痕文がある。肥厚帯の下には二条の横環する貼付帯があり，この上およびその間に半載竹管
の連続刺突文が都合5条巡る。内面は整形され滑らかで，胎土には若干の繊維を含んでいる。色調
は，灰褐色である。

6は，底部を欠損し，現存高16.9cm，口径26.4cm，器厚9~11mmである。胴張りし，口縁部
は心持ち外湾する。肥厚帯上には，連続して縦位に粗紐圧痕文が施され，肥厚帯直下にも部分的に
粗紐圧痕文がある。一原体の長さは2.5cm程である。地文は，第一種結節のある羽状縄文で，内面

は滑らかに整形されている。胎土には殆ど繊維を含まない。色調は、灰～灰褐色である。

7は、器高25cm、口径22.4cm、底径10.8cm、器厚7～12mm程の半完形土器である。底部は平底で張り出しはない。心持胴下半部が張るが顕著ではない。口縁部はゆるく外湾している。肥厚帯が横環するが、地文以外何の文様もない。地文は、第一種結節のある羽状縄文で、内面は滑らかに整形されている。胎土には、若干の繊維を含むようである。色調は灰褐～黄褐色で、補修孔がある。

土器破片に関しては、第36図22～24に示したのが、第54号ビット出土の例で、第37図、第43図1、2に示したのは周辺からまとまって出土した資料である。

第36図22は、肥厚帯上に縦位の連続貼付文を有する例で、この上とその間に絡繩体圧痕文がある。23は、横走する絡繩体圧痕文と平寛による連続刺突文がある。24は、胴部片である。

第37図1は、胴張りする器形で小突起を有し、口縁部には格子状に貼付文があり、口唇部にも部分的に縦位の貼付文がある。貼付文上には、縄文原体を押圧し貼付文の周辺には絡繩体圧痕文がある。2も小突起があり、口唇部上には刻目がある。口縁部は、絡繩体圧痕文と半載竹管による刺突文が横環する。口縁部はやや内湾している。3は、口唇部を欠損するが、貼付文と半載竹管による刺突文がある。5も同様である。4は、半載竹管による刺突文と絡繩体圧痕文がある。6は、肥厚帯があり、この上に絡繩体圧痕文の施された貼付文が鋸歯状に巡る。肥厚帯下には、燃糸による馬蹄形圧痕文がある。7、8は、共に燃糸の馬蹄形圧痕文がある例で、7には絡繩体圧痕文もある。9は、貼付文と燃糸圧痕文のある例である。

10～19は、肥厚帯がありこの上に貼付文がある例である。10は、小突起があり環状に貼付文が走り、この上に太目の燃糸圧痕がある。

11は、二段鋸歯状に貼付文がある。12は、縦位の連続した貼付文と絡繩体圧痕文がある。13は、縦位の貼付文と縄文原体の圧痕がある。14、15は、斜めの貼付文と燃糸圧痕文がある。17は、鋸歯状の貼付文と燃糸圧痕文がある。18は、所々縦位の貼付文があり、この上に縄文がある。18は、縦位の貼付文と燃糸圧痕文がある。19は、小突起と肥手があり肥厚帯上には鋸歯状に貼付文が走り、燃糸圧痕文がある。21～23は、肥厚帯はあるが地文のみの例で、25は、低い肥厚帯と小突起がある例である。24は、口唇部を欠損するが、肥厚帯直下の破片で燃糸圧痕文が横位に走る。

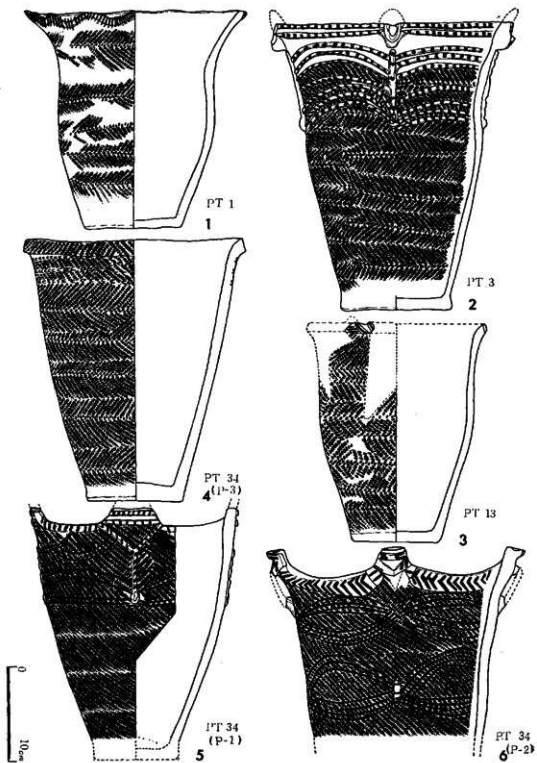
26は、半載竹管による横走沈線文がある例、27は、先端の突った工具による狭い沈線文がある例である。28～30は、肥厚帯と円形刺突文のある例で、28、29は、平寛による連続刺突文がある。31、32は、幅広の貼付文と平寛の連続刺突文と円形刺突文がある。28～32は、トコロ第6類である。

33は、底部片で張り出しがある。

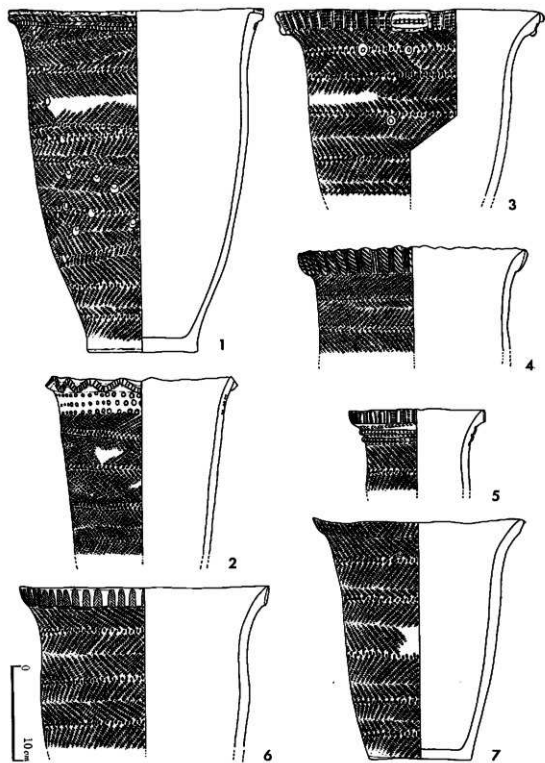
第43図1、2は、肥厚帯と二連小突起があり、この上に鋸歯状ないし台形状の貼付文がある。口縁部には、横走と斜めの同様の貼付文があって、これらの貼付文の周辺には絡繩体圧痕文が施されている。

第39図16～22は、第54号ビットから出土した石器である。16は、有茎石鉞ないし大形有茎石鎌である。17は、石鉞の先端部破片であろうか。18は、縦形搔器である。19は、縦形の削器であるが、刃部は背が高い。20は、縦形の削器（ナイフ）である。21は、有茎石鎌である。22は、小形の両面体石器である。部厚いが、形態からいって石鎌の可能性もある。

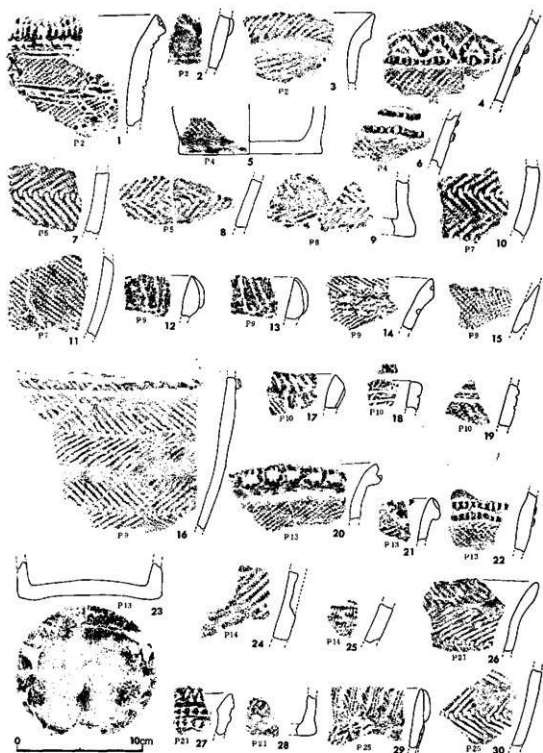
(上野 秀一)



第31圖 ビット出土土器実測図 (PTとはビットの略号である)



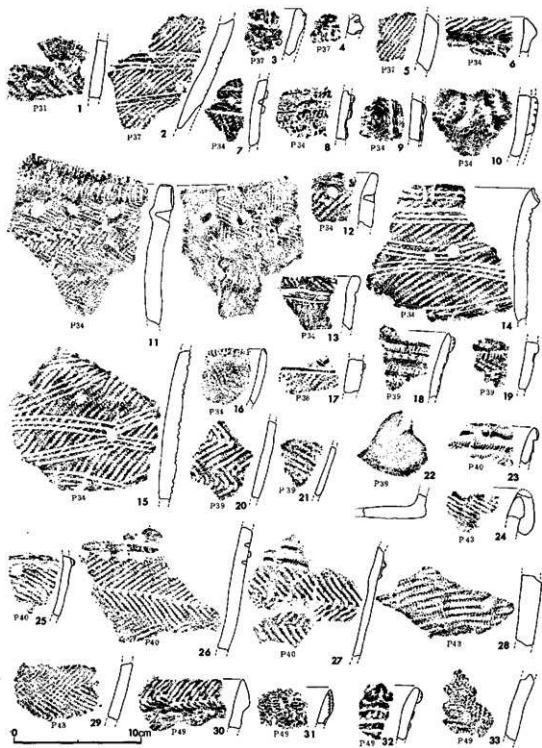
第32図 第54号ビットおよび周辺 (P-1115, 16, O-1116区) 出土土器実測図



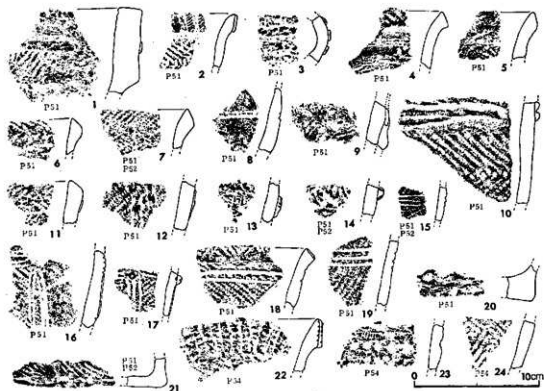
第33図 ビット出土土器拓影図(1) (Pはビットをさす)



第34圖 ピット出土土器拓影圖 (2)



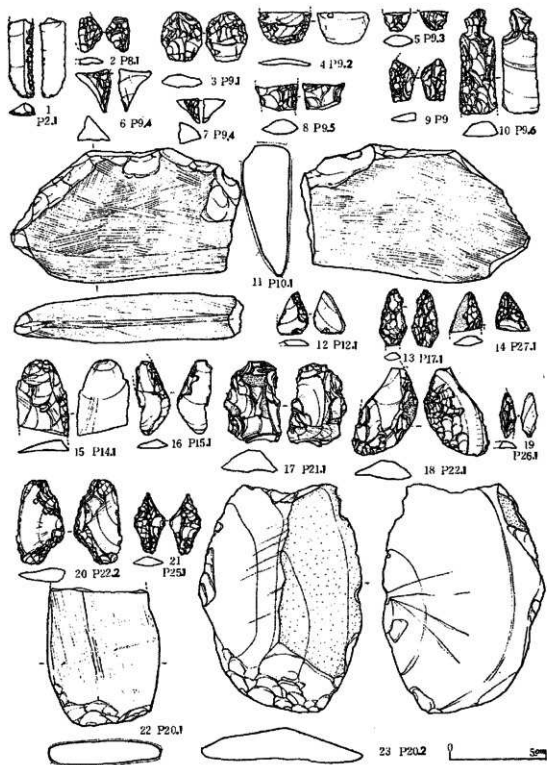
第35図 ビット出土土器拓影図 (13)



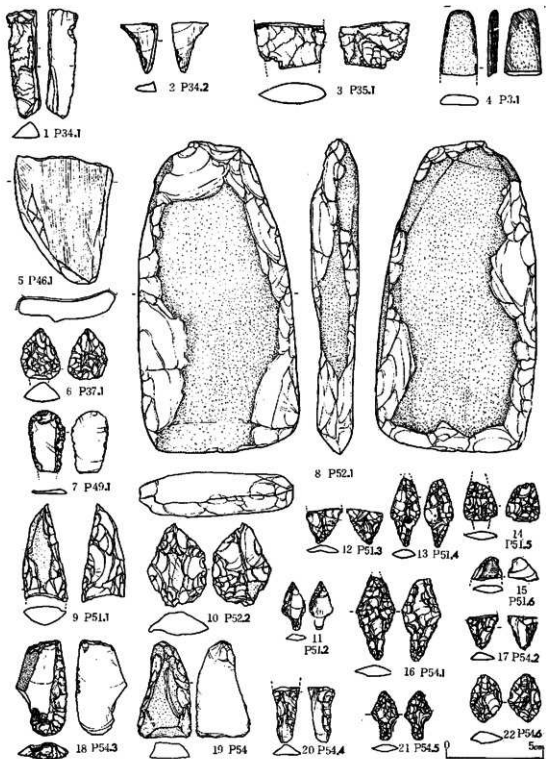
第36図 ビット出土土器拓影図(4)



第37图 兔湖区 (P—115, 16区) 出土土器拓影图



第38図 ビット出土石器実測図(1)



第39圖 ヒット出土石器実測図(2)

第3節 考 察

遺跡からは、竪穴住居址状遺構が6軒と都合52基のピットが検出された。以下に、これらの遺構について、若干の考察を加えて、まとめておきたい。

竪穴住居址状遺構

まず、第2号竪穴住居址状遺構について触れておきたい。地山の砂層に達するまで褐鉄分の多い、かたい砂層を掘りすすんでいった結果が、最終的に、住居としても十分な規模をもつ、北北西端の尖るいびつな五角形プランの第2号址を出現させたことは前述した通りである。

しかしながら、これは、壁・床などがその断面観察によっても不明瞭であったこと、多量に褐鉄を含むほぼ同一のかたい砂層によって上から下まで充填されていたこと、形態的には尖った一端が他の五角形プランのものとは対照的に逆方向を向いていることなどから、他の竪穴住居址状遺構とはかなり異質のものであることを認めざるをえない。

第2号址を除く残り5軒については、いずれも床面上に焼土や炉址が検出されなかったとはいえ、その断面観察で比較的明瞭に捉えられた壁・床のつくりだし、覆土の堆積状況、そして規模や形態などから判断して、竪穴住居址状遺構と呼ぶに足るものである。ただN293遺跡に見出されたものと同様、基盤が粒子の細かなサラサラした砂層であるため、壁・床面ともやや軟弱であり、柱穴などの正確な確認は難しかった。

各竪穴住居址状遺構の覆土に関して、共通する層堆積をまとめると、以下のようになる。床面直上の砂層は、やや地山の砂が薄汚れて、褐色がちの色調を帯びたといった感じのものである。この層には炭化物の含有がわずかに認められる。この砂層につづいて、若干量の褐鉄を含む砂層が堆積し、この両者で全体の深さの1/2~2/3まで埋めつくす。さらにその上は、黒色がちの砂層がのるが、これは遺構外にまで拡がって堆積する。黒色がちの砂層が埋めつくさなかった最上部の窪みには、白灰褐色の火山灰含みの砂層が堆積している。

遺物の出土は、主に黒色がちの砂層およびその直下の褐鉄を含む砂層からであった。ほぼ完全に復元することができた一括土器は、その大部分が、黒色がちの砂層の下部から褐鉄を含む砂層の上部までの間に包含されていた。出土の土器は、形式的には、サイベ沢川、Ⅶ式、トコロ第6類、伊達山式のいずれかに対比されるものばかりであるが、竪穴住居址状遺構からは特にトコロ第6類土器の出土が顕著であり、注目される。

本遺跡の竪穴住居址状遺構には、平面プランがほぼ五角形のもの、円に近い不整六角形のものがあった。同じ五角形とはいっても、細身のもの（第4号）、将棋の駒形のもの（第1, 3号）、卵形といえるほどずんぐりした五角形のもの（第5号）と色々である。五角形の尖った一端は、ほぼ東から南を向いている。

特に道南部に顕著にみられる縄文中期の五角形プランをもつ竪穴住居址については、古崎 昌一

(古崎1965)によって、亀田郡尻岸内町日ノ浜2号、同町川上1号址例が発表されて以来、今日までかなりの類例が知られるに至った。高橋正勝(高橋1974)は、これらの類例をまとめ、「日ノ浜型住居址」の成立から「サイベ沢型住居址」への過程を具体的に示している。それによると、縄文早期の堅穴住居址からみられるベンチ構造と、縄文前期後半の堅穴住居址にみられる5本の柱穴を五角形に配置する様式とが複合して、茅部郡南茅部町ハマナス野遺跡101号址(高橋1974)に代表される、楕円形プランでベンチが半周し五角形に配置された5本の柱穴をもつ堅穴住居址が生まれ、そのベンチ構造が全周するに及んで、日ノ浜2号、川上1号(古崎1965)、日ノ浜4号址(高橋1974)などの「日ノ浜型住居址」が成立したという。そしてその後、ベンチ構造が失われ、「サイベ沢型住居址」へと変遷していったものという。全周するベンチ構造の失われた堅穴住居址の類例は日ノ浜6号址(高橋1974)などで、さらに時代が下ると、茅部郡南茅部町精進川遺跡(森田1973)、函館市見晴町遺跡(高橋1966)、同市サイベ沢B遺跡2号址、1号址(森田・高橋1967)など比較的類例が多い。最近発表された函館市西桔梗D遺跡1号、2号址(千代編1974)なども、もはや五角形とはいいがたいプランを有するが、類例の一つに加えられよう。

ところで、余市式土器を伴出する堅穴住居址に石囲いの炉が存在することは、沙流郡門別町字富川町中ノ沢遺跡、函館市レンガ台遺跡1、2号址(大場1969)などによって知られていた。これらよりやや古い時期に比定された堅穴住居址がついに最近報告された。西桔梗E₂遺跡1、2、3、4、6号址(千代編1974)や函館市西敷遺跡1、2、3、4、5、6、7、8、9号址(松下編1974)などがそれで、ほぼ方形の石囲炉を床面の中央より南に偏した位置に配した五角形プランが根強く継承されている。このように道南における縄文中期の住居の変遷は、かなり明確に知られるに至った。

ところが、高橋正勝(高橋1974)が指摘するように、北海道中央部の円筒土器分布圏の周辺地域では、堅穴住居址に一つの定まった型を見出すことができないが、その内でも恵庭市柏木川遺跡1、3、4、5、6号址(高橋編1971)などは、かなり五角形プランを意識して構築されたものと思われる。札幌郡広島町中の沢B遺跡1、4、5、6、9、10号址(峰山・高橋・倉谷1973)、札幌市白石神社遺跡1号址(加藤・上野・羽賀1973)、札幌市T310遺跡1、2号址(羽賀編1974)、登別市鷺別遺跡(大場1969)などでは、明確な五角形プランを有するものもみられるが、卵形や楕円形を呈するものが多いようである。

道東、道北地方の縄文中期の堅穴住居址は、さらに多様なプランを有している。網走郡女満別町住吉遺跡A堅穴(大場・奥田1960)、釧路市貝塚町1丁目遺跡3、6、7、9、10、12号などの堅穴住居址(沢・西編1974)、紋別郡雄武町当沸遺跡2、6、7号住居跡(山崎1966)、どこまで堅穴住居址といえるかは判らぬが同じく当沸遺跡の5、8、9、K1、S1遺構(道北先史文化調査団1969)、常呂郡常呂町トコロチャシ南尾根遺跡の堅穴(東大文学部考古学研究室編1972)などがこれまでに知られているが、プランや構造は実に多様である。ただ、床面を二段につくる傾向があるらしい。

当沸遺跡の堅穴住居跡やトコロチャシ南尾根のものなどは、現地表面から明らかに堅穴住居址を調査する意図の下に発掘されている。このような条件下にあってさえ、現われた堅穴住居址には多様なプランが認められた。縄文中期の道東、道北には住居址に一つの定型が存在しないことは確実

と思われる。

ところで、ここで特に注目されるのは、当遺跡の敷例を除いて、これら北筒式土器を伴出した堅穴住居址には、いずれも床面に鏡土や炉址が検出されていないという事実である。

遺尖部でも、中の沢B遺跡の各住居址や白石神社遺跡第1号堅穴住居址状遺構、それに札幌市N293遺跡で見出された各堅穴住居址状遺構(上野備1974)などのように、縄文中期も後半の頃には、かなり炉をもたぬ堅穴住居址状の遺構が知られている。本遺跡に見出されたものも同列である。

本遺跡の堅穴住居址状遺構の形態的な特徴は、五角形プランを意識してつくられたものが多いことであるが、構造上の最大の特徴は炉をもたぬことである。本遺跡の堅穴住居址状遺構から特にトコ第6類土器の出土が顕著であったことを思うと、実に興味深いものがある。

さて、本遺跡では、堅穴住居址状遺構が2~3軒ずつのまとまりをもって、15、6m程離れた2ヶ所に存在した。

縄文中期の堅穴住居址の在り方をみると、柏木川遺跡では同時期の堅穴住居址が、小谷を隔ててそれぞれ2~3軒ずつ存在し、中の沢B遺跡では堅穴住居址が環状に存在している。西結梗E₂遺跡の堅穴住居址は、約15~40mくらいの距離をおいて3ヶ所に、それぞれ大きなものと小さなものと2基1組となって存在したものと想定されている。西段遺跡では環状を思わせる配置をもって堅穴住居址が群在し、そこからさらに20m程離れた場所にも、同一堅穴住居址内での建て替えの痕跡が顕著な数軒の堅穴住居址が見出されている。

本遺跡の堅穴住居址状遺構は、恐らく住居としての機能をもつものであったろうが、これは、集落の在り方といった面では、比較的近い距離を隔てて、数軒単位の住居が数ヶ所に営まれる例の一つといえるだろう。近距離を隔てて、数軒単位の住居が数ヶ所に存在すると表現したものの、本遺跡の場合は、これらが同時に存在したものか、それとも少しずつ時期を違えて営まれたものなのかは不明である。

ビ ッ ト

本遺跡からは、52基のビットが検出されたが、これらの形態や構造、規模などはまちまちで、種々雑多という印象を免れない。覆土に遺物の包含が認められたビットは、全体の60%にのぼり、これらの遺物は、いずれもほぼ縄文中期後半に属するものであった。本遺跡ではサイベ沢VI、VII式に比定される土器片の出土が数多く、N293遺跡より一段階古い時期に営まれたものと考えられる。

縄文時代の土壌という点、その代表は墓塚であるといえようが、52基のうちには埋葬人骨の検出された例はなく、明らかに副葬品と思われる遺物や、ベニガラ散布が検出されるなど、墓塚と認定するに足る様相を示すビットも全く見出されていない。第51、52号ビットからは、多数の川原石が検出され、また第24、49号ビットでも数個の配石が認められたが、どのような性格を有する配石であったのか、全く不明である。結局、構築意図の判明したビットは皆無であった。

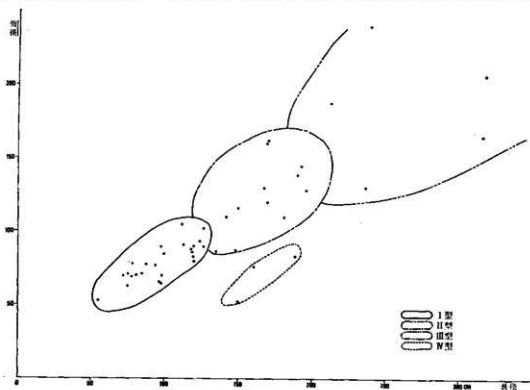
このようなビット群をどのように取扱ってよいものやら、正直なところとまどいを覚える。一応、分類らしきことを試みるが、その前に覆土の層堆積について触れておきたい。

52基の層堆積は、これまたそれぞれ前述したように多様であった。大まかには、覆土に比較的多く見出された層を抽出して、下から順に列記してみるならば、以下の各層がピットを埋めていた。

- ① 地山に近い砂層で、やや褐色がちの暗い色調を呈する層、
- ② 褐色がちで褐鉄分を含みやや暗い色調を呈する砂層、
- ③ 若干量の火山灰を含み、やや灰色味を帯びた褐色の砂層、
- ④ 茶褐色から黒色に至るまで色調に数段階の濃淡の差が認められる黒色がちの砂層、
- ⑤ 白灰褐色火山灰含砂層に代表される、火山灰や若干量の褐鉄を含有する、灰褐色がちの色調を呈する砂層（さらに分層が可能な場合には、下方ほど火山灰の含有が微量で、上層ほど褐鉄の含有が少ない傾向があるようだ）。

以上の各層が、全ピットの覆土を相互に検討して抽出された層堆積の概要である。しかし、一つのピット内にこれらの層が絶えて、順に詰まっていた例は非常に稀で、大部分は上述の各層のうちの一〜数層によって充填されていた。以下に、一応各ピットの種類を試みるが、特定のタイプのピットに個々の層堆積が認められるといった関係は、必ずしも明らかではない。

ただ、52基のうちには、その層堆積がかなり異質で、人工的に掘り込まれたピットの覆土とは考え難いものがみられた。第9号ピットの第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ層は、あるいはそれらの上部にピットが構築されただけで、ピットとは無関係な落ち込みかも知れない。第16号ピットの層堆積は、一見、巨大な蟻地獄の穴を連想させる代物であり、成因は分らぬが、この第16号ピットが人為的な遺構で



第7表 N 309遺跡ピットの規模

あるとは考えにくい。この他にも、第21～23、25、26、35～38、50、51号ビット例の如く、遺構とは考え難い層堆積をもつものがみられたが、確実にそうであると断定できる根拠に乏しく、一応ここでは遺構として取扱っておく。N293遺跡でC型と分類されたいわゆる風倒木痕は、遺構と重複しているもの以外はいちいち報告してはいないが、本遺跡でもかなりの数が確認された。このいわゆる風倒木痕を含めて、本遺跡では、総じて、遺構確認面からの深さ65cm以上を測る深いビットは、その多くが人工的な遺構とはみなし難いものであった。

さて、N293遺跡の各ビットは、主として構造上の相違から、A型、B型に二大別された。これまでに報告された北海道の縄文中期に属する土壌には、ビット内に小ビットがあったり、裾があったり、有段構造がみられたりするB型ビットの頻例は比較的数少ないようであり、B型ビットの存在はN293遺跡を特徴づけるものといえるのかも知れない。本遺跡に見出されたビットをこのA、B型の二大別方式で分類した場合、やはり比較的数多くのB型ビットが存在している。

ところで、N293遺跡においても本遺跡でも、B型ビットはA型にくらべて、明らかに規模の大きなものに多い傾向が認められる。それ故、単純に規模だけに視点を集中して分類しても、結果的にはA、B型の二大別の分類がかなり反映されたものとなるに違いない。

以下に、本遺跡およびN293遺跡の各ビットを、その規模によってⅠ～Ⅳの4つの型に分類し、説明してみたい。規模といっても、面積や容積ではなく、単に開口部での長径と短径とを目安にしたものである(第7表)。

Ⅰ 型

N309遺跡：第1、4、5、6、7、11、12、14、17、19、20、23、27、32、36、40、41、42、43、44、45、48、49、52、53号ビット

N293遺跡：第5、14、15、17、19、20、21、26、28、32、33、35、36、37、45、47号ビット

長径約50～130cm、短径約45～110cmの規模を有するビットである。平面プランは、ほぼ不整形円形から不整形楕円形である。規模の小さなものに円形プランが多く、大きくなるにつれ楕円形を呈する傾向が認められる。断面形の多くは、鍋底状のものとボール状に丸いもので、その割合は半々くらいである。深さは、10数cmくらいものから60cm近いものまでまちまちであるが、深さ20～40cmを測るものが多いようだ。構造的には、本遺跡の第19、36、44号ビットおよびN293遺跡の第36号ビットに、小ビットや張出しがあったほかは、いずれも単純な掘り込みである。

なお、本遺跡の第2、15号ビットやN293遺跡の第27、30号ビットなどは、大きな張出しがあったり、開口部と横底部の形が大きく違っていたりしており、規模からすればⅠ型に含まれようが、他のⅠ型ビットと同列には扱い難い。

Ⅱ 型

N309遺跡：第3、8、10、18、22、24、25、28、34、38、39、47号ビット

N293遺跡：第4、7、12、16、24、29、31号ビット

長径約120～210cm, 短径約85～160cmの規模を有するピットである。平面プランは、不整楕円形のものが大半を占める。断面形は、フライパン状に底面のほぼ水平で平坦なものが多いが、不整な断面形を有するものも僅かに存在する。深さは、10数cm くらいのものから約50cm 程までいろいろであるが、規模が大きくなるほど浅くなる傾向があるようだ。長軸方向は、北～北西一南～南東をとるものが多い。構造的には、1～3個の小ピットを有するものが、やや多くみられる。

なお、本遺跡の第9, 37, 51号ピットやN293遺跡の第1, 2, 16, 18号ピットなどは、規模からいうとほぼⅡ型に含まれようが、断面形や層堆積が異様であったり、平面形や断面形が甚しく不整であったり、横口部に比して壙底部が著しく小さかったりなどして、他のⅡ型ピットとはかなり異質な要素が強く認められる。

Ⅱ 型

N309遺跡：第13, 21, 31, 46, 54号ピット

N293遺跡：第3, 6, 10, 11, 13, 41, 43号ピット

長径190cm以上, 短径130cm以上を測る大型のピットを一括してⅢ型とする。形状は、不整円形, 不整楕円形, 不整長方形, 不整三角形, 全くの不整形などと様々であり、これによってさらに細分することも可能かと思われる。Ⅲ型ピットは、規模の大きいことのはかには、底面がほぼ水平な平坦面をなし、20～40cm くらいの深さを測るものが多いなどといったことしか、これといった共通性を指摘できない。構造的には、小ピットを有したり、有段構造があったり、大きな凹みがあったりなどするものが、やや多いようだ。この大型のピットは、ピットの全体数の少ないN293遺跡の方に数多い。

Ⅳ 型

N309遺跡：第33, 35, 50号ピット

N293遺跡：第25, 34, 42, 44, 46号ピット

長径が短径の2～3倍にもなる不整長楕円形のピットをⅣ型とする。本遺跡の場合、それらは形態的にも、規模の上からも一つのまとまりが認められたが、N293遺跡では、第25, 34号ピットのように小規模なものや、第42号ピットのように大型のもの、第46号ピットのように幅広くⅡ型に近いものなど、多様であった。しかし、Ⅳ型ピットについては、敢えて規模などに拘泥せず、長楕円形という形状に注目して、一括して取扱いたい。

これらは、構造的には、いずれも比較的単純な掘り込みで、その底面もほぼ平坦である。深さは、10数cmから44cmまで。長軸方向は、北北西～西一南南東～東をとるが、総じて長軸方向は北西一南東に集中するようだ。

なお、本遺跡の第26号ピットは、第22, 23号ピットとの重複のため、正確な形や規模を知ることができなかったが、ほぼ長楕円形を呈するものと推定される。

さて、北海道における縄文中期の墓址、あるいは墓の可能性のある土壌は、重松和男（重松1971, 1972）が集成した段階で、23例が列挙されている。このうち入江貝塚1, 3, 5, 7号人骨（三橋1968）は、墓墳の詳細が不明である。中期の人骨としては、他にナイベ沢遺跡第1地点第17層、同第2地点貝層に見出されたもの（児玉・大場・武内1958）や、朝日トコロ貝塚Bトレンチ第7層の例（駒井編1963）などが知られているが、墓墳などについては不明である。重松（重松1971, 1972）が集成したもののうち、埋葬人骨が確認されて確実に墓墳と認定できる例は、銅路市東銅路遺跡第Ⅱ地点D区に検出された2例（沢1968, 沢1974）、苫小牧市植苗タブコブ遺跡（S38.）2号（苫小牧市教育委員会1963）、同タブコブ遺跡（S40.）1, 3号墳墓（苫小牧市教育委員会ほか1965）、苫小牧市美沢植村遺跡1, 2, 5号墳（佐藤1971）、礼文島神崎ウヰンナイ遺跡の墓墳（松崎・佐藤・兼重1970）、室蘭市鷺別遺跡第2地点の積石葬（溝口1965）などである。その後にも、中期の土壌がいくつか報告されているが、確実に墓と認定しうる例はないようである。

ところで、これら確実に墓である墓墳の規模は、長径58～110cm、短径54～105cmの範囲にあり、プランはほぼ不整形円形および不整形円形である。構造的には、比較的単純な掘り込みだけの例、積石のあるもの、断面形が発状だったり、溝がめぐっていたり、横底面に配石が存在したりするものなどいろいろある。ただ、規模だけに注目すると、今回の分類のうちⅡ型ピットに含まれるものばかりである。このことを考えると、本遺跡およびN293遺跡に見出されたⅠ型ピットには墓墳と認定するに足る例は皆無であったが、Ⅱ型ピットのうちに墓墳として掘られたものが存在する可能性を完全に否定することはできないかも知れない。

本遺跡およびN293遺跡のⅠ型ピットと同様の規模を有する土壌の類例は、当沸遺跡12号南部、第2トレンチP₂、第3トレンチP₃（道北先史文化調査団1969）、名寄市智東遺跡B地点Eトレンチ2P（山崎・長谷川1968）、中川郡美深町富岡遺跡南発掘区H14のピット（山崎1968）、植苗タブコブ遺跡（S38.）1号（苫小牧市教育委員会1963）、沙流郡平取町岩知点遺跡第1地点墓墳B, C（沙流川流域史調査団1962）、西股遺跡9号ピット（松下編1974）などがある。これらは、ほぼ不整形円形から不整形円形プランを呈する比較的浅いピットであり、本遺跡およびN293遺跡のⅡ型ピットとの深い関連が推定されるが、いずれも構築意図は不明である。

次いで、Ⅲ型ピットとはほぼ同規模の類例は、当沸遺跡1号南部（山崎1966）、同じく当沸遺跡の2連ピットと思われる11号遺構（道北先史文化調査団1969）、中の沢B遺跡11号ピット（峰山・高橋・倉谷1973）、勇払郡厚真村字周文のいわゆる食料貯蔵址（石井1955）、西栲栘D遺跡1, 3, 6号土壌（千代編1974）、西股遺跡の4号ピットおよび8号住居址を切るピットなどである。また、小ピットを6個有する西栲栘D遺跡2号土壌や、それぞれ特有の配石を有する岩知志遺跡第1地点墓墳Aおよび旭川市豊岡遺跡B地点のピット（斎藤1968）などもⅢ型ピットに近い規模のものである。これらのあるものは食料貯蔵址といわれ、またあるものは墓墳と呼ばれているが、やはり構築意図を裏付ける要素に乏しい。

Ⅲ型ピットは大型のもので、他の遺跡では堅穴住居址、あるいはそれに類するものとして扱われている場合が多い。すなわち、当沸遺跡1号生活遺構（山崎1966）、同じく当沸遺跡8号遺構、12

号北部、K1遺構(道北先史文化調査団1969)、柏木川遺跡2号住居址(高橋編1971)、釧路市貝塚町1丁目遺跡6号住居址(沢・西編1974)などがそれぞれであるが、いずれも規模や構造が住居としては中途半端なきらいがあるようだ。

長楕円形を呈するⅣ型ピットの類例は数少ない。強いて類例を求めると、当湯遺跡7号東側のピット(山崎1966)や同第2トレンチP₄(道北先史文化調査団1969)などが挙げられるが、詳細が不明のため、これらが本遺跡やN293遺跡に見出されたⅣ型ピットと同列に扱えるものなのか否か、判断を下しかねる。

以上、類例を他に求めて、本遺跡およびN293遺跡のピットの性格を判定しようとしたが、結局、如何なる目的でこれらの土壌が掘り込まれたのかは、判らずじまいであった。埼玉県所沢市藤棚遺跡では、さまざまな葬制との関連において理解された数多くの多様な墓塚が検出されている(岩井ほか1970)。ここで墓塚と呼ばれているものが総べて墓であるのか否かは、一概には決定できないと思われるけれども、関東地方の縄文中期にも、数多くの多様な土壌群が存在する事実は注目し得る。

北海道では、現在までのところ、縄文中期の墓塚やその他の土壌の報告例は決して数多いものではないし、群在する数多くの土壌の詳細な報告例は極めて乏しい。本遺跡およびN293遺跡をはじめとする、この時期の上壌群の解明は、今後に残された興味深い課題といえよう。

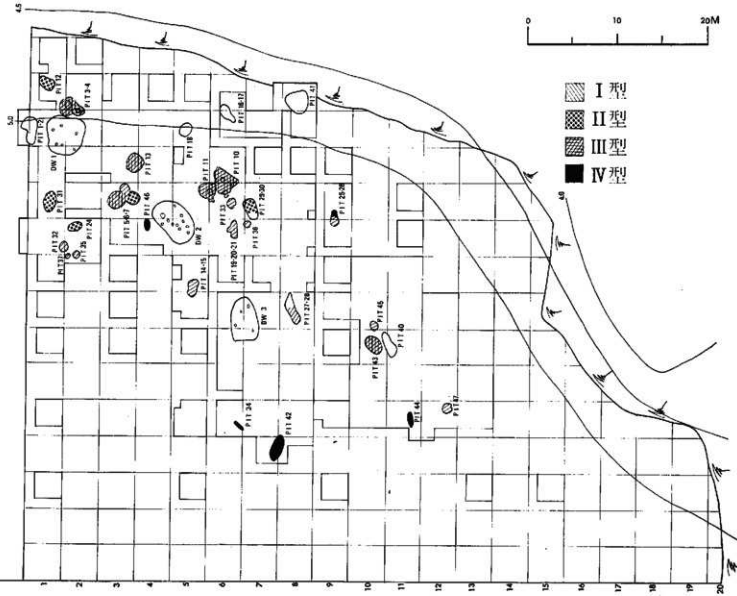
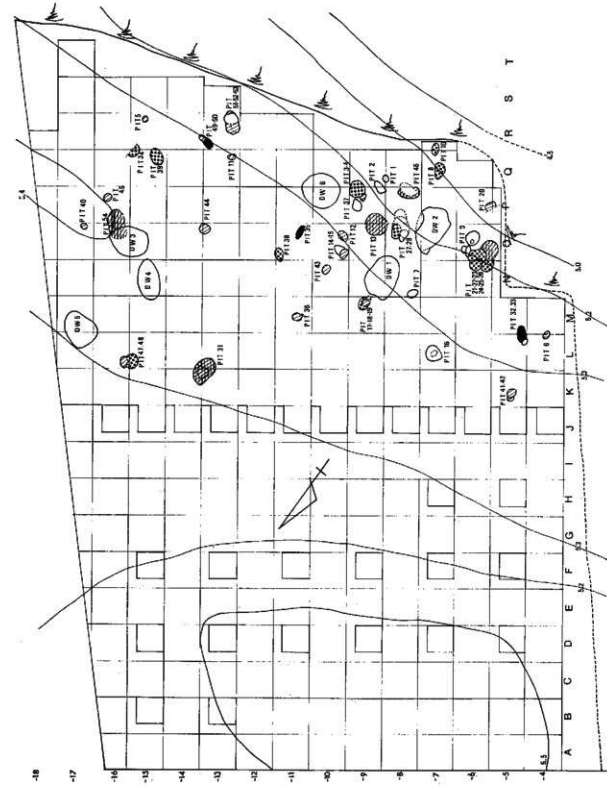
遺構の群在と遺跡の性格について

本遺跡に見出された遺構は、第3章に触れたように、5.0mから5.3mのコンタラインで示される紅葉山砂丘の内陸側縁に沿って偏在し、そのなかでも遺構や遺物の集中が顕著に認められる箇所が4つほどあった。これをさらに大まかにみると、この4ヶ所は、さらに2つに大きくまとめられる。すなわち、第3、4、5号竪穴住居址遺構とその周辺のピット群からなる西側のグループ、そして、第1、6号竪穴住居址遺構およびその周辺のピット群から構成される西側のグループとである。西側のグループの方は、あるいは既に道路の敷設によって破壊されてしまった部分での遺構の存在を想定して、さらに二分しうるものかも知れない。

N293遺跡でも、部分的な重複は認められるが、このような大きくまとまった遺構群が数ヶ所にみられ、この遺跡では、覆土より伴出の土器型式にも、ほぼそれぞれの群に対応した相違が認められている。しかし、本遺跡の大別された二つのグループでは、出上の土器型式の相互に差は認められなかった。また、Ⅰ～Ⅳ型に分類されたピットのそれぞれは、ピットのタイプ別によって分布に異なる様相が認められることはなく、本遺跡の場合もN293遺跡においても、それぞれの遺構群にはⅠ～Ⅳ型ピットが散在している(第40図)。

いずれにせよ、それぞれ数軒単位の恐らく住居としての機能をもっていたと思われる竪穴住居址遺構と、比較的数多くのピット群とから構成される遺構の大きなまとまりは、本遺跡およびN293遺跡の遺跡としての在り方の特色といえよう。

このように竪穴住居址とピット群とからなる遺跡の類例は、必ずしも十分に知られているわけで



第40図 N295、N309連棟ビルのタイプ別分布図

はない。当湧遺跡では、堅穴住居址と多様なピット群とが混在し、比較的新しい時期の遺構が北西部に集中する傾向が認められるのかも知れないが、遺跡の詳細な全貌が判らず、混在と表現するしか、これとって遺構群の在り方を説明しきれない。中の沢B遺跡では、先に触れたように、堅穴住居址が環状に存在するという特徴的な集落構造が報告されているが、この堅穴住居址群の北方に拡がって存在する数多くの多様なピットについては報告がなく、堅穴住居址との関係を知ることができない。西結梗D遺跡では2軒の堅穴住居址と、その西方に小屋掛風の土塼、貯蔵穴などと呼ばれるものが存在し、これらが一つの集落を構成していると報告されている。しかし、残念ながら発掘区に制限されて、これらの遺構の北方や東方への拡がりがどのようなものなのか不明である。西脱遺跡では、環状を思わせる配置をもって堅穴住居址が群在し、そこからさらに20m程離れた場所にも数軒の堅穴住居址が検出されており、第4号堅穴住居址のまわりを中心とした部分や、北東部の堅穴住居址群の南西にも比較的多数のピットが存在しているが詳細は不明である。大塚和義（大塚1964）によれば、北海道では、基地に限って埋葬が行われるようになるのは、他界観の成立する縄文後期以降のことだという。この見解が正しいものと仮定すれば、堅穴住居址の周囲に存在するピットのいくつかが墓墳である可能性は否定できない。

ともかくも、これらの類例からいえることは、本遺跡やN293遺跡にみられた、堅穴住居址状遺構と多様なピット群との混在が、必ずしも例外的な在り方ではなさそうだという事実である。堅穴住居址だけがまとまって発見される遺跡と、堅穴住居址およびピットの両者が群在する遺跡とでは、遺跡の性格に相違が認められるべきかも知れない。しかし、今の時点では、資料が乏しく結論を導くことはできない。

本遺跡やN293遺跡に見出された堅穴住居址状遺構は、恒久的な住居としての構造に欠けることが多く、遺跡それ自体もまた一時的あるいは季節的な生活の場であったろうとの想定が可能である。その反面、一つの遺構群としてのまとまりが、数軒の堅穴住居址状遺構と比較的多数の多様なピット群とから構成されていることは、比較的多数の人間が一定程度の期間、ここを利用したことを暗示するかのようである。換言すれば、道央部以北の縄文中期後半の堅穴住居址あるいは堅穴住居址状遺構に、定形的なプランや明確な炉址、整然たる配置を有する柱穴などがごく稀にしかみられない事実は、居住の恒久性を否定する要素としてではなく、住居構築上の文化的な特性として理解されるべきかも知れない。本遺跡およびN293遺跡の遺跡としての性格については、今後さらに検討が加えられ、次第に明らかにされることであろう。

（高橋 和樹）

第5章 発掘区出土遺物 (第41～66図, 図版34B～47B)

発掘区の遺物の出土区には、大きく2つのグループがある。1つはL～Q—17～12区のグループと1つはL～S—13～17区のグループである。この内前者は、N～P—17～8区に集中し、後者は、P～R—14～16区に集中する傾向がある。この出土状況は、遺構群の有り方と一致する。

第1節 土 器 (第11図4, 第41～50図, 図版34B～40B)

本遺跡の発掘区から出土した土器は、おおまかに7つの群に分けられる。ただし、第Ⅶ群は底部片のみを一括したものである。

以下、個々に簡単に説明する。

第Ⅰ群 (第11図4, 第40～46図, 図版34B～39B)

この群は、A～K類までの11に細分されるが、すべて、所謂「円筒土器上層式」の系列を引くもので、施成は非常によく内面をきれいに研磨しているのが特徴である。胎土には、若干の繊維を各類共含んでいる。

A 類 (第41図1～12, 図版34B, 35A)

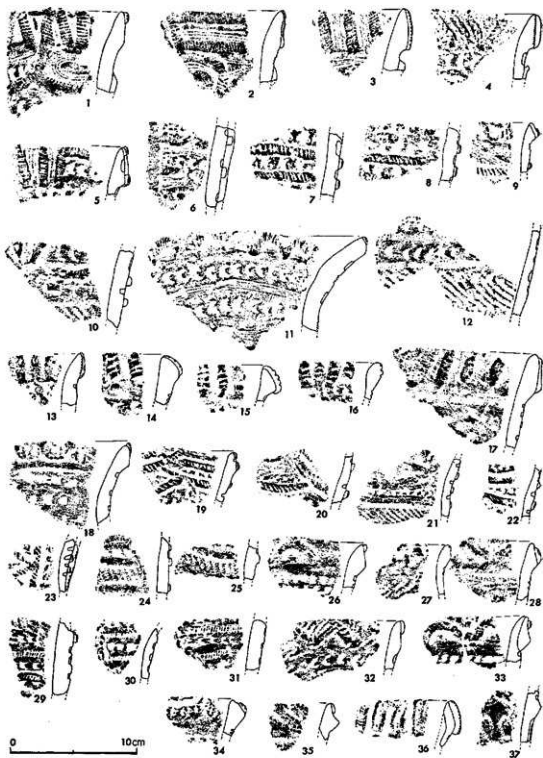
この仲間、肥厚帯を有し、この上に縦位ないし鋸歯状に貼付文が施され、肥厚帯の下には同様の貼付文が、縦・横・斜方向に施されている。これらの貼付文上には燃糸瓦痕文があり、貼付文間には燃糸瓦痕文と絡繩体による馬蹄形瓦痕文で充填されている。ただし4は、肥厚帯上の貼付文は斜めでその間にあるのは絡繩体瓦痕文である。12は、燃糸瓦痕文のかわりに絡繩体瓦痕文が施されている。10は、絡繩体による馬蹄形瓦痕文と、絡繩体の先端による刺突文がある例である。

2, 3, 9は、破片内では馬蹄形瓦痕文はなく、また、11, 12には、口縁部に貼付文はないようである。

地文は、小破片のため判然としない。

同様の例は、第3号竪穴住居址状遺構 (第12図21), 第22号, 第25号, 第49号ピット (第34図1, 3, 第33図29, 第35図31), P—15, 16区 (第37図6～8, 19) などで認められる。

なお、貼付文上には吉崎 (吉崎1965) によると一般に燃糸文が施文されているとのことであるが、燃糸瓦痕文か絡繩体を回転した燃糸文であるかは、現実的には非常に判断が難しくここでは決定を保留しておく。また、馬蹄形瓦痕文に関しては、燃糸原体によると普通説明されている (吉崎1965, 村越1974)。実際そのような例が多い様に思われるが、少なくとも本遺跡の例は、燃糸原体とか繩文原体を用いて施文された例ではなく、単に原体のみを用いたいと考えるなら、それは組紐原体しか



第41图 兔场区出土土器拓影图(1) (第I群A·B·C类)

考えられない。しかし、施文された疋痕文の節間は狭長で、連続して施文されており、しかも疋痕文の形態は殆ど同じである。また、13, 15例の半弧形ないし楕円形疋痕文の施文原形も馬蹄形疋痕文のそれと同様であると考えられるので、原形はこれら馬蹄形疋痕文の原形も絡繩体であろうと考えられるのである。軸は少なくともU字状に曲ったものでこれに撚糸を巻いたものと考えられよう。

B 類 (第41図13~34, 図版34B, 35A)

この仲間には、文様構成としてはA類に近いものであるが、絡繩体による馬蹄形疋痕文がなくなり、先の丸い窟・先の細い棒状工具ないしは半載竹管による爪形文ないしは刺突文がある例で、貼付文間には然糸疋痕文にかわって、絡繩体疋痕文の出現率が増すものである。肥厚帯があってこの上に貼付文があることは、A類と変わりなく、また、別部にも同様の2本単位を主体とした貼付文がある。しかし、全体にA類より細くなっている。19, 20, 22, 23は、貼付文上は、撚糸文であり、19には、小突起があるようである。14~16, 27, 28, 34は、半載竹管による爪形文で、破片内の観察では、口縁部の貼付文は稀薄である。29~31は、口縁部に横位に絡繩体疋痕文が押圧されている。

同様な例は、竪穴住居址状遺構では、第1号(第12図4, 5, 7), 第3号(第12図18), 第4号(第13図8), ピットでは、第34号(第35図7, 8), 第39号(第35図18, 19), 第40号(第35図26), 第54号(第36図23)そしてP-(1)15, 16区(第37図2~5)などで出土している。

C 類 (第41図35~37, 第42図38~41, 図版35A)

この仲間には、爪形文ないし連続刺突文がなく、絡繩体疋痕文が多用されるグループである。肥厚帯を有しこの上に貼付文があり、肥厚帯下にも横方向・斜の貼付文がある。

37は、口唇部を欠損するが、肥厚帯がありその上と下に、絡繩体による楕円形ないしU字状の疋痕文がある特異な例である。

同様な例は、第40号ピット(第35図23, 27), P-(1)15, 16区(第43図88, 100), 第4号竪穴住居址状遺構(第11図1)などで出土している。

地文は、第4号竪穴住居址状遺構から出土した半完形土器でみると第1種結節の羽状彫文である。

D 類 (第42図42~47, 図版36B)

この仲間には、小突起を有し低い肥厚帯があって、肥厚帯上とその下に細い貼付文が施されている。貼付文上には撚糸文、その周囲には撚糸疋痕文がある。ただし、44は、肥厚帯上は絡繩体疋痕文である。

同様な例は、第4号竪穴住居址状遺構(第13図6, 7), P-(1)15, 16区(第37図9)などで出土している。



第42图 兔圈区出土土器拓影图(2) (第I群C·D·E类)

E 類 (第42図48~78, 第43図79~98, 101~108, 図版35A, B, 36A, B)

この仲間は、破片数が非常に多い。特徴は口唇部下に肥厚帯がある例(48~50, 62~65, 101~104)とない例(53, 61, 66)とがあるが、等しく1~3本の貼付文を口唇部直下に横環させている。102, 104には、ここに環状に貼付文がある。48, 49は、小突起があって突起部分から懸垂状に太い貼付文が施されている。この懸垂状貼付文上には、横方向の貼付文が密に施されている。口唇部文様帯には、50, 54~65, 68~73, 77~81, 83~93, 95~97の如くボタン状貼付文があり、ここから縦・横方向に1~2本単位の貼付文が施される例が基本モチーフと思われる。それ以外に49, 66例の如く、ボタン状貼付文を中心に「X」字状に貼付文がある例もあり、53, 67, 74~76, 82, 94の如く斜・半弧状に貼付文がある場合もある。これらの貼付文上には、絡纏体圧痕文が貼付文に対して直角に施され絡纏文風の感じを出している。ただし、49, 84~89は、貼付文上の絡纏体は同方向である。50, 54は、貼付文の周辺にも絡纏体圧痕文がある。また、90, 93, 96, 103は、貼付文上は燃糸文ないし燃糸圧痕文で、103には円形の刺突文が貼付文上およびその間にあり、90にはその回りに丸棒状工具による刺突文がある。105, 108は、ボタン状ないし環状の貼付文部分の破片である。ボタン状貼付文中央には刺突がある。

色調は、今までのに較べ全体に赤褐色がかっている。

地文は、第一種結節羽状縄文が多い。

同様な例は、堅穴住居址状遺構では、第1号(第12図6), 第3号(第12図20), 第4号(第13図9, 12, 13), ビットでは、第3号(第31図2), 第4号(第33図4), 第9号(第33図16), 第13号(第33図22), 第26号(第34図11, 12), 第40号(第35図25), 第44号(第34図21, 33, 24, 25), 第49号(第35図32), 第51号(第36図3, 10, 12), P-11-15, 16区(第37図1)などで出土している。第3号ビットの例は、完形土器である。

F 類 (第43図109~112, 第44図113~115, 図版36A, 37A, B)

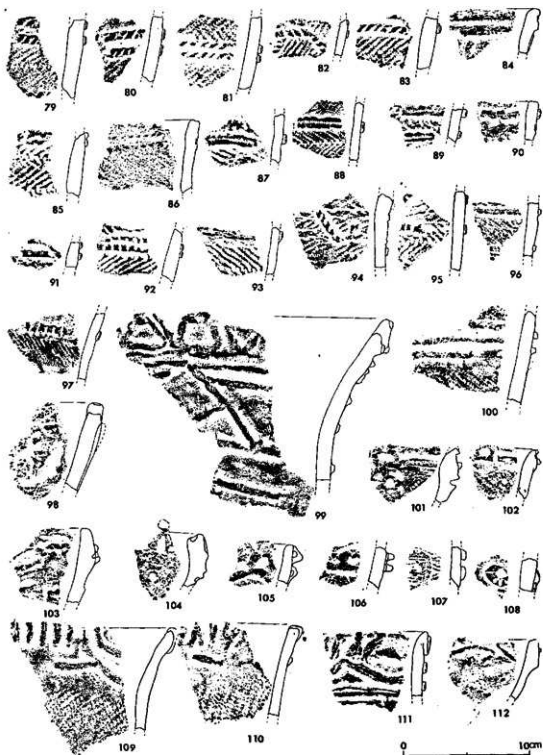
この仲間には、肥厚帯がある例(111~115)とない例(109, 110)とがあり、この部分に縦位ないし斜めの貼付文がある。この下には半弧状と横方向の貼付文がある。ただし、貼付文は、口唇部下4~5cm位の所しか施されていない。貼付文上には、燃糸文のある例(109~111, 113~115)と無文のもの(112, 114)とがある。109~111, 115は、貼付文部分は、地文はなく無文部である。

内面の調整、繊維の含有は顕著ではなく、色調は白っぽい感じである。

同様な例は、第2号堅穴住居址状遺構(第12図17)で1点出土している。

G 類 (第44図116~125, 図版36B)

このグループは、口唇部に貼付による肥厚帯的なものを有するが口唇部が幅広く平らで断面形は三角形ではなく四角形に近い形態である。この上に棒状工具で刻目を施している例が多い。116~120などはその例である。119は、絡纏体圧痕文である。この下には少し扁平な貼付文が施されて



第43图 尧都区出土土器拓影图(3) (第I群E·F型)



第44图 兔旗区出土土器拓影图(4) (第I群F·G·H类)

いるらしい。121も同様の口唇部を有する例であるが刻目はなく地文が施されている。122～124は、幅広の貼付文があって、この上に棒状工具による刻目がある例である。122は、口唇部が少し狭っており、口唇部直下にも同様の工具による沈線文と刺突文があるようである。123は、地文は複節縄文である。

125は、突起部分は欠損しているが、口唇部には特に肥厚帯といったものはなく、棒状工具による連続刺突文がある例である。器形は少し胴張りし、やや外湾する傾向がある。

地文は、122は斜行縄文、125は羽状縄文である。

同様な例は、第2号堅穴住居址状遺構（第12図15）で1点出土している。

H 類（第44図126～136、第45図137～158、図版37A、B）

この仲間は、肥厚帯があってこの上に貼付文があるが、その下には地文以外の文様がない例である。ただし、小破片の例には肥厚帯下に貼付文がある可能性があるが、ここで一括して説明する。

126～129は、縦位ないし斜めの連続貼付文があり、その上とその間に燃糸圧痕文がある。132は、縦位の貼付文上に絡縄体圧痕文、その間に燃糸圧痕文がある。

130、131は、縦位の貼付文上とその間に絡縄体圧痕文がある。135と137は、鋸歯状貼付文上とその間に絡縄体圧痕文がある。136は、小突起があり、貼付文上は燃糸文である。134、138～141、149、150は、鋸歯状の貼付文があり、この上に絡縄体ないし燃糸の圧痕文がある。148は、鋸歯状の貼付文があって、絡縄体を斜めに押し压した刻目がある。

142～146は、結縄風の貼付文があり、この上に絡縄体圧痕文がある。ただし、これらは146例を除いて、肥厚帯はない。142、144には、小突起がある。従って、これらのグループは、E類の仲間かもしれない。

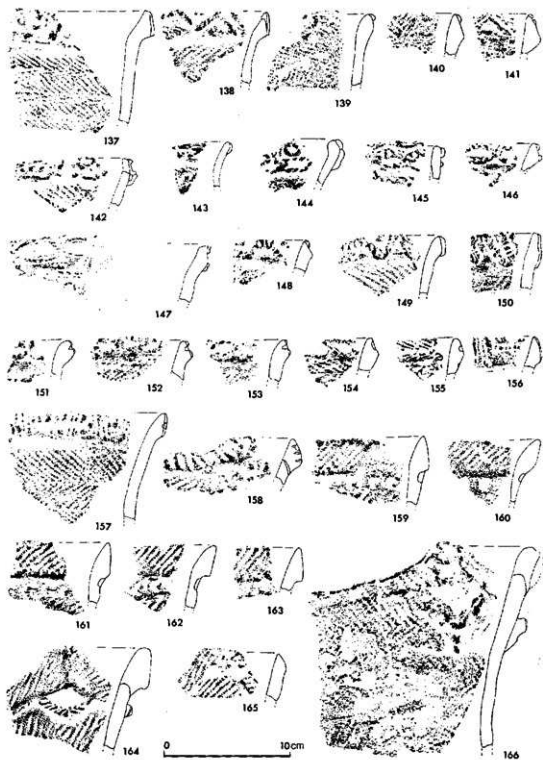
147は、肥厚帯上に環状の繰り返しの貼付文があり、この上に燃糸圧痕文がある。151～153は、結縄風ないし環状の繰り返しの貼付文があり、この中央に刺突がある例である。156、157は、低い縦位、横方向ないしは楕円形の貼付文上に絡縄体圧痕文がある。158は、特異な例で棒状工具による刻目がある。154、155は、共に肥厚帯上に、棒状工具、指頭による刺突文がある。なお155には、この下に小さな刺突があるようである。他の説明をしなかった例は風化して判然としない。

地文には、第2種結節のある斜行縄文、第1種結節のある羽状縄文などがある。

同様な例は、堅穴住居址状遺構では、第3号（第12図19、23）、第4号（第13図11）、第5号（第13図19、20）、ピットでは、第1号（第31図1）、第9号（第33図12～14）、第13号（第13図3、第33図20、21）、第22号（第33図4）、第26号（第33図6～8）、第51号（第31図1、2、9）、第54号（第36図22）、P—15、16区（第37図11～18）などで出土している。この内、第1号、第13号ピットの例は、完形ないし半完形土器である。

I 類（第45図159～163、図版37B）

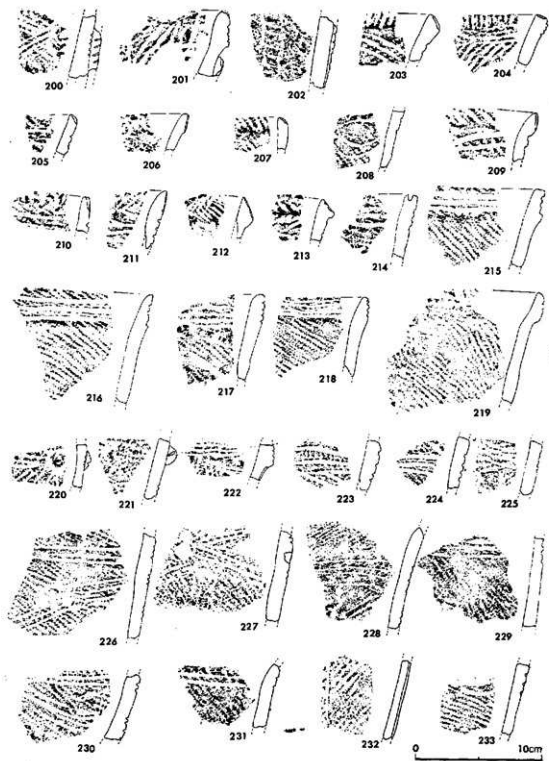
この仲間は、肥厚帯があって、その直下にA類と同様の絡縄体による半弧状の圧痕文が横環する



第45图 兔湖区出土土器拓影图(5) (第I群H·I·J型)



第46图 尧都区出土土器拓影图(6) (第I群J·K类)



第47图 兔福区出土土器拓影图(7) (第I群K类)

例である。肥厚帯上とその下は地文のみである。

J 類 (第45図164~166, 第46図167~196, 図版37B, 38A)

この仲間、肥厚帯と小突起があるが、肥厚帯上にも、その下にも地文以外の文様がない例である。174には、小突起下にボタン状貼付文がある。167は、三角形の突起がある。165は、弁状突起の破片である。164, 166は、三角形の突起とその下にV字状の貼付文がある。164のV字状の貼付文上は棒状工具による刻目がある。

193~196は、肥厚帯がないがあっても低いものである。

179, 182は、突起部分の破片である。

180, 181は、突起及び肥手部分の破片で、180は、円形の貼付文があり、C~J類のどれかに属する可能性もある。

地文は、第1種結節羽状縄文である。

同様な例は、堅穴住居址遺構からは、第1号(第12図2, 3), 第3号(第12図24, 25), ピットでは、第2号(第33図3), 第21号(第33図26), 第34号(第31図4, 第35図6, 16), 第43号(第35図23, 24), 第51, 52号(第36図4~7), P-(1)15, 16(第32図7, 第37図21~25)などで出上している。なお、第31図4, 第32図7は完形土器である。

K 類 (第11図4, 第46図197~199, 第47図200~233, 図版30, 38B, 39A)

このグループは、沈線文が文様の主体を占めてくるものである。

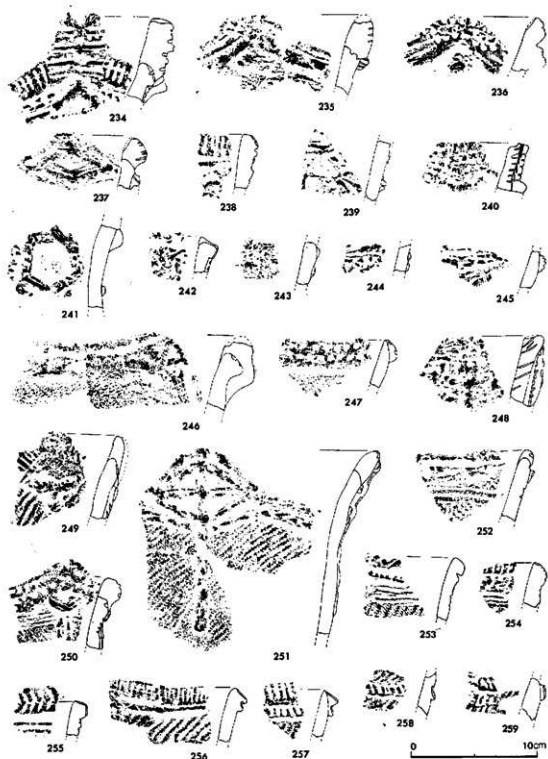
197~202には、縦位ないし斜めの貼付文があり、この上に先の尖った工具による刻目などがあり、口唇部が残っている例である。197, 199, 201の資料では、低い肥厚帯があってこの上にも斜めの刻目がある。沈線文は、横および斜めに施され木葉状ないしは「X」字状にアレンジされている。

第11図4, 199, 203~208は、貼付文はなく、口唇部がやや厚くなって肥厚帯的なものがある。この上に斜めの刻目があり、この下部に横走ないし木葉状の沈線文が施されている。なお、第11図4と207, 208は、同一個体と推定される。第11図4は、風倒木痕から出土した土器で1/4程の口縁破片である。推定口径は17cm程で、器厚は8mm程である。小突起を有し、不明瞭な肥厚帯部があり、この上に斜めの刻文(沈線文)がある。口縁部には、幅1.5mm程の狭い2本単位の沈線文が半弧状に上下逆に施されている。地文は、風化してははっきりしないが、羽状縄文であろうか。内面は、研磨され光沢をもっている。胎土には繊維を含まず色調は黄褐色である。

207, 209~214などの例は、肥厚帯がないかあっても低く、この上に「く」の字状ないしは斜め、縦の沈線文がある例である。212, 214は、小突起が観察される。この下には、横走ないし少しかーブのある沈線文がある。

215~219は、口唇部下に低い肥厚帯的なものがあるが、ここに横走する沈線文が施された例である。217には小突起があるようである。この下には、沈線文は観察されない。

他の例は、すべて口唇部を欠損する。220, 221には、ボタン状貼付文がある。沈線文はおおむね



第48图 兔嶺区出土土器拓影图(8) (第I群)

1.5～2mm程の幅で、横および斜め、半弧状に施され「X」字状ないし木葉状のモチーフである。

このグループの地文は、すべて単節の斜行縄文である。

同様な例は、堅穴住居址状遺構では、第1号(第12図1)、第2号(第12図16)、ピットでは、第34号(第31図5、6、第35図13～15)、第51、52号(第36図15～19)などで出土している。第34号ピットの第31図の例は、完形土器である。

第Ⅱ群(第48図234～259、第49図260～281、図版39B、40A)

この群は、文様構成上では、幾つかに細分は可能であるが、全体の破片数が僅少なので一括して取り扱う。

最大の特徴は、半載竹管を多用していることである。

234～240、242は、口唇部を有する破片で、肥厚帯と小突起がある。この肥厚帯上には、縄文原体とか結繩体による丘稜文ないしは半載竹管による内面突引文および丸棒状工具による刺突文などが施されている。234～237例においては、突起下に「V」字状ないしボタン状の貼付文がある。234、238、239例は、肥厚帯下には、半載竹管による連続内面突引文の施された貼付文と貼付文上を半載竹管で内面を引いたものなどが施されている。

241～245は、これら肥厚帯下に貼付文のある例である。246、247も、肥厚帯と小突起があるが、肥厚帯下には、地文以外の文様はないようである。肥厚帯上には、半載竹管の内、外面を肥厚帯に対して直角に連続押圧した文様などがある。

248、249、251は、上述例に較べ焼成はあまりよくなく白っぽい色調をした例で、248、249の文様構成は、前述のものと同様であるが肥厚帯が少し低いようである。

251は、小突起はあるが肥厚帯はなく、少し平べったい貼付文が、突起部分と口唇部直下に横走ないし斜めにある。また、縦位の同様の貼付文が突起下にあるが、他の部位は地文のみである。貼付文上は内面突引文である。

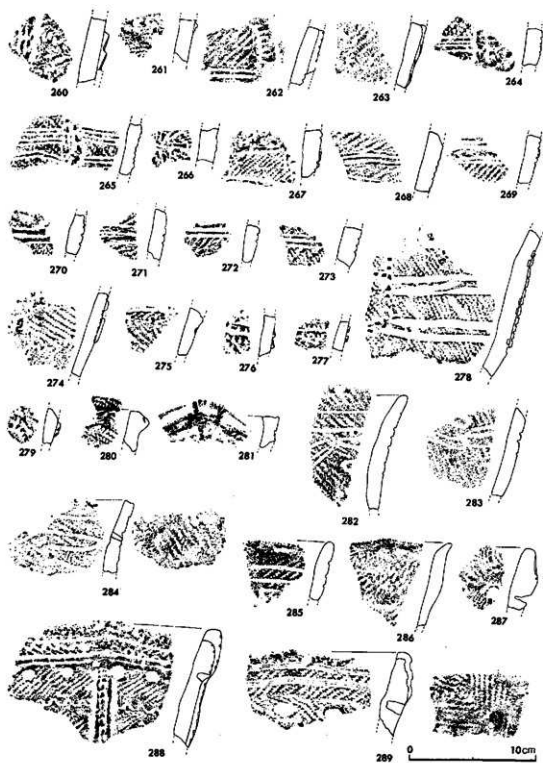
250、252～255は、肥厚帯があって、その下に半載竹管の内面を引いた横走沈線文がある例である。253、256、257は、肥厚帯下に少し幅広の貼付文を施し、ここに半載竹管を貼付帯に対して直交させて連続押圧している。この内、256、257例ではこれらの肥厚帯および貼付帯下に文様は観察されない。258、259も、同様の例であるが、口唇部を欠損している。

260～279は、口唇部を欠損するが、口縁部の破片である。

262、263は、縦位の貼付文と横走る半載竹管による沈線文がある例である。貼付文上ないしはその横に半載竹管による内面刺突文ないしは突引文がある。264～267も同様の例であるが貼付文は低い。268～273は、横走る半載竹管による沈線文のみが観察される例である。274は、縦および横の貼付文と横走る2本単位の竹管の外面による沈線文がある例である。

275、276は、貼付文と沈線文があって、これらの両側に、半載竹管の連続刺突文がある。

277～279は、いずれも小破片であるが、貼付文の側縁に丸棒状工具による刺突文が、連続してある例である。



第49图 尧镇区出土土器拓影图(9) (第Ⅱ·Ⅲ·Ⅳ群)

なお、280は、肥厚帯があってこの上半載竹管の内面突引文がある例である。

又、281は、特異な例で口唇部は平らで、幅広く中央部は溝状にへこんでいる。口唇部の下には半載竹管による内面刺突文がある。

同様な例は、第6号堅穴住居址状遺構(第11図3)から完形土器、ピットでは、第2号(第33図1)、第26号(第34図9, 10, 14~17)、第34号(第35図9, 10)、第37号(第35図2)、第51, 52号(第36図8, 14)、P-(1)15, 16区(第37図26, 27)など出土している。

第Ⅲ群(第49図282~286, 図版39A)

このグループは、肥厚帯は姿を消し縄文々々が出現するものである。更に、沈線文のある仲間(282~285)とないもの(286)とに分けられる。

沈線文のあるグループは、282, 283においては、口唇部は平らで、ここに指頭による押圧がある。沈線文は横走するものとヘアピン状にUターンして、横ないし斜めに施されている。地文は、282~286例共単節の斜行縄文である。

焼成は悪く、茶色を呈し胎土には多くの砂と若干の繊維を含んでいる。

第Ⅳ群(第49図287~289, 第50図290~300, 図版40B)

この群は、肥厚帯と小突起を有し、肥厚帯上には平らな篋による連続刺突文が1~2段あり、この直下に円形刺突文が巡るものである。ただし288, 295は、肥厚帯上の連続刺突文は、半載竹管である。289は、肥厚帯上は平篋を引いた幅広い沈線文である。第Ⅲ群の肥厚帯と著しく異なるのは口唇部が平らである点で、287, 290, 293例には口唇部にも平篋による連続突引文がある。

肥厚帯下には、幅広い貼付文が縦と横方向に施され、この上にも平らな篋ないしは半載竹管による連続刺突文と円形刺突文がある。

地文には、第一種結節羽状縄文(289)、第二種結節羽状縄文(287)、同斜行縄文(288)などがあり、287, 289, 299には内面にも縄文がある。

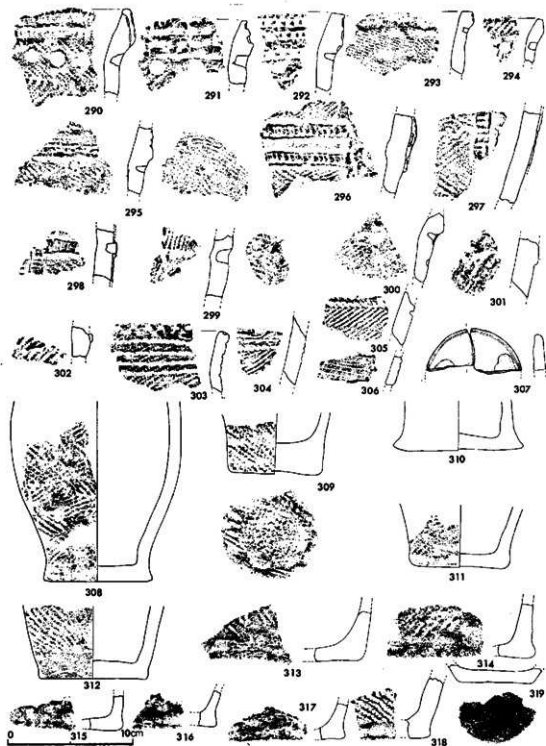
胎土には、若干繊維を含む。

同様な例は、堅穴住居址状遺構から数多く出土している。第1号(第12図8~12)、第3号(第12図28~30, 第13図1~4)、第4号(第11図2, 第13図14~17)などであり、ピットでは、第21号(第33図27)、第34号(第35図11, 12)、P-(1)15, 16区(37図28~32)などで出土した。

第Ⅴ群(第50図301, 302, 図版40B)

2片だけであるが、器が厚く幅広い貼付文が観察できる。胎土には、繊維を含まず白っぽい色調である。

第4号堅穴住居址状遺構から出土した第10図の資料もこの仲間の可能性が高い。



第50图 瓮圈区出土土器拓影图(10) (第IV·V·VI·VII·VIII)

第Ⅵ群 (第50図303~306, 図版40B)

このグループは、肥厚帯はなく、口唇部下に燃糸圧痕文が幾段か施される例である。303は、口唇部が残っており、口唇部には棒状工具による刺突がある。器形はやや外筒する。306は、特異な例で、浅く狭い沈線が横走している。

焼成はよいが、色調は灰褐色で白っぽく、胎土には繊維などは含まない。

第Ⅶ群 (第50図308~319)

底部片のみを一括して説明する。

308は、軽い張り出しがあり、胴部はややふくらんでいる。地文は、羽状縄文である。309は、地文が複節縄文で、張り出しはなく、地文が底にまでついている。310は、張り出しがかなり強い例である。312、313は、張り出しはあまり顕著ではない。314~318はやや軽い張り出しがある。いずれも底近くは無文部である。319は、特異な例で底から胴部にかけては、やや大きく開いている。

土製円盤 (第50図307, 図版40B)

直径7.5cm, 厚さ8.5mm程の土製の円盤である。胎土には、多量の繊維を含み、色調は白っぽい。重量は、現存部分で23.5gであり、本来47g程であったかと思われる。

以上、7群に分けて説明した土器について簡単に考察を加えてみたいと思う。

まず、第Ⅰ群としたものは、非常に数多くの種類を含むが、すべて「円筒土器上層式」の系列を引くものと考えられる。

この「円筒土器」は、長い研究史をもっているわりに、その編年の研究は誠に遅れている。最近の研究では、江坂輝弥の青森県西津軽郡石神遺跡の資料を中心とした編年(江坂編1970)とそれを受けついで、村越潔の編年(村越1974)などがあり、北海道内では、高橋正勝が縄文時代中期の土器群を論じた中で、この問題について詳しく触れている(高橋1972a, b)。しかし、いずれも地域的にも、資料的にも数多くの例を比較検討した訳ではなく、単に道南地域の資料を中心に型式学的に配列したもので、層位的な裏付けとか地域的な差違については示されていない。しかも、道内の縄文時代中期の土器について体系的に述べた高橋の論考は、具体的な資料を一切明示しておらず、同じテーブルに立って高橋の考えが正論かどうかを検討するすべがない。

ここでは、これらの編年を検討し、新たなテーブルを提示するいとまがないので、先学の型式把握と編年を踏襲し、単に位置を示すだけに留めて置く。

第Ⅰ群は、A~K類の11種類に細分されたが、A類は、絡縄体による馬蹄形圧痕文および太い隆起帯(貼付文)の存在、そして燃糸圧痕文の多用という点から、「サイベ沢Ⅴ式」ないしは「円筒七層b式」に比定されよう。B類は、絡縄体以外の工具による爪形文と細い貼付文の存在から、村越編年の「上層C式」に相当しよう。

C～F, H類は、馬蹄形疋痕文ないしは爪形文が消失し、貼付文のみになった例で、高橋のいう所謂「サイベ沢Ⅵ式」に相当する。村越編年に従えば、E類は「上層d式第1類」に、F類は、貼付文上に文様がないことから「d式第2類」に、H類は、胴部に貼付はないが、肥厚帯上に顕著な貼付文が残ることから「d式」に相当する可能性が高い。C, D類は、その位置が明確ではないが、村越編年の「C式」に文様要素の上で一番近いと思われる。

G, I, J, K類は、貼付文の添加が極く限られた所になり、沈線文が出現するもので、所謂「サイベ沢Ⅶ式」ないしは「見晴町式」といわれる範疇に入るかと思われる。これらは、村越編年の「e式」そして「最花式」（江坂編1970）に相当しよう。

ところで、第34号ピットから出土した3個体の土器は、P-1, 2はK類に、P-3は、肥厚帯下に連続刺突文があるがJ類に近いと考えられる。この内K類の2例は、「サイベ沢Ⅵ式」ないしは「見晴町式」に相当する。また、第54号ピットおよび周辺から出土した7個体の土器（第32図）は、1, 3, 4, 6はH類、2, 5は肥厚帯下に円形文ないし半截竹管による連続刺突文があるが、H類に近い位置を与えられる。7は、J類である。この7点は、肥厚帯下には、5例を除いて貼付文はないが、「サイベ沢Ⅵ式」に近い時期の一層のセットである可能性がある。

第Ⅲ群は、半截竹管を多用したもので、高橋により「天神山式」、「智東B式」と仮称されるものである。

第Ⅳ群は、縄文々々と、沈線文がある例で、「手稲砂山式」と仮称されるグループである。札幌市手稲前田砂山（石川1967）、恵庭市下島松北第3遺跡（大場・石川1966）、伊達郡伊達町若生貝塚C型（名取・峰山1957）、函館市西桔楼E₁遺跡土壙（千代編1974）なども同様の例かと思われる。

第Ⅴ群は、トコロ第6類である。

第Ⅵ群は、小破片のため判然としないが、伊達山式かと思われる。なお、第4号堅穴住居址状遺構から出土した第10図の資料は、口唇部を欠損するが、器形・貼付文の形およびその上に地文と円形刺突文の施されていることなどから、最も近いグループは「伊達山式」かと考えられる。ただし、鋸歯状に貼付文が配される例は初見である。

第Ⅶ群は、函館市紅葉山西股遺跡で出土した「ノダップⅢ式」（松下ほか1974）に最も近いようである。

以上、見てきたように、本遺跡からは、サイベ沢Ⅴ, Ⅵ, Ⅶ式、天神山式、手稲砂山式、トコロ第6類、伊達山式、ノダップⅢ式などが出土しているが、主体を占めるのは、「円筒土器上層式」の系列を引くものである。とりわけ、サイベ沢Ⅵ～Ⅶ式が多い。ただ断っておかねばならないことは「サイベ沢Ⅵ式」といわれるものの実体そのものが、その標式遺跡であるサイベ沢遺跡（児玉・大場・武内1958）でも明確に捉えられていないため、このⅥ式の中にサイベ沢Ⅴ式とサイベ沢Ⅶ式の間で文様変遷史的に位置する、地域的・文様の異なる数多くの種類の円筒土器上層式の系列を引く土器群を一戻して取り扱わざるをえない状況である。今後、それらは細分され、地域差が考慮され新たな型式名が冠されねばならないであろう。

（上野 秀一）

第2節 石 器 (第51~66図, 図版41A~47B)

本遺跡からは、約250点の石器が出土している。石器の器種としては、石鏃、石錐、石鋸、各種のナイフ状石器、振器、各種の削器、両面体石器、扁平石核、各種の剝片、各種の石斧、石鏃、砥石、掠石、有溝石製品、敲石、礮器などからなっている。これらの石器群は、サイベ沢Ⅵ~Ⅶ式、天神山式、トコロ第6類に伴なうものであるが、これら四者の土器群は、前節で述べた通り、ほぼ同時期——縄文中期中葉——4,000年B. P.前後の年代を与えることができる。特に、遺構内出土土器および発掘区出土土器の中で主体を占めるのはサイベ沢Ⅵ~Ⅶ式である。従って、これらの石器群の多くは、サイベ沢Ⅵ~Ⅶ式に伴なったものと考えられることもできよう。

分類は、形態型式論を基準にしている。石質は、特に断らないが、詳細は第10表を参照して頂きたい。

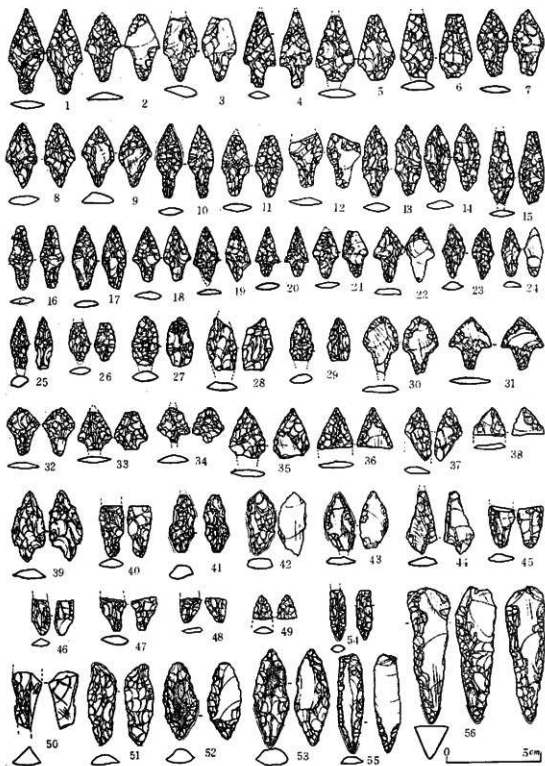
1 石 鏃 (第51図1~49, 図版41A)

出土した石鏃は、すべて有茎である。これらは、基部および逆刺の作出の程度、尖頭部の形態、全長および重量によって、幾つかに細分は可能であるが、基本的に、形態としては同一のタイプとすることができる。

全長は、32の25mmを最小として最大は1の44mmであるが、1, 3~6, 15, 35~37例の4cm以上の大形例を除いて、あとはすべて25~35mmの範囲で、かなりまとまりがある。重量は、24の0.6gを最小とし、最大は3の2.6gである。重量のヒストグラフをとると3つのピークがある。0.6~1.3g, 1.5~2.1g, 2.3~2.6gの三つである。ただ、形態上では、これら三つのグループの間に特に顕著な差を認めることができない。尖頭部の長さ(a)と最大幅(b)の比(a/b)の値は、0.8~1.4の間に約65%収まってしまう。ただ、30~32例は0.5~0.7の値を示し、横幅が広く、1, 10, 13, 39例は、1.5~1.6の値を示し、幅の割りに比較的尖頭部が長い。4, 5, 15例は、1.8~2.5の値を示し、極端に長い例である。石質は、殆んど黒燧石で、3のみ泥岩である。

これらの形態とか傾向は、遺構内出土の石鏃でも同様である。

個別に説明すると以下の如くである。1は、a面に横方向の短かい擦痕がある。2は、先端部が欠損し、b面に一次剝離面が幅広く残っている。3は、両面に素材面が残っている。4~6は、先端と基部の一部を欠損する。7は、b面に一次剝離面があり、ここに横方向の短かい擦痕がある。8は、a面に原石面が一部残っている。9は、b面に縦・横の短かい擦痕があり、両面に素材面が残る。10は、尖頭部先端が全体に著しく磨耗し、赤色の付着物がある。11は、先端が少し欠損し、a面に素材面が少し残る。12は、b面に一次剝離面が残り、素材が縦長剝片であったことが判る。13は、尖頭部が五角形になるように加工されている。14は、a面に原石面が少しある。15は、b面の一部に一次剝離面が残っており、素材は縦長剝片である。16は、先端が尖らず平坦で、b面に一次剝離面があり、素材は縦長剝片である。17は、両面に素材面が残っている。18は、b面に一次剝離



第51图 夹洞区出土石器实测图(1)(石镞·石锥)

面がある。19は、基部を一部欠損し、尖頭部のa面に顕著な擦痕がある。21は、b面に一次剝離面が残っている。22は、逆刺の一部を欠損し、b面に一次剝離面が幅広く残っている。23は、先端、逆刺の一部を欠損し、加工は粗雑である。24は、a面に原石面があり、b面に一次剝離面が幅広く残っていて、素材は縦長剝片であったことが判る。25は、基部を欠損し、加工は粗雑である。明瞭な逆刺の作出はない。27は、基部を欠損し、尖頭部先端は尖らず、このb面先端に縦方向の擦痕がある。28は、先端と基部を欠損し、27と同様逆刺を明瞭には作出していない。29は、基部を欠損し、逆刺は、やはり強くない。30、31は、両面に素材面が残る、尖頭部は正三角形に近い。30は、先端は尖らない。31は、少し焼けている。32も、30と同様の形態を呈する小形例である。33は、9と同様の形態と思われる。34は、基部が短かく、尖頭部が正三角形に近い形態を呈する例である。35～37は、尖頭部の破片であるが形態としては、1～6と同様かと思われる。38は、両面に幅広く素材面が残る、削器の破片である可能性もある。39は、a面に原石面を残し、加工は全体に粗雑である。40は、基部の破片かと思われるが、長く全体形を伺えない。41は、先端を一部欠損し、加工は粗雑で、非対称形である。磨耗部分はないが石錐の可能性もある。42は、加工はa面側縁のみで、刃部加工は背が高く、削器である可能性もある。43は、両面に素材面が残る、背はあまり高くないが、ほぼ全周に細かい刃こぼれがある。44は、未成品かと思われる。45～48は、基部破片かと思われる。45は、焼けており、素材面が幅広く残る。49は、先端部破片である。

以上述べた通り、石錐の素材は、縦長の剝片が多く、調整(加工)は、両面加工～半両面加工である。これらの石錐を札幌市白石神社における分類(上野1973)にあてはめると、1～26は第1～1類、27～29は第1～3類、30～34は第1～2類に比定できる。

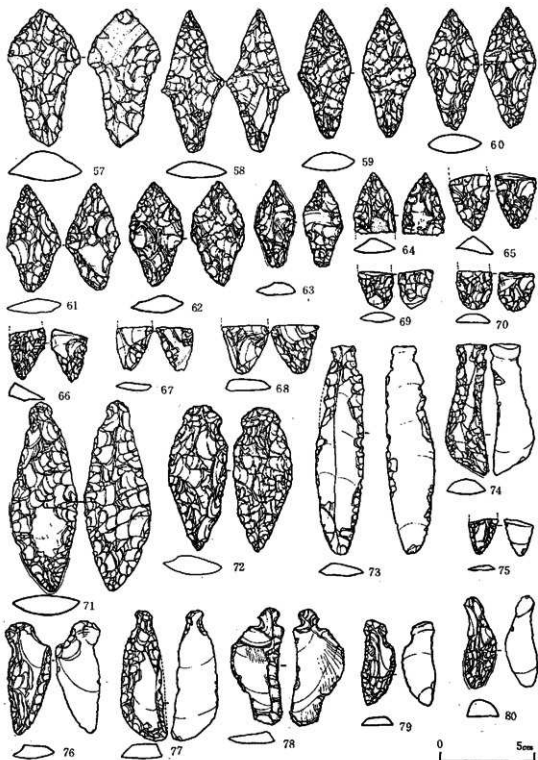
2 石 錐 (第51図51～56, 図版41A, B)

51は、非対称形で、加工は粗雑であるが、尖頭部(下端)のエッジが少し磨耗している。52は、a面に原石面があり、b面に一次剝離が残る。b面の尖頭部の加工は入念で、a面右エッジには顕著な刃こぼれがある。53も、a面に原石面が残る、尖頭部エッジは著しく磨耗している。52, 53は、石質は、各々硬質頁岩と珪岩である。54は、基部を欠損するが、尖頭部は全面磨耗している。55は、頁岩製の縦長剝片を素材にして、尖頭部両面を入念に加工している。尖頭部エッジは磨耗している。56は、部厚い断面三角形の棒状のものを素材にし、三面の側縁を調整しているが、特に尖頭部の加工は入念である。尖頭部は全面磨耗している。

3 石 鋸 (先) (第52図57～70, 図版41B)

57は、断面形が、カマボコ型を呈し、b面に一次剝離面が残る。全体に著しく焼けている。58～62は、両面加工の例である。63は、両面に素材面が残る、縦長剝片を利用していることが判る。64は、尖頭部破片、65～68は、基部破片かと思われる。ただ、69, 70は基底が丸く、67, 68は、素材面が幅広く残り、加工は粗雑である。

これらは、全長は、最小が63の46mmで、最大は58の75mmである。尖頭部の長さ(a)と最大幅



第52図 発掘区出土石器実測図(2)(石筈・ナイフ状石器)

b)との比 (a/b) は、0.6~1.4の間に収まり、特に1.0の所に集中し、正三角形に近い形態を呈する例が多いと判断される。基部は幅広である。重量は、63の6.1gを最小とし、最大は57の31.1gである。8.8~13.7gの所に集中する。

4 ナイフ状石器 (第52図71~80, 第53図81~93, 図版41B, 42A)

ナイフ状石器としたものは、形態、加工方法、つまみの有無で3型式に分類可能である。

なお、ここでいう第Ⅰ型式とは、白石神社遺跡の報告(前掲)の第5-2類に相当し、第Ⅱ型式は、同様に第5-2類に相当する。第Ⅲ型式は、該当する例はない。

第Ⅰ型式 (第52図71~80, 第53図81~85)

加工は種々あるが、両側にノッチを入れつまみを作出しているもので、いわゆる「石匙」といわれる仲間である。全例縦形である。

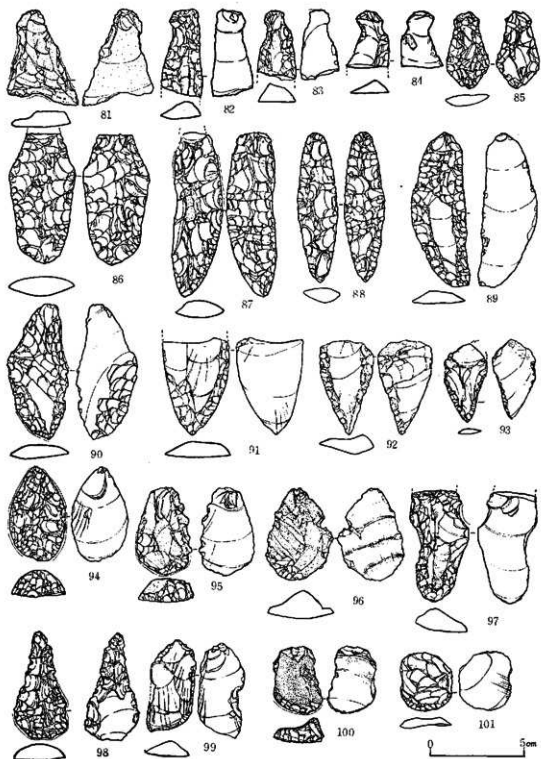
71, 72, 85は、両面加工で、つまみのある例である。71は、a面に素材面が残り、素材が縦長の大型剥片であったことが判る。72は、つまみ部分は幅広い。85は、小形でつまみの作出は顕著ではない。

73~84は、側縁調整ないし半片面調整の例である。素材は全例縦長剥片を利用している。ただし、78, 81は、素材は少し幅広である。73は、b面の加工はすべて新しいもので、刃部は平坦で、鋭利である。74は、刃部は比較的背が高く、尖頭部を作出し、カーブ(convex)している。75は、縦形石匙の先端(尖頭部)破片かと思われる。刃部は平坦である。76は、比較的背の高い刃部を有し、尖頭部がある。77は、背の高い刃部があり、カーブしている。78は、b面にも少し加工があり、比較的背の高い刃部がある。80は、尖頭部を有し、比較的背の高い刃部がある。80は、片面調整で、刃部は背が高い。81は、幅広の縦長剥片を素材にし、a面には原石面がある。強度に拠っている。82~84は、先端部を欠損する。82は、加工は半片面加工である。刃部は背が高い。83は、加工は入念な側縁調整である。刃部は背が高い。84は、比較的背が高い。

第Ⅱ型式 (第53図86~90)

両面・半両面・片面加工で、扁平で、つまみはない例である。対称形のものとは非対称形のものがある。

86は、柄部を作出しているが、柄部先端は欠損する。ほぼ対称形の両面加工の石器である。87は、非対称形の両面加工の例で、尖頭部を作出し、基部は一部欠損する。88は、対称形のきれいな両面加工である。石槍のような形態を呈するが、尖頭部の作出は明瞭ではなく全体に平坦である。ナイフと考えられる。89は、半片面加工の非対称形の石器である。比較的平坦な刃部を有する。90は、半両面加工で、非対称形である。b面の加工は、バルブ部分の高まりを除去するためであろうか。89, 90は、柄を作出する傾向を認めることができる。



第53図 免掘区出土石器実測図(8) (ナイフ状石器・掻器)

第Ⅲ型式 (第53図91~93)

側縁加工で、平面形が三角形に近く、尖頭部を作出している例である。

91は、尖頭部の破片のみで、b面には加工は認められない。92は、打面は幅広く、b面にもパルプの高まりを除去するための加工がある。b面左側縁にも加工がある。93は、一部欠損するが、b面左側縁にも加工がある。

5 掻 器 (end scraper) (第53図94~101, 第54図102~111, 第66図246, 図版42A, B)

掻器には、大きく縦形の例と矩形の例とがある。後者には、全側縁に加工があって、円形掻器と思われるものもある。

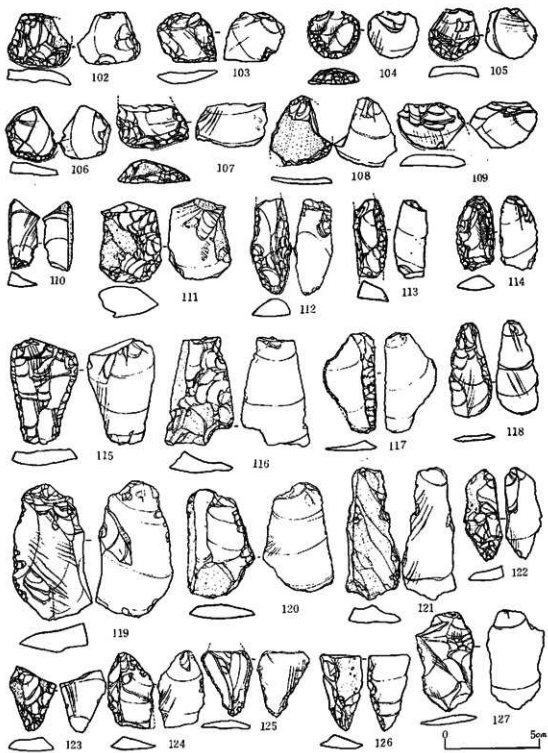
94は、入念な片面調整で、裏面に磨耗した部分がある。刃部はかなり背が高い。95, 96は、刃部のみ加工したもので、a面には幅広く原石面が残る。刃部は背が高い。95には、b面に全面方向不定の擦痕があり、96には、b面に長軸方向主体の擦痕がある。97は、両側にノッチを入れ、つまみ状のものを作成し、焼けている。刃部は非常に背が高い。98は、半両面加工で、b面基部にも入念な加工を施し、基部を細く仕上げている。99は、薄い縦長剥片を素材にし、ほぼ全側縁に二次加工があり、刃部は、比較的背が高い。100は、刃部のみ加工を施したもので、a面には幅広い原石面が残る。b面には不定方向の擦痕があり、パテナは比較的発達している。

101~106は、矩形剥片を素材にした例である。101は、薄手の剥片の一端に加工を施している。102は、剥片の側縁に平坦な加工を施した例で、a面に原石面が残る、パルプの高まりを除去している。103も、一端が短かいが、比較的背の高い加工を施している。両側縁にも加工がある。102, 103のb面には、不規則な短かいキズ跡がある。104, 105は円形掻器と思われるもので、全周ないし半周に背の高い加工がある。共に、b面に不規則なキズ跡がある。106は、少し厚手の剥片の一端に背の高い刃部を作っている。b面には、全周不規則なキズ跡がある。

107は、柄部が欠損しているが、103と同様、a面右は尖頭部を作出し、左側はカーブしている。a面に原石面が少し残り、背の高い刃部が、全周にある。b面に、斜め方向の擦痕が観察される。108は、全周に浅い二次加工があり、a面に原石面が残っている。b面には、不定方向のキズ跡が全面にあり、欠損している。109は、幅広い矩形剥片を素材にし、一次剝離面の方に短く、背の高い加工を入れている。110は、縦長剥片の一次剝離面側の一端に比較的背の高い刃部加工をしている。a面に横方向の浅い擦痕、b面に、縦・横方向の擦痕がある。111は、部厚い矩形剥片の側縁に長い刃部を作出し、a面に一部原石面が残るが、半片面加工に近い。b面に斜めの擦痕がある。掻器の可能性もある。第66図246は、矩形剥片の一端に二次加工を施した例で、b面メジは刃部部分から両サイドにかけて著しく磨耗している。b面には、不定方向の擦痕がある。

6 削 器 (side scraper) (第54図112~127, 第55図128~150, 第56図165~166, 図版42B, 43A, B)

削器としたものは、以上で説明しなかった剥片の側縁に二次加工を施した例をすべて包括し

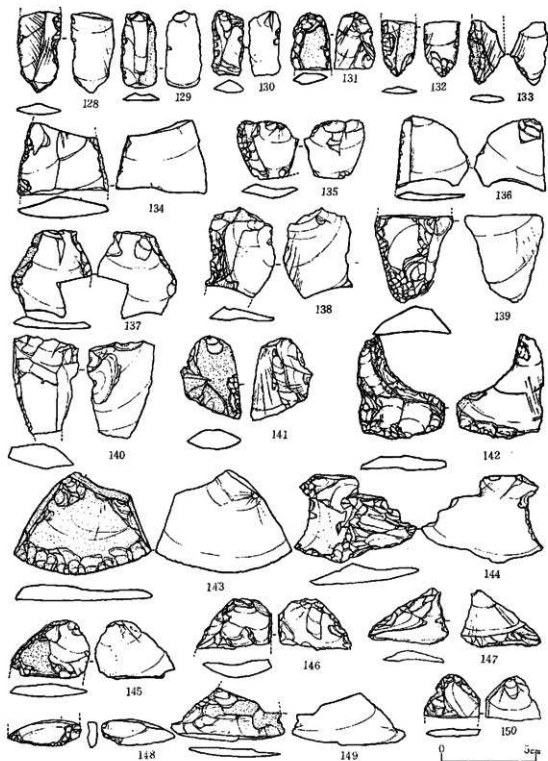


第54图 尧墟区出土石器实例图(4) (锥器·刮器)

た。従って、数多くの種類を含むが、素材を基準に大きく二つに分けることも可能である。一つは、縦長剥片を素材とした例であり、一つは横長ないし矩形の剥片を素材にした例である。

112~133は、縦長剥片を素材にした例である。112~114は、a面の両側縁に二次加工を施した例で、一側縁の二次加工は背が高く、もう一側縁のには平坦な加工をしている。114のb面には、浅い縦長の長い擦痕が観察される。a面にも少し長軸方向の擦痕がある。115、116は、幅広の打面を有する。幅広の縦長剥片を素材にし、115は両側縁に比較的背の高い二次加工がある。116は片側縁に長く平坦な二次加工があり、b面に横方向を主体とした不規則なキズ跡がある。117は、少し幅広の縦長剥片のa面右に平坦で長い加工を施し、左に短かい加工がある。118は、両側縁に浅い加工がある。119は、少し幅広の縦長剥片のa面左側縁に不規則な二次加工がある。120は、a面に原石面が残り、a面右に不規則な二次加工がある。121は、a面全面に原石面が残り、a面左エッジに散発的な二次加工があり、左エッジにも使用痕と思われる不規則な剝離がある。b面パルプ付近には、全面横方向に不規則なキズ跡がある。122は、a面に原石面が残り、二次加工は、a面下部に尖頭部を作出する如く調整している。b面には、不規則なキズ跡がある。a面右は、折り取られているのであろうか。123は、上半分は欠損しているが、122に似た尖頭部状の加工がある。a面に原石面が残り、b面に斜め方向の擦痕がある。124は、両側縁に短かい二次加工がある。125も、パルプ部分を欠損するが、両側縁に短かい二次加工がある。b面に縦方向の擦痕が少しある。126は、パルプ部分を欠損するが、b面左に二次加工がある。少し焼けている。127は、少し幅広の縦長剥片を素材にし、a面右に短かい二次加工がある。128は、パルプ部分を欠損するが、両側縁に二次加工を施し、末端を尖頭部状に加工している。129は、a面に原石面が残り、左に不規則な二次加工がある。130は、a面下部に原石面があり、両側縁に不規則な二次加工がある。131は、a面に幅広く原石面が残り、両側縁に不規則な二次加工がある。b面右にも大きい二次加工がある。下部を欠損する。132は、a面に原石面が残り、両側縁に不規則な二次加工がある。パルプ部分は欠損する。b面は浅い長軸方向の擦痕がある。133は、a面に原石面が残り、a面左、b面右に不規則な二次加工がある。縦・横に浅い擦痕がある。

134~150は、横長ないし矩形剥片を素材にした例である。134は、幅広の剥片を素材にし、両端が欠損している。縦長剥片の可能性もある。a面左に二次加工がある。135は、矩形剥片を素材にし、a面左に平坦で不規則な二次加工がある。136~139は、幅広の縦長ないし矩形剥片を素材にしたもので、いずれも破片である。136は、a面左エッジに不規則な二次加工がある。137は、a面右エッジに二次加工があり、左に原石面がある。138は、a面左エッジに不規則な二次加工があり、上に原石面がある。137、138例共、打面は幅広である。139は、厚い素材を利用し、a面左エッジに不規則な二次加工がある。140は、横長の剥片のa面左に平坦な二次加工がある。パルプは除去している。141は、a面に幅広く原石面が残り、幅広の部厚い矩形剥片を素材にし、a面右下に二次加工がある。パルプは除去している。142は、扁平石核関係剥片を利用したもので、ノッチのある削器の可能性もある。143、144、147は、横長剥片を素材にしている。145、146、148~150は、幅広の剥片を利用したもので、すべて破片である。143は、長軸の一側縁（a面下部）に平坦で長



第55图 兴福区出土石器实测图(5)(石器)

い二次加工がある。a面は加工部分を除いて原石面である。144は、a面の長軸の側縁に不規則な二次加工がある。a面の長軸の側縁に不規則な二次加工がある。b面右側縁にも短い加工がある。145は、下半分が欠損し、a面左に二次加工がある。146も、下半分が欠損し、a面左に散発的な二次加工があり、b面右にも不規則にある。147は、両面体石器ないしは扁平石核の關係剥片で、a面右に短い二次加工、左に散発的な二次加工がある。148は、幅広の剥片の破片で、a面下部に短い二次加工がある。b面に斜めの擦痕がある。149は、上部バルブ部分は欠損し、a面左エッジに不規則な二次加工がある。150は、下部を欠損し、a面左に加工がある。b面に不規則な擦痕がある。

第55図164は、矩形剥片を素材にし、a面全周に二次加工がある。バルブ部分に短いキズ跡がある。165は、バルブ側を欠損するが、柄部を作出するが如く、両面に平坦な加工がある。166も、バルブ側を欠損し、a面両側縁に背の高い二次加工を施し、柄状にしている。a面には原石面に近い所がある。

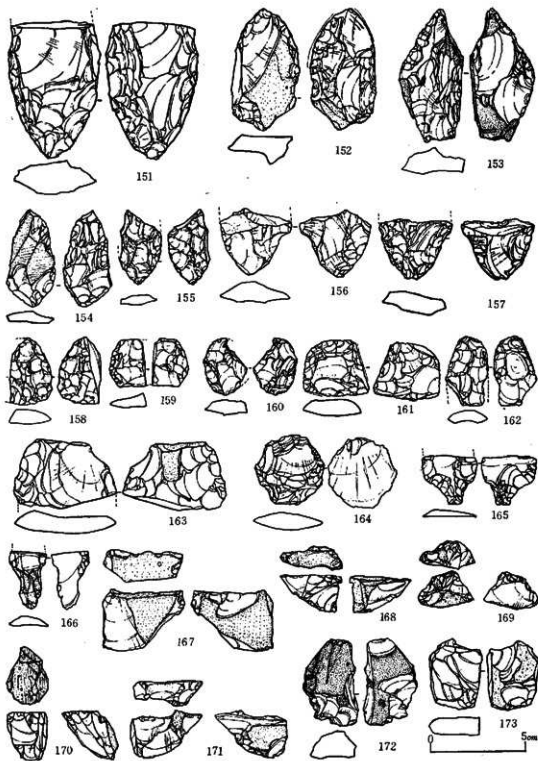
7 両面体石器 (第56図151~163, 第66図247, 図版43B)

両面ないし半両面が調整され、形態は楕円形ないし洋梨形を呈している。性格は、つかみかねる例が多いが、両面加工の石器の未成品の可能性もある。

151は、半両面加工で、上端は欠損する。階段状剥離で、両面に素材面が残る。152, 153は、両面に原石面が残る、薄い扁平な原石を用いたことが判る。共に、半両面加工である。153には、a面左上に長く平坦な二次加工があり、b面には、不規則なキズ跡がある。154は、半両面加工で、a面に原石面が幅広く残る。155は、両面加工で原石面がやはり残っている。153~155は、石銛などの尖頭器の未成品かもしれない。156, 157は、両面加工で、共に上部を欠損する。158~160は、共に半両面加工で、欠損部分がある。161は、欠損部分がなく、半両面加工である。158~160も、この種の形態を呈していたのであろうか。162は、両面加工で下部は欠損するが、加工は入念で、両面加工の削器(ナイフ)の破片の可能性もある。163は、半両面加工で下部を欠損する。b面に一部原石面が残る、b面には全面、a面には両側縁に平坦で長い加工がある。

8 扁平石核 (第56図167~173, 図版44A)

打角は直角に近い例が多い。167の打面は原石面で、打角は直角に近く、矩形剥片を生産している。168は、打面は原石面で、2面から剥片を生産しているが、上の打面は、打角がほぼ直角で、b面左の打面は、少し鋭角である。扇状剥片を生産した痕がある。169は、打面の一部に原石面を残すが、調整のための剥離のようなものがある。矩形剥片を生産している。170は、円錐形に近い形態を呈し、打面は原石面で、面取りは一方のみである。面取り面の反対側も原石面である。狭長の縦長剥片を生産している。171は、打面に相当する部分からも横長剥片を生産し、この打面から、横長剥片を生産している。172は、打角は鋭角で特に打面と思われるものを設けていない。生産している剥片も小さく、石器の未成品の可能性もある。173は、4方向から剥片を取っている。



第56图 免掘区出土石器实例图(6) (两面体石器·刮器·扁平石核)

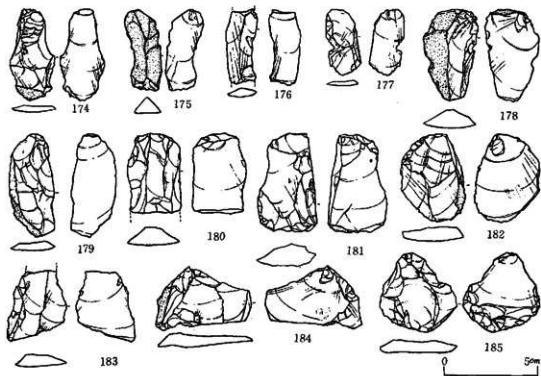
打角は少し鋭角である。矩形剥片を生産している。

9 剥片 (第57図, 図版44A)

第56図には、石器の素材となった剥片を図示した。174~179は、縦長剥片で、176を除いて、a面には少なからず原石面がある。180~183は、やや幅広い縦長ないし矩形剥片で、184、185は、扁平石核関係剥片かもしれない。

10 石斧 (第58~61図, 図版44B, 45A)

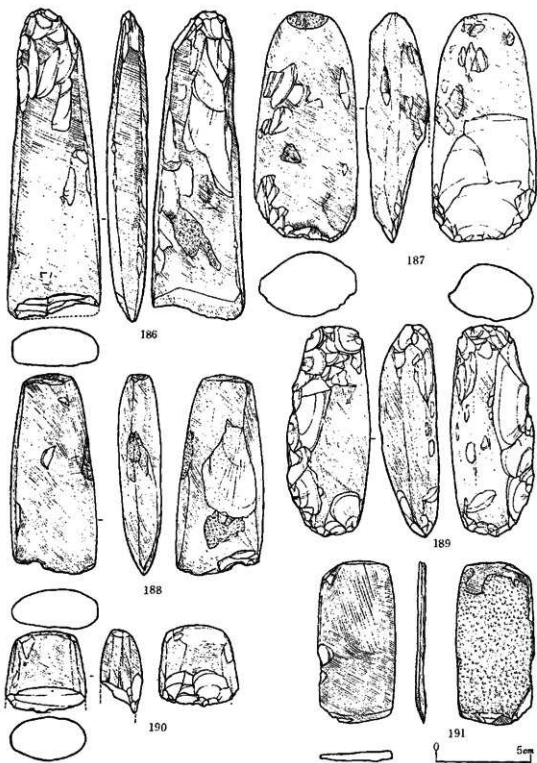
本遺跡出土の石斧は、すべて磨製ないし、半磨製石斧であるが、素材・加工・形態・側面観・刃部の状態に幾つかに細分は可能であるが、しかし、それらの間には、必ずしも顕著な差を認め難く、ここでは個々に説明するに留める。素材に関しては、(1)擦切によるもの、(2)棒状の原石をそのまま用いるもの、(3)板状の石を剥出したもの、(4)厚手の板状の石から折り取ったものなど種々あり、加工に関しては、(1)荒割り後、研磨したもの、(2)荒割りし、その後繰返しの敲打を加え研磨したものがあ。形態は、定角式の例が一番多く、それ以外に長方形、狭長のものがある。側面観に関しては、殆どb面は、平坦でa面はそれに較べ曲面が強い。刃部は、両刃で刃部を上から見ると直線になる例が多いが、若干片刃的で、刃線が少しカーブする例もある。この種の例は、手斧的機能も



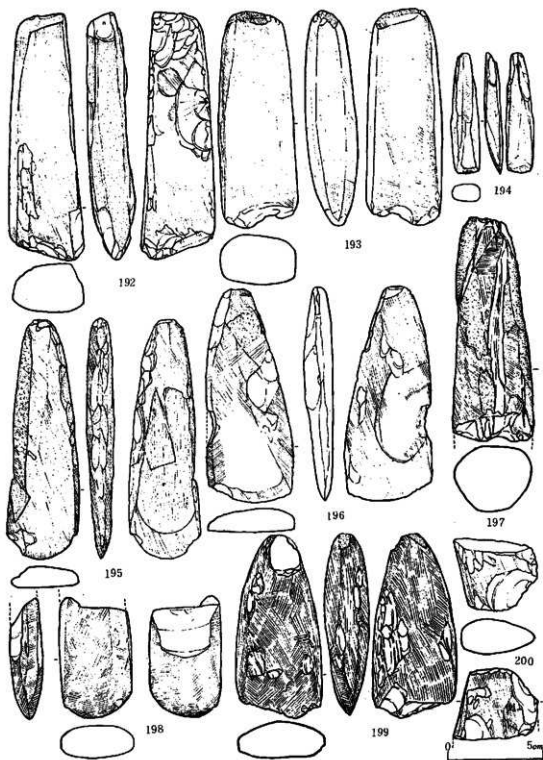
第57図 発掘区出土石器実測図(7)(剥片)

考慮できよう。刃部の平面観は一般に対称形のもの少なく、どちらかに偏っている。石質は殆ど
の例が、神居古潭系の緑色片岩ないし黒色片岩である。それ以外にホルンフェルス、砂岩、硬質
頁岩の例が各1個ある。重量は、194の12gを最小とし、204の280gを最大とし、12~55g（5例）
80~110g（5例）、149~200g（5例）、240~280g（5例）で4つのピークがある。

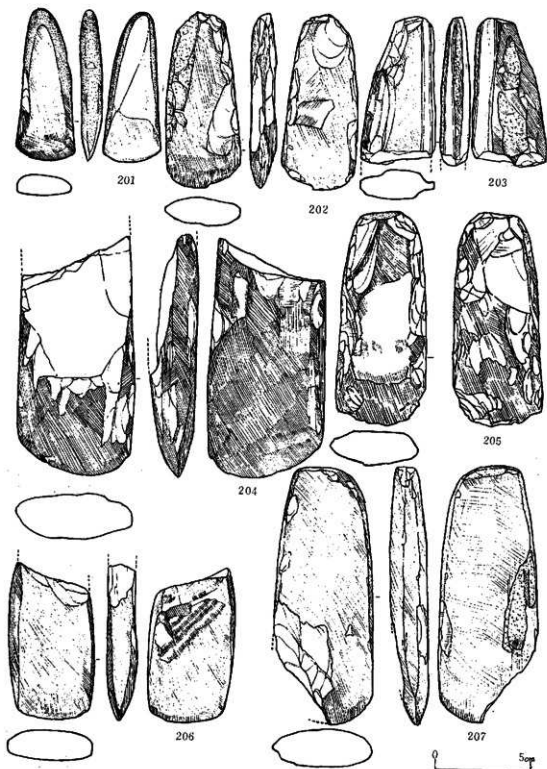
186は、素材を荒割りし、研磨した例である。刃部は、損耗している。b面刃部は面取りがある。
整形痕は右下りが主体である。187も、荒割り後、入念に研磨している。刃部は、大きく剥脱し
ている。整形痕は、右下りが主体である。頭部は、使用によって磨耗している。188は、入念に研
磨されていて、加工方法が不明であるが、所々に荒割りされた跡と繰返しの敲打（上野1973、P77）
の跡がある。刃部は、一部損耗しているが、両刃であったと思われる。整形痕は右下りである。189
は、未成品である。大きく打割された跡がまだ幅広く残っている。整形痕は、右ドリないし長軸方
向である。190は、頭部破片で荒割りし、繰返しの敲打を加えた後、研磨している。整形痕は、右
下りである。191は、板状の薄い石材を素材にそれを研磨した例で、a面は全面、b面は上端と刃
部のみ研磨している。刃部は、面取りされ片刃的である。192は、a、b両面とa面左側面は原石
面で、これを軽く研磨しただけである。a面右側面は、折り取られた面で部厚い板状の素材を折り
取ったものであろう。b面には、一部打割された部分がある。刃部は、損耗している。193は、入
念に研磨されていて素材、加工方法は不明であるが、a面上に繰返しの敲打の跡が残っている。整
形痕は、右下り、左下り、長軸方向である。刃部は、損耗しているが、両刃であったと思われる。
頭部は、使用による繰返しの敲打で光沢を失ない磨耗している。194は、入念に研磨されていて、
加工方法は不明であるが、狭長の小さな例である。刃部は、片刃的で、頭部は一部剥脱している。
整形痕は、右ドりと長軸方向で、刃部には使用痕がある。195は、板状の薄い素材を用いており、
a面は原石面を軽く研磨しただけの面で、図示した側面は少し打割した跡が残っている。b面の刃
部加工は、面取りされており片刃的である。刃部平面観は、大きくconvexして、a面では使用
痕が認められる。整形痕は、右下りが主体である。196も、板状に割がされた素材を用い、a面は
原石面を軽く研磨しただけの面である。刃部は、a面が平坦で、b面は曲面が強く片刃的である。
刃部稜線は少しカーブしている。a面の刃部部分には使用痕がある。整形痕は、右ドりが主体で、
一部左下りの所もある。197は、丸棒状の例で、刃部は欠損している。入念に整形されているが、
石材の因係で加工方法などははっきりしない。この種の例は、本遺跡で唯一のものである。198は、
入念に研磨されて素材、加工方法は不明である。しかし、a面は、原石面を入念に研磨した面であ
る可能性もある。頭部を欠損する。刃部は、両刃である。b面刃部部分には、使用痕がある。整形
痕は、右下り、左下り、横方向である。199は、入念に研磨しているが、b面に荒割りした所が残
っている。刃部は、損耗しているが両刃であったかと思われる。刃部平面観は、非対称形である。整
形痕は種々の方向がある。200は、頭部破片である。荒割り後、研磨している。201は、a、b両
面の上半分は原石面を軽く研磨しただけの面で、刃部だけ入念に研磨している。従って、素材は、
扁平な河原石であったことが判る。刃部は、a面が比較的平坦で、b面は曲面がやや強く、片刃的
である。刃部稜線は直線的である。整形痕は右下りが主体である。202は、板状の素材を荒割りし、



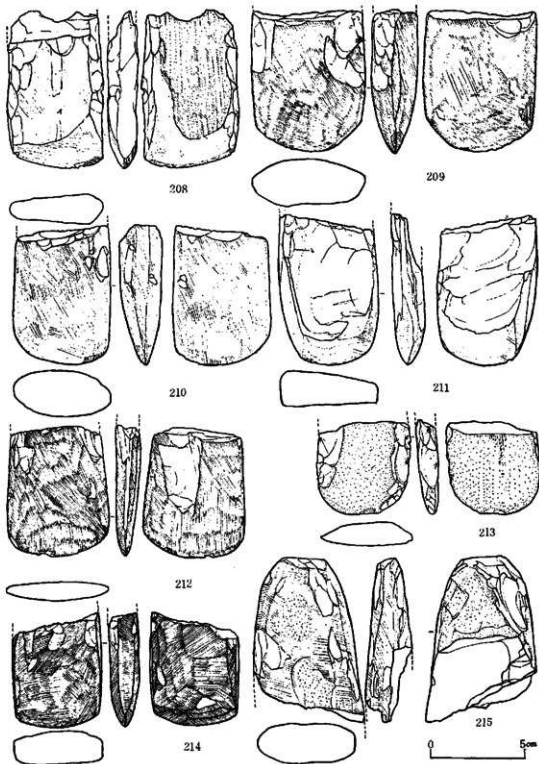
第58图 兔棚区出土石器实测图(8)(石斧)



第59图 黄皮区出土石器实例图(9)(石斧)



第60图 尧墟区出土石器实例图(卽(石斧))



第61图 吴淞区出土石器实测图(四)(石斧)

研磨したもので半磨製である。刃部は一部損耗しているが両刃である。整形痕は、右下りが主体で一部左下りがあり、a面刃部付近には使用痕がある。203は、擦切石斧でa面右側面に擦切の跡が残っている。切断以前に、荒割りし研磨している。刃部は欠損する。204は、厚く幅広の例である。頭部は欠損している。b面は、原石面を軽く研磨した面で、a面は、打割後研磨している。両刃であるが平面観は非対称形である。整形痕は、右下りが主体である。205は、板状の素材を打割し、形を整え研磨している。半磨製。a面は、パテナが発達し、もともとは原石面であったのかもしれない。刃部は著しく損耗しているが、片刃的である。整形痕は、右下りが主体である。206は、頭部を欠損するが、入念に研磨している。素材は、明確ではないが板状のものかと思われる。刃部はb面の方が曲面が強く片刃的である。両面に使用痕がある。整形痕は右下りが主体である。207は、刃部の一部を欠損するが、入念に研磨している。明確ではないが、素材を荒割り後、研磨したものである。刃部は両刃で顕著な使用痕が両面にある。整形痕は、右下りが主体で一部短軸および長軸方向がある。208は、板状の素材の両側面を簡単に打割し、刃部部分を入念に研磨している。頭部は欠損する。刃部は両刃である。整形痕は右下りが主体である。209も、頭部を欠損するが打割後、入念に研磨している。両刃で刃部稜線は、使用による細かい刃こぼれがある。整形痕は、右下りが主体である。210も、頭部を欠損する。入念に研磨しているが、素材は荒割り硬かと思われる。刃部は、両刃で使用痕がある。整形痕は右下りが主体である。211は、板状の素材を用い刃部部分を入念に研磨している。頭部は欠損する。刃部は両刃的であるが、刃部稜線は大きくカーブしている。手斧の用途に用いられたものであろうか。212も、頭部を欠損する。荒割り後、研磨したものである。薄手であるが、両刃で刃部稜線には使用による刃こぼれがある。213は、石斧の未成品の破片かと思われる。両面に原石面を残し、a面両側縁を打割している。両面共、局部的に軽く研磨している。214も、頭部を欠損する。入念な研磨であるが、b面上は、原石面を軽く研磨しただけの面である。両刃である。215も、両面共、原石面を軽く研磨しただけの例で、刃部は欠損している。所々打割して、調整している。

11 石 鏃 (第62図216~223, 図版45B)

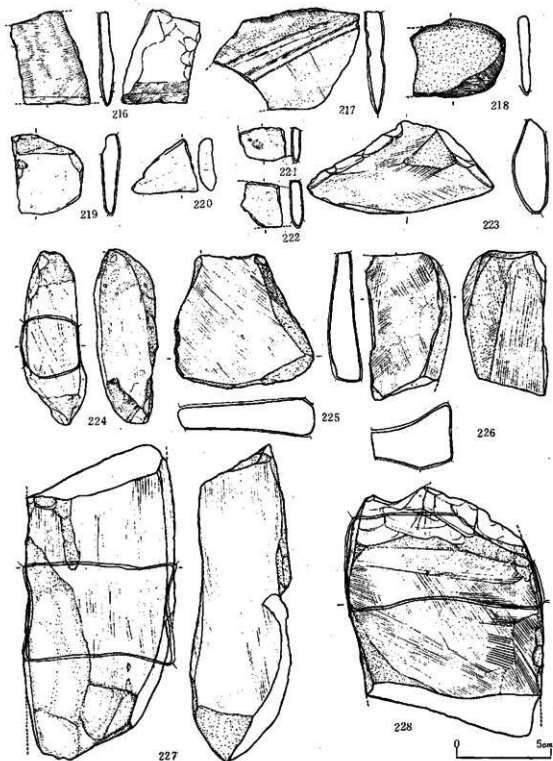
石質は、すべて砂岩である。薄い板状の素材を用い一端がU字状に研磨されている。

216は、破片であるがa面全面と刃部が研磨されている。217は、両面および一端がV字状に研磨されている。図示した面に1本、反対側の面には1本の溝がある。溝の幅は5mm程である。218、219は、刃部はあまり鋭角ではない。220~222は、小破片である。やはり、刃部はさほど鋭角ではない。223は、厚い例である。刃部は丸味を帯びている。

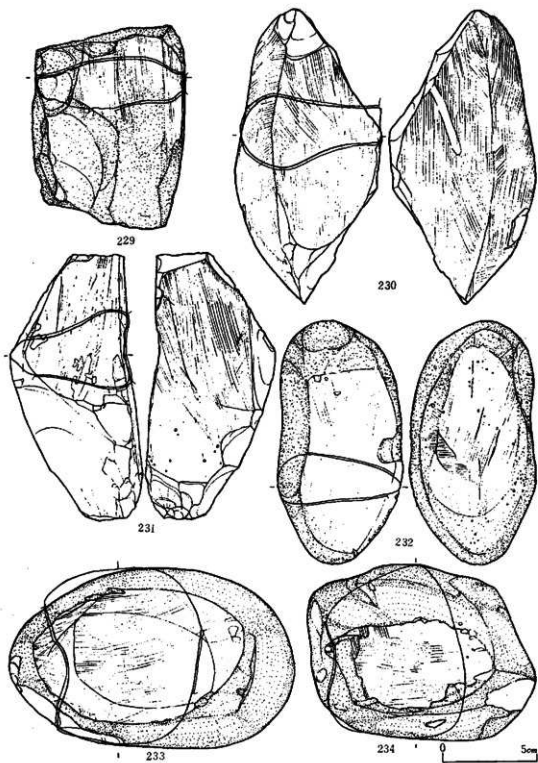
12 砥 石 (第62図224~228, 第63図229~234, 第64図235, 図版45B, 46A)

砥石は、大きく二つに分けられる。224~232例の2~4面を砥石面として利用しているものと233~235例のように円礫の一面のみを利用し、凹んでいるものである。

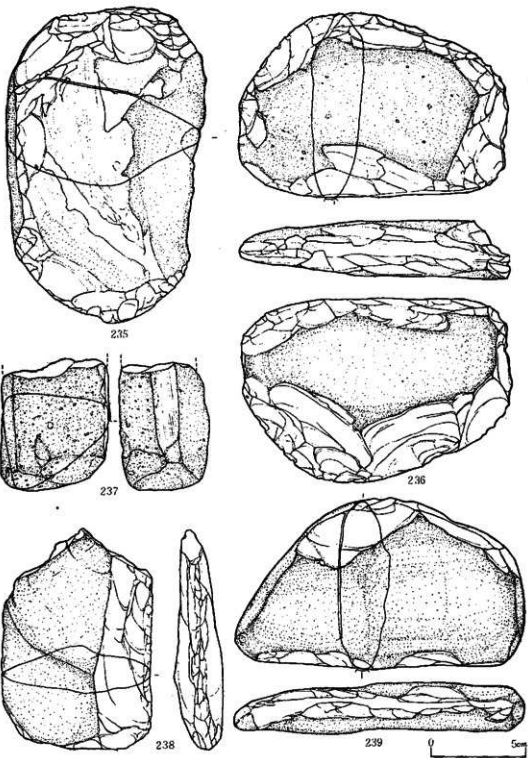
224は、4面を利用した小形の棒状の例である。擦痕は、長軸ないし右下りの方向である。



第62图 尧墟区出土石器实测图(④)(石器·玉石)



第63图 夙猿区出土石器实测图(四)(砾石)



第64图 尧墟区出土石器实测图(4)(砾石·擦石)

砥石面は細かい。225は、板状の例で両面を利用している。図示した面の方が擦痕は細かい。226は、破片である。3面以上利用している。砥石面は、いずれも concave である。227, 228は、4面を利用した長方体の例である。いずれの面も concave している。229は、両面を利用しているが、凹凸が激しく使用してまもない例かもしれない。図示面右は、両面から擦り切った痕がある。230は、2面を主に利用しており、concave している。破片である。231は、破損しているが3面利用している。石質が、硬質頁岩のため砥石面は非常に滑らかである。いずれも concave している。236は、両面を利用している。両面共少し concave している。完形品である。

233は、部厚い円盤の一面を砥石面としており、深く concave している。ただし、反対の面も少し擦った痕がある。234も同様の例であるが、使用面は一面のみである。235は、破損部分が多いが、図示した一面のみ利用している。

石質は、砂岩の例が多いが凝灰質砂岩、凝灰岩の例が若干ある。

13 擦石 (第64図236~239, 第65図240, 図版46B)

擦石には、2種類ある。1つは、236, 238, 239に示した例で、断面長楕円形で扁平な石を用い全周を打調して形態を整えているものと、1つは237, 240に示した例で、断面三角形で、特に調整はなく一稜を擦面としている例である。

236は、a, b両面の全周を打調し長軸の側面を擦面としている。擦面の幅は9mm程で擦痕は長軸方向である。237は、半分程の破片である。擦面の幅は13mm程で擦痕は長軸方向である。238は、一部欠損するが全周打調している。擦面は局部的で明確ではないが、この仲間かと思われる。239は、236と同様の例で擦面の幅は狭く3~10mmで、方向は磨耗が著しく不明である。240は、擦面の幅は13~19mmで広くこの回りを少し打割している。

石質は、安山岩系統が多い。

14 有溝石製品 (第95図241, 図版46B)

石質は、複輝石安山岩で平面観が分銅形で厚く、両側面および下面の三面に沿って溝が走る。上面は溝ではないがへこみがある。a面中央には、窪みを作成している。全面、軽く研磨され、有溝部付近は打調されている。重量は700gである。用途は定かではないが石鏝の可能性もある。

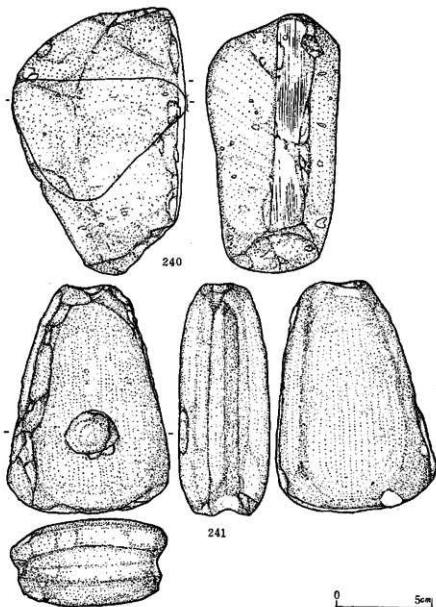
15 敲石 (第66図242~244, 図版47A, B)

敲石は4点出土している。内3点を図示した。いずれも母岩の河原石を用い長軸の一端ないし両端に繰り返しの敲打の痕がある例である。

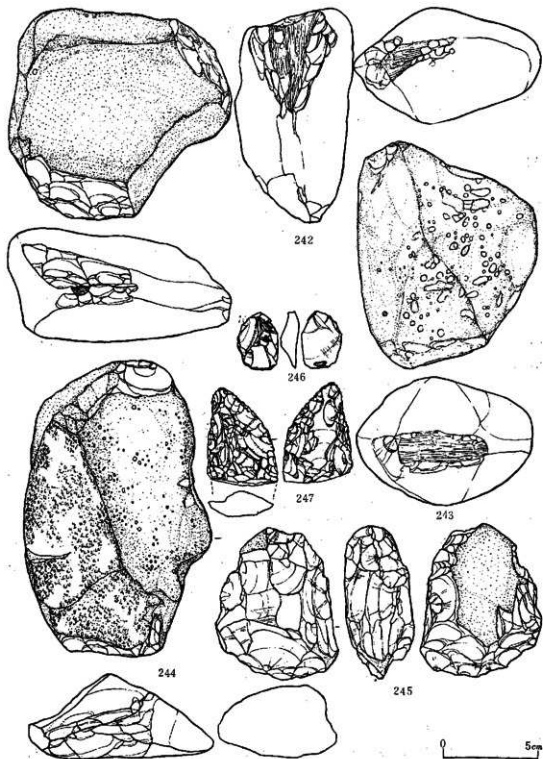
242は、2ヶ所を敲打面としている。243も同様である。244は、図示面下部は顯著であるが、上部はあまり明瞭ではない。重量は、各々900g, 750g, 750gで重く石斧製作に関連した敲打器であったろうか。

16 碟 器 (第66図245, 図版47A)

変朽安山岩製で、半両面加工で大きな剝離がある。b面は、原石面が幅広く残る。用途としては
敲石の可能性もあるが明確ではない。
(上野 秀一)



第65図 発掘区出土石器実測図 四 (敲石・有溝石製品)



第66図 発掘区出土石器実測図 06 (敲石・礮器・その他)

結 語

以上、各項目別に述べてきたが、N309遺跡は、縄文時代中期の遺跡である。

本遺跡出土の土器群は、サイベ沢Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ式の円筒土器上層式の系列を引く一群が主体を占め、それに天神山式、トコロ第6類、伊達山式、仮称手稲砂山式、ノダツブⅠ式土器などが若干数検出されている。時代的には、縄文時代中期初頭から末までである。この内、第Ⅰ群H類とJ類は、第54号ピットおよびその周辺から、7個体の完形ないし半完形土器が出土しており、これらはセットとして捉えることもできる。特徴は、肥厚帯があって、この上に貼付文がある例（H類）とない例（J類）とがあるが、肥厚帯下は、多くの例は地文のみで、特に貼付文などの文様がない例である。肥厚帯上には貼付文があり、またサイベ沢Ⅴ、Ⅵ式などに特徴的に認められる絡縄体疋痕文、然糸疋痕文、組紐疋痕文などが施文されていることを重視すると、巨視的に「サイベ沢Ⅶ式」ないしは、村越編年の「円筒土器上層d式」に相当しようが、胴部に貼付文が全く認められないことから、サイベ沢Ⅶ式ないし見晴町式に近い時期の可能性もある。地文は、第1種結節羽状縄文が多く、1例のみ第1種結節のある複節斜行縄文である。このタイプは、既型式の範疇からはずれないので、ここでは「手稲前田式」とでも仮称しておこう。

石器の組成は、円筒土器上層式のそれである。石皿こそ、量は少ないが、擦石・砥石・石鋸類は、種類も、量も豊富である。石鏃はすべて有茎で、つまみのあるナイフは、縦形で量も多い。これらのセットは、道央部における円筒土器上層式文化の良好な資料となる。

竪穴住居址状遺構は、その内部施設や構造などから、N293遺跡の例と同様に定住的な住居とは断言し難く不明な点が多かった。

ピット群についても、規模や形態に大きなバラつきがみうけられ、確実に「土壌墓」であると断言できるものは皆無で、その構築意図は明らかにしえなかった。しかしながら、各地から報告されたトコロ第6類、第5類土器を伴出する諸遺構と比較するならば、N309、N293遺跡で見出された諸遺構も、とりたてて特異なものとはいえない。なお、最初に調査したN293遺跡の報告で示したピット群の内、幾つかは人為的な遺構とは考え難い例も含まれていたことが、N309遺跡の調査を通じて明らかになった。砂丘遺跡での遺構確認が難かしかったとはいえ、反省と自戒をこめて明記しておかねばならない。しかし、それらのピットの幾つかが人為的な所産ではないとしても、明らかに「風倒木痕」である例（第22、23、39号ピット）を除いては、その成因については、現在の我々の認識を超えるものである。

竪穴住居址状遺構およびピット群は、砂丘の内陸側に沿って分布し、そのうちでも数軒の竪穴住居址状遺構と数十基のピットがほぼ1ヶ所に集中する傾向があり、こうした遺構の群在はN309遺跡では大きくみて2ヶ所に認められる。N293遺跡の遺構の群在と合せ考え、生活の場といった

ものの変遷と捉えられるのかもしれない。時代的には、本遺跡の方が縄文時代中期中葉の時期で、N293 遺跡はトコロ第6類、余市式土器群を中心とした縄文中期後半の時期の所産である。土器型式からいうと、縄文中期初頭より終末までの約1,000年間にわたる長期間、この一帯が古代人に占拠されていたことが判る。しかも、N309 遺跡は、分布調査の結果では、今回発掘調査した範囲に留まるものではなく、さらに東側に延びている。また、N293 遺跡の西側も既に破壊されてしまったが、同時期の遺物がかつて出土したといわれる。従って、これらN293、N309 遺跡の一述の遺跡の拡がり、かなり大規模なものであったと考えられよう。そして、その期間何に生業の基盤をおき、生活していたのかは興味ある所であるが、前回と今回の調査では明らかにすることはできなかった。

初期の予定では、本報告書の中で、紅葉山砂丘上の遺跡群を詳しく検討し、遺跡の時代による立地性の違いとか古代人の移動の問題を明らかにすることを意図していたが果せなかった。また、豊富に得られた円筒土器上層式の資料から、道央部における縄文中期後半の土器群の姿を浮きぼりにする心算であったが、果せず、今後の課題として残されてしまった。石器群に関しても、個々の石器の機能の問題、そしてトコロ第6類および伊達山式土器などの石器群組成上の違いを指摘する予定であったが、全く触れずじまいに終わった。これらは、すべて編集者の責任として機会を改めて論じたいと思う。

遺跡地の自然環境の問題は、N293 遺跡の報告書の中で詳述しているので、それを参照して頂ければ幸甚である。

紅葉山砂丘の西端に立地する縄文時代中期のN293 遺跡、N309 遺跡の2年間にわたる調査は砂丘遺跡の調査の難しさとその性格をある程度明らかにしえたと思っている。今後、紅葉山砂丘上の遺跡群の調査を通じて、紅葉山砂丘人の生活も次第に明らかになってくるものと思われる。

(上野 秀一・高橋 和樹)

第8表 N309遺跡遺構一覧表

ピット番号	区名	平面形	規模 cm		配石	小ピット	長軸方向	ピットのタイプ	時代	土器				炭化物	骨片	図版番号				備考	
			横	縦						土器	石	炭化物	骨片			土器	石	炭化物	骨片		
1	Q-8~Q-9	不整形円形	75	63	23		(NNW-SSE)	I	サイベ	1					31-1						
2	P-9~Q-9	(不整形円形)	(156)	86	30		(WNN-ESE)	I?	天神山	16	1	3			33-1~3	38-1					東側に舌状の突出し
3	P-9~Q-9	不整形円形	170	160	13		NW-SE	I	サイベ	1	1	51	+		31-2	39-4					
4	P-9~Q-9	不整形円形	(85)	71	13		NNW-SSE	I	サイベ	5					33-4~6						
5	R-15	円形	75	71	33			I		6					33-7,8						
6	L-4~M-4	不整形円形	88	78	26		NNW-SSE	I													
7	N-8	不整形円形	124	94	29		NE-SW	I		3					33-10~11						
8	Q-7	不整形円形	181	110	51		NNW-SSE	I		6	1	3				38-2					
9	O-6	不整形円形	167	157	84		(NNE-SSW)	I?	サイベ	24	8	5	+		33-12~16	38-3~10					中央北西寄りの落ち込みは別の?
10	Q-7~R-7	隅丸長方形	149	86	25		NW-SE	I	サイベ	7	1	2			33-17~19	38-11					南南西端や突出す
11	Q-13	不整形円形	96	85	15		NE-SW	I		3		1									
12	O-10	不整形円形	120	90	21		E-W	I			1					38-12					
13	O-8~O-9~P-8~P-9	不整形円形	241	240	23			I	サイベ	5	1	3			33-20~22 31-3						
14	O-10	楕円形	113	(91)	46		NNW-SSE	I		6	1				33-24,25	38-15					
15	O-10	不整形三角形	122	104	22		E-W	I?		1	1					38-16					
16	L-7	不整形円形	186	140	66		E-W														通構ではない可能性強い
17	M-9~N-9	不整形円形	(98)	(70)	56		NE-SW	I			1		+			38-13					
18	M-9~N-9	不整形円形	150	(116)	33		NW-SE	I													
19	M-9~N-9	(不整形円形)	94	77	33		NNW-SSE	I													
20	P-5~P-6	楕円形	127	(70)	21		NE-SW	I			2					38-22,23					短径推定約90cm
21	N-5~N-6~O-5~O-6	隅丸長方形	(213)	188	19		N-S	I	トコヨ6 サイベV, W	6		21			33-26~28						
22	N-5~N-6~O-5~O-6	不整形円形	193	145	24		NE-SW	I	サイベV, W	5		3	56		34-1~5						
23	N-5~N-6~O-5~O-6	(不整形円形)	78	(63)	45			I													推定 78x78cm
24	N-5~N-6~O-5~O-6	不整形円形	142	110	24		N-S	I													内部に2ヶ
25	N-5~N-6~O-5~O-6	(不整形円形)	190	(139)	12		NNE-SSW	I		4	1				33-29,30						
26	N-5~N-6~O-5~O-6	(不整形円形)	(123)	(90)			(NW-SE)	I?	サイベV, W 天神山	16		2			34-1~20,26						
27	O-8~P-8	不整形円形	98	65	17		N-S	I			1					38-14					
28	O-8~P-8	不整形円形	170	120	12		N-S	I													
31	K-13~K-14~L-13~L-14	不整形五角形	319	206	47		NNE-SSW	I		1					35-1						中央が一段低くなる
32	L-4~L-5~M-4~M-5	(不整形円形)	70	(72)	(15)			I													
33	L-4~L-5~M-4~M-5	不整形長楕円形	189	83	44			I													
34	R-15~Q-15~Q-16	不明	不明	不明	22			I													
35	O-11	長楕円形	161	76	24			I													
36	M-11	不整形円形	(120)	83	26			I													
37	P-9	不整形円形	139	104	74		WNW-ESE	I?	天神山	4											
38	N-11~O-11	不整形円形	135	86	17		NW-SE	I	天神山	3											
39	Q-15~R-15	楕円形	196	129	27		NW-SE	I	サイベ	5											
40	O-17	不整形円形	78	69	39			I	サイベ	4											
41	K-5	不整形円形	100	85	22		(N-S)	I													
42	K-5	不整形円形	56	53	19			I													
43	N-10	不整形円形	98	90	29			I		3											
44	O-13~O-14	不整形円形	127	102	43			I	サイベ	17											
45	P-6	不整形円形	81	70	(39)			I													
46	P-8~Q-8	不整形円形	237	(130)	22		NE-SW	I													
47	L-15~L-16	不整形円形	168	(130)	36		(NNW-SSE)	I													
48	L-15~L-16	不整形円形	118	88	36		E-W	I													
49	R-13~R-14	不整形円形	119	86	28		WNW-ESE	I	サイベV, W	18		1	3								
50	R-13~R-14	不整形円形	(117)	52	17		E-W	I													
51	R-13~S-13	不整形円形	(158)	(159)	(44)		(NW-SE)	I?	サイベV, W			8									
52	R-13~S-13	(不整形円形)	112	105	47		NNW-SSE	I	サイベV, W			3	12								
53	R-13~S-13	不明	120	(50)	(24)			I													
54	O-16~P-16	不整形長方形	316	165	(57)			I	サイベ	5		6									
DW1	M-4~M-9~N-9~O-4~O-9	不整形五角形	490	348	26		N-S	I	サイベV, W トコヨ6	67		15	63								
DW2	O-7~O-8~P-7	不整形五角形	506	(364)	34		NNW-SSE	I	サイベV, W トコヨ6	3		1	1	+							
DW3	O-15~O-16	不整形五角形	425	335	57		ENE-WSW	I	サイベV, W トコヨ6	20		8	40	+							
DW4	M-15~N-15	不整形五角形	457	280	43		NW-SE	I	サイベV, W トコヨ6, 伊達山	16		3	17	156	+						
DW5	L-16~L-17~M-16~M-17	不整形五角形	390	350	58		WNW-ESE	I	サイベ	10											
DW6	P-10~P-11~Q-10~Q-11	不整形六角形	416	370	16		(E-W)	I	天神山	1		1	4	+							

(註) なお、グリッド番号中の数字は、すべて10がつく(例Q-8→Q-18)。

(註) DWとは、堅穴住居址遺構を示している。

第9表 N 309 遺跡遺構出土石器一覽表

図版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質	備 考
14-1	DW1	石 斧	80	45	17	110	Bl-Sch.	
2	"	敲 石	95	49	29	190	An.	
3	"	石 鏃	48	30	8	14.5	Sa.	S-1
4	"	砥 石	39	33	(15)	21.3	Sa.	
5	"	石 鏃?	(38)	17	4	1.9	Obs.	S-2 (破片)
6	"	"	(36)	25	12	10.3	Che.	S-3 (")
7	"	石 匙	38	16	7	4.1	Che.	縦形
8	"	"	58	22	9	11.9	Obs.	S-4 縦形
9	"	削 器	67	12	8	5.9	Obs.	S-5
10	"	"	56	13	6	5	Obs.	S-6
11	"	"	43	17	5	3.9	Obs.	
12	"	"	35	(15)	6	2.7	Obs.	S-7
13	"	"	32	19	6	3.3	Obs.	S-8
14	"	石 鏃	18	8	2	0.2	Obs.	有茎
15	"	搔 器	30	40	20	20.8	Obs.	S-9
16	DW3	石 斧	41	26	10	13.7	Gre. Sch.	
17	"	石 匙	57	30	8	9.8	She.	S-1 縦形
18	"	"	79	17	8	12.6	She.	S-2 "
19	"	削 器	49	26	6	7.5	Obs.	
20	"	"	64	23	13	12.2	Obs.	
21	"	石 鏃	34	15	5	1.9	She.	S-3 有茎
22	DW2	石 銛	(37)	(25)	8	7.1	Obs.	S-1 (破片)
23	DW6	削 器	(32)	17	3	1.9	Obs.	S-1
15-1	DW4	石 鏃	57	22	6	6.1	Obs.	S-1 有茎
2	"	石 鏃	49	24	4	3.3	Obs.	S-2 "
3	"	"	38	17	4	1.8	Obs.	S-3 "
4	"	"	(28)	17	4	1.7	Obs.	南区 "
5	"	"	36	22	6	3.6	Obs.	S-4 "
6	"	"	(13)	7	3	0.3	Obs.	S-5 破片
7	"	削 器	(37)	22	8	5.8	Obs.	両面体石器の破片
8	"	"	(35)	23	8	7.0	She.	"
9	"	"	(21)	18	4	1.5	She.	"
10	"	"	(22)	23	3	1.4	Obs.	"
11	"	"	(55)	29	16	33.4	Ag.	
12	"	"	(58)	32	5	10.2	She.	S-6
13	"	"	(36)	22	4	4.1	Obs.	S-7
14	"	"	(24)	33	5	3.6	Obs.	S-8
15	"	"	(25)	19	3	1.9	Obs.	
16	"	"	(32)	12	3	1.4	Obs.	S-9
17	"	砥 石	118	51	21	110	Mu.	南区
38-1	Pit 2	削 器	41	13	4	2	She.	S-1
2	Pit 8	石 鏃	(17)	(12)	4	0.8	Obs.	S-1 有茎

図版番号	出土地区	名 称	全 长	最大幅	最大厚	重 量	石 質	備 考
38— 3	Pit 9	両面体石器	25	21	7	3.6	Obs.	S-1
4	"	削 器	(16)	27	3	1.6	She.	S-2 破片
5	"	両面体石器	(10)	15	7	0.9	She.	S-3 石 槍?
6	"	片面体石器	22	17	13	2.0	Obs.	S-4
7	"	"	12	11	10	0.9	Obs.	S-4
8	"	両面体石器	(12)	22	8	2.7	She.	S-5 石 槍?
9	"	石 鏃	(22)	13	4	1.2	Obs.	破片
10	"	石 匙	(56)	19	10	10.2	She.	S-6 縱形
11	Pit10	石 鏃	116	70	25	200	Sa.	S-1
12	Pit12	削 器	(22)	(16)	3	1.1	Obs.	S-1
13	Pit17	石 鏃	(29)	14	5	1.7	Obs.	S-1 有 茎
14	Pit27	半面体石器	(20)	16	5	1.4	Obs.	S-1 石 鏃?
15	Pit14	縦長削片	(38)	26	9	8.0	Obs.	S-1
16	Pit15	削 器	(39)	16	4	2.0	Obs.	S-1
17	Pit21	扁平石核	42	29	15	15.7	Obs.	S-1
18	Pit22	削 器	(41)	30	9	11.3	Obs.	S-1
19	Pit26	握 器?	(23)	(9)	3	0.6	Obs.	S-1 刃部破片
20	Pit22	削 器	44	25	8	8.2	Obs.	S-2
21	Pit25	石 鏃	32	16	4	1.5	Obs.	S-1 有 茎
22	Pit20	砥 石	72	58	11	70	Sa.	S-1
23	"	礫 器	119	85	17	210	Da.	S-2
39— 1	Pit34	石 匙	51	37	9	8.6	Obs.	S-1 縱形
2	"	削 器	57	16	5	1.7	Tu.	S-2
3	Pit35	両面体石器	(25)	36	10	10.5	Obs.	S-1 破片
4	Pit 3	石 斧	(34)	20	5	6.2	Gre.-Sch.	S-1 破片
5	Pit46	砥 石	67	51	(21)	64.3	Sa.	S-1
6	Pit37	石 鏃?	26	20	10	4.3	Obs.	S-1 破片
7	Pit49	削 器	(33)	19	3	2.1	Obs.	S-1
8	Pit52	礫 器	165	83	25	540	Py.-An.	S-1
9	Pit51	半面体石器	49	22	10	12.4	She.	S-1石斧の未成品
10	Pit52	両面体石器	31	43	13	12.9	Obs.	S-2
11	Pit51	石 鏃	15	12	3	0.8	Obs.	S-2 有 茎
12	"	両面体石器	(17)	18	4	1.0	Obs.	S-3
13	"	石 鏃	(36)	15	5	2.0	Obs.	S-4 有 茎
14	"	"	(20)	17	4	1.5	Obs.	S-5 "
15	"	削 器	(11)	15	3	0.7	Obs.	S-6
16	Pit54	石 鏃?	43	20	7	4.4	Obs.	S-1
17	"	"	(17)	16	4	0.9	Obs.	S-2 破片
18	"	握 器	(49)	26	5	8.7	Obs.	S-3 縱形
19	"	削 器	50	28	11	13.8	Obs.	
20	"	"	(29)	14	5	1.3	Obs.	S-4
21	"	石 鏃	25	14	3	0.9	Obs.	S-5 有 茎
22	"	両面体石器	25	16	6	2.2	Obs.	S-6 石 鏃?

第10表 N 309 遺跡発掘区出土石器一覧表

図版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質
51- 1	P-13	石 鏃	44	18	4	2.4	Obs.
2	M-16	"	(34)	18	4	1.9	Obs.
3	表 採	"	(33)	17	5	2.6	Mu.
4	Q-14	"	(40)	17	4	2.0	Obs.
5	L-15	"	(34)	(19)	4	2.4	Obs.
6	P-16	"	(33)	17	5	2.5	Obs.
7	表 採	"	(34)	16	3	1.7	Obs.
8	L- 8	"	33	16	5	1.8	Obs.
9	O-12	"	32	16	5	2.5	Obs.
10	表 採	"	38	13	4	1.5	Obs.
11	R-13	"	(32)	15	4	1.7	Obs.
12	P-14	"	(27)	17	4	1.4	Obs.
13	N-16	"	(37)	14	5	2.1	Obs.
14	表 採	"	35	(14)	4	1.8	Obs.
15	表 採	"	(38)	12	3	1.6	Obs.
16	P-16	"	(32)	13	3	1.0	Obs.
17	表 採	"	33	13	4	1.2	Obs.
18	R-14	"	29	14	4	1.1	Obs.
19	表 採	"	(29)	13	2	0.8	Obs.
20	表 採	"	26	13	3	0.7	Obs.
21	表 採	"	(24)	13	3	0.8	Obs.
22	Q-16	"	30	(14)	3	1.1	Obs.
23	表 採	"	(26)	(12)	4	1.0	Obs.
24	M-14	"	26	10	3	0.6	Obs.
25	表 採	"	(26)	10	5	1.2	Obs.
26	N-11	"	(20)	11	4	0.7	Obs.
27	表 採	"	(25)	14	5	1.7	Obs.
28	F- 8	"	(27)	16	4	1.8	Obs.
29	表 採	"	(22)	12	4	1.0	Obs.
30	表 採	"	(29)	19	4	1.9	Obs.
31	表 採	"	28	22	3	1.3	Obs.
32	Q-13	"	25	16	3	1.2	Obs.
33	R-17	"	(20)	17	3	0.9	Obs.
34	P- 8	"	(18)	17	4	1.0	Obs.
35	N- 8	"	(25)	18	3	1.6	Obs.
36	N- 7	"	(21)	18	3	1.0	Obs.
37	表 採	"	(28)	13	4	1.1	Obs.
38	R-16	"	14	17	2	0.5	Obs.
39	表 採	"	37	17	5	2.4	Obs.
40	表 採	"	28	13	5	1.6	Obs.
41	表 採	"	(30)	12	6	2.3	Obs.
42	N- 9	"	33	14	5	2.7	Obs.

圖版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質
51-43	Q-17	石 鐵	(30)	15	4	1.8	Obs.
44	表 採	"	(34)	16	5	1.8	Obs.
45	表 採	"	(22)	13	4	1.1	Obs.
46	P-16	"	(18)	9	4	0.7	Obs.
47	表 採	"	(18)	14	4	0.7	Obs.
48	P-16	"	(13)	11	2	0.3	Obs.
49	表 採	"	(13)	10	3	0.3	Obs.
50	Q-13	片 面 体 石 器	(30)	(15)	(9)	3.5	Obs.
51	N-8	石 錐	43	15	6	3.4	Obs.
52	O-8	"	41	18	8	5.5	She.
53	Q-16	"	51	18	9	8.1	Che.
54	表 採	"	(26)	8	4	0.9	Obs.
55	R-16	"	52	13	4	3.0	She.
56	R-15	"	72	22	19	223	Obs.
52-57	G-15	石 錐	72	38	16	31.1	Obs.
58	N-10	"	75	31	8	13.7	Obs.
59	表 採	"	68	27	9	12.6	Obs.
60	N-8	"	63	27	9	12.1	Obs.
61	N-17	"	56	23	7	8.8	Obs.
62	表 採	"	55	28	8	9.7	Obs.
63	表 採	"	46	20	6	6.1	Obs.
64	表 採	"	(32)	22	7	7.3	Obs.
65	表 採	"	(30)	22	7	4.1	Obs.
66	表 採	"	(25)	19	7	3.1	Obs.
67	O-15	"	(23)	19	4	1.7	Obs.
68	P-14	"	(26)	24	7	4.0	Obs.
69	R-14	"	(19)	18	5	1.8	Obs.
70	P-16	"	(21)	18	5	2.4	Obs.
71	N-7	縱 形 石 匙	100	35	12	37.0	She.
72	表 採	"	77	31	9	21.8	She.
73	M-8	"	110	25	7	21.1	She.
74	表 採	"	69	20	8	13.0	She.
75	P-16	"	(18)	15	2	0.7	She.
76	表 採	"	59	22	7	10.7	She.
77	S-17	"	68	(22)	7	15.0	She.
78	O-7	"	62	25	7	9.5	She.
79	表 採	"	45	17	5	4.3	Che.
80	P-14	"	47	15	9	8.0	Che.
53-81	表 採	"	46	36	8	12.5	Obs.
82	表 採	"	(45)	21	8	9.7	Obs.
83	Q-14	"	(36)	20	10	6.3	Aga.
84	表 採	"	(30)	22	7	3.6	She.

図版番号	山土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質
53- 85	Q-12	旋形石匙	40	22	6	5.7	Obs.
86	L- 9	削器(ナイフ)	(69)	35	10	26.4	Obs.
87	M-16	"	(87)	25	9	20.0	She.
88	N-12	"	79	20	8	12.7	Tu.
89	表採	"	71	29	7	17.6	She
90	O- 8	"	71	31	7	16.6	She.
91	O-15	"	(49)	35	8	16.1	Che.
92	N- 8	"	50	29	8	10.2	She.
93	表採	"	(42)	23	3	2.7	Obs.
94	O- 8	掻 器	50	30	12	18.5	Obs.
95	表採	"	47	30	10	15.4	Ods.
96	O-10	"	49	34	16	20.8	Ods.
97	P- 8	"	(59)	28	12	24.2	Rhy.
98	表採	"	57	27	8	10.7	Obs.
99	O-15 O-16	"	47	23	8	8.2	Obs.
100	R-16	"	36	26	7	9.0	Obs.
101	R-13	"	31	27	5	4.1	Obs.
54-102	R-16	"	27	33	6	6.1	Obs.
103	O-13	"	27	29	6	5.0	Obs.
104	O-15? P-16?	"	26	26	8	5.8	Obs.
105	O-15	"	26	27	6	4.2	Obs.
106	P-15	"	28	25	8	5.4	Obs.
107	表採	"	(24)	37	11	9.5	Obs.
108	O-13	"	37	(32)	4	4.3	Obs.
109	O-10	"	24	(35)	6	5.5	Obs.
110	Q-15	"	37	16	7	3.7	Obs.
111	P-16	"	43	32	16	25.2	Obs.
112	表採	削 器	(50)	20	9	11.4	She.
113	表採	"	(41)	17	10	7.7	She.
114	O-14	"	(40)	20	7	6.1	Obs.
115	表採	"	56	35	8	16.5	Mu.
116	R-15	"	57	35	9	18.9	Obs.
117	O- 8	"	53	27	5	7.5	She.
118	P- 9	"	50	22	4	4.0	Aga.
119	N- 8	"	72	37	14	28.6	She.
120	Q-16	"	58	35	10	18.2	She.
121	S-16	"	70	27	8	17.1	Obs.
122	Q-15	"	48	19	5	6.0	Obs.
123	P-15	"	31	25	7	5.0	Obs.
124	表採	"	39	24	6	5.7	Obs.
125	表採	"	34	26	5	3.9	Obs.
126	表採	"	40	22	7	6.1	Obs.

圖版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質
54-127	P-16	削 器	53	30	4	5.8	She.
55-128	P-16	"	43	22	7	6.1	Obs.
129	N-15	"	40	19	5	3.5	Obs.
130	N-9	"	34	16	7	4.2	Obs.
131	M-12	"	(30)	20	6	4.1	Obs.
132	表 採	"	(29)	18	4	2.1	Obs.
133	?-14	"	(33)	17	4	2.1	Obs.
134	O-8	"	(38)	47	11	22.7	Mu.
135	N-12	"	30	(32)	5	5.9	Che.
136	P-16	"	(35)	(37)	4	5.1	She.
137	N-12	"	(46)	42	5	9.0	She.
138	M-16	"	(45)	34	9	13.5	Obs.
139	Q-15	"	(47)	40	16	24.1	Che.
140	R-13	"	(51)	35	13	22.5	Che.
141	P-14	"	40	29	12	12.7	Obs.
142	表 採	"	53	45	7	14.5	Obs.
143	N-10	"	54	72	14	47.8	She.
144	Q-14	"	46	58	11	22.0	Obs.
145	N-17	"	(30)	40	7	10.0	Obs.
146	Q-15	"	25	36	7	9.0	Obs.
147	表 採	"	30	41	8	6.0	Obs.
148	L-16	"	(13)	38	5	2.4	Obs.
149	Q-15	"	(27)	58	4	7.1	Tu.
150	Q-16	"	(23)	28	5	4.1	Obs.
56-151	表 採	両面体石器	(71)	49	15	64.3	Bs.
152	表 採	"	64	35	13	25.0	Obs.
153	O-8	"	69	33	13	24.4	Obs.
154	N-12	"	52	25	10	10.2	Obs.
155	表 採	"	(40)	(21)	6	4.7	Obs.
156	N-14	"	(35)	37	10	10.3	Obs.
157	表 採	"	(32)	38	10	10.0	Obs.
158	Q-13	"	35	(22)	10	7.1	Obs.
159	M-16	"	25	(19)	6	3.9	Obs.
160	P-8	"	30	(22)	8	4.5	Obs.
161	N-12	"	30	35	9	9.4	Obs.
162	Q-14	削 器	(37)	22	10	7.1	Che.
163	Q-9	"	(36)	54	12	26.3	Che.
164	S-15	"	37	36	10	22.4	Obs.
165	Q-17	"	(26)	29	3	2.4	Obs.
166	表 採	"	(30)	19	6	3.2	Ag.
167	?-15	扁平石核	33	44	16	21.2	Obs.
168	R-14	"	20	33	12	5.8	Obs.

圖版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質
56-169	Q-12	扁平石核	19	29	15	4.7	Obs.
170	M-7	"	24	21	20	13.6	Obs.
171	P-15	"	22	37	13	8.7	Obs.
172	R-16	"	46	27	15	17.2	Obs.
173	Q-14	"	37	28	15	15.2	Obs.
57-174	S-14	縦長剝片	47	24	4	4.2	Obs.
175	P-15	"	43	14	9	5.8	Obs.
176	表採	"	38	16	5	2.8	Obs.
177	Q-14	"	35	16	3	1.8	Obs.
178	R-14	"	48	28	10	11.2	Obs.
179	S-17	"	55	24	5	8.2	She.
180	Q-12	"	42	27	10	14.3	Che.
181	P-15	"	51	31	12	22.6	Aga.
182	N-7	矩形剝片	47	32	8	11.2	Obs.
183	P-16	"	(32)	28	6	5.4	Obs.
184	O-12	横長剝片	32	50	8	10.5	Obs.
185	表採	矩形剝片	40	41	7	10.8	Obs.
58-186	Q-14	石 斧	164	48	20	260	Bl.-Sch.
187	P-16	"	120	54	33	240	Hor.
188	P-14	"	104	45	22	190	Sch.
189	P-15	"	111	44	30	170	She.
190	R-14	"	(43)	41	22	50	Gre.-Sch.
191	P-15	"	85	38	4	34	Bl.-Sch.
59-192	O-8	"	130	38	25	200	Gre.-Sch.
193	N-7	"	113	39	26	200	Gre.-Sch.
194	表採	"	63	15	9	12	Gre.-Sch.
195	表採	"	127	37	14	90	Bl.-Sch.
196	R-15	"	113	45	15	95	Bl.-Sch.
197	表採	"	117	43	34	250	Sch.
198	N-8	"	(60)	38	16	60	Gre.-Sch.
199	表採	"	96	45	23	140	Gre.-Sch.
200	R-14	"	37	41	19	42	Gre.-Sch.
60-201	M-19	"	80	31	11	39	Gre.-Sch.
202	K-13	"	92	39	13	80	Bl.-Sch.
203	Q-17	"	75	39	15	55	Gre.-Sch.
204	N-15	"	122	60	24	280	Bl.-Sch.
205	表採	"	111	52	16	110	Bl.-Sch.
206	O-9	"	79	45	16	100	Bl.-Sch.
207	Q-16	"	136	(51)	20	240	Bl.-Sch.
61-208	O-15	"	(82)	48	16	110	Gre.-Sch.
209	R-15	"	(73)	59	24	160	Sa.
210	P-15	"	(71)	50	22	155	Bl.-Sch.

図版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質
61-211	R-13	石 斧	(76)	51	15	105	Bl.-Sch.
212	P-9	"	(68)	53	13	70	Gre.-Sch.
213	R-11	?	(48)	48	10	45	Gre.-Sch.
214	O-16	石 斧	(55)	47	16	80	Gre.-Sch.
215	R-12	"	(78)	54	23	150	Bl.-Sch.
62-216	Q-16	石 鏃	49	(33)	6	13.2	Sa.
217	P-7	"	51	(72)	7	33.5	Sa.
218	S-14	"	40	(50)	6	15	Sa.
219	P-15	"	42	(35)	9	14.1	Sa.
220	Q-16	"	27	35	8	7.9	Sa.
221	P-13	"	(17)	(24)	4	2.5	Sa.
222	Q-15	"	23	(21)	5	3.5	Sa.
223	Q-16	"	48	98	17	60	Sa.
224	N-15	礫 石	92	30	31	110	Tu.-Sa.
225	Q-8	"	67	72	18	105	Sa.
226	R-16	"	(77)	(43)	26	100	Sa.
227	表 採	"	(146)	78	53	850	Sa.
228	表 採	"	(118)	102	53	750	Sa.
63-229	P-13	"	78	(106)	29	250	Sa.
230	表 採	"	156	75	39	400	Sa.
231	表 採	"	140	61	39	350	Sa.
232	N-12	"	129	65	35	290	Tu.-Sa.
233	N-14	"	150	95	73	1,350	Tu.-Sa
234	P-9	"	119	92	72	850	Tu.
64-235	Q-14	"	165	104	58	1,150	Tu.
236	表 採	礫 石	97	140	31	610	Py-An.
237	R-14	"	62	57	47	250	Py-An.
238	O-9	"	117	78	26	230	Da.
239	表 採	"	91	151	25	500	Ho.-An.
65-240	O-11	"	139	91	70	1,000	Py.-An.
241	J-10	有 溝 石 器	121	85	48	700	Py.-An.
66-242	表 採	礫 石	110	116	60	900	Che.
243	表 採	"	120	94	67	750	Che.
244	表 採	"	156	98	46	750	Che.
245	R-15	礫 器	77	62	36	200	Propy.
246	M-17	瓶 器	30	21	9	4.2	Obs.
247	P-8	両 面 体 石 器	51	37	13	26	Obs.

(石質略号) Aga.(Agate): ノノウ、An.(Andesite): 安山岩、Ba.(Basalt): 玄武岩、Bl.-Sch.(Black Schist): 黒色片岩、Che.(Chert): 燧岩、Da.(Dacite): 石英安山岩、Gre.-Sch.(Green Schist): 緑色片岩、Ho.-An.(Hornblende Andesite): 角閃石安山岩、Mu.(Mud Stone): 泥岩、Obs.(Obsidian): 黒曜石、Propy.(Propyrite): 雲母安山岩、Py.-An.(Two Pyroxene Andesite): 複輝石安山岩、Rhy.(Rhyolite): 流紋岩、Sa.(Sand Stone): 砂岩、She.(Hard Shell): 硬質頁岩、Tu.(Tuff): 凝灰岩、Tu.-Sa.(Tuffaceous Sandstone): 凝灰質砂岩。

□引用・参考文献

- 五十嵐八枝子・熊野 純男 1973 「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」『第四紀研究』13—2所収
- 石井 次郎 1955 「厚良村字岡文の堅穴様の食料貯蔵庫について」『先史時代』2（先史学同好会）所収
- 石川 徹 1967 「札幌郡手稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3所収
- 岩井 住男・佐原 和久・船崎 弘文・藤原 和男 1970 『膳禮』（『鳳鳴』7）（単）
- 上杉 陽・遠藤 邦彦 1973 「石狩沿岸平野の地形と土壌について」『第四紀研究』12—3所収
- 上野 秀一編 1974 『N293遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅴ
- 江坂 輝弥編 1970 『石神遺跡』（単）
- 大塚 和義 1964 「北海道の基址」『物質文化』3所収
- 大場 利夫・奥田 寛 1960 『女満別遺跡』（単）
- 大場 利夫 1969 「縄文中期文化—北海道—」『新版考古学講座』3所収
- 大場 利夫・石川 徹 1966 『恵庭遺跡』（単）
- 加藤 邦雄・上野 秀一・羽賀 憲二 1973 『白石神社遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅲ
- 北川 秀男・赤松 守雄・平川 善祥・熊野 純男・五十嵐八枝子 1973 「石狩低地帯の後水期の変遷」『日本第四紀学会講演要旨集』2所収
- 児玉作左衛門・大場 利夫・武内 収太 1958 『サイベ沢遺跡』（単）
- 駒井 和愛編 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上）』（単）
- 斎藤 武一 1968 「北海道旭川市豊岡遺跡」『日本考古学年報』16所収
- 佐藤 一夫 1971 「苫小牧市美沢植村遺跡調査報告」『郷土の研究』3所収
- 沢 四郎 1968 『釧路市東釧路遺跡第Ⅱ地点発掘調査概報（昭和42年度）』（単）
- 沢 四郎 1974 「縄文時代の釧路」『新釧路市史』1所収
- 沢 四郎・西 幸隆編 1974 『釧路市貝塚町1丁目遺跡調査報告—第4次調査—』（単）
- 沙流川流域史調査団 1962 「北海道沙流川流域史調査概報（第1次）」『史観』63, 64所収
- 重松 和男 1971 「北海道の古墳墓について（1）研究史」『北方文化研究』5所収
- 重松 和男 1972 「北海道の古墳墓について（2）現在までの資料と今後の問題点」『北方文化研究』6所収
- 高橋 正勝 1966 「函館市見晴市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会会誌』8所収
- 高橋 正勝 1972 a・b 「北海道における縄文時代中期の終末(1), (2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』9, 10所収
- 高橋 正勝 1974 「日ノ浜型住居址」『北海道考古学』10所収
- 千代 肇編 1974 『西枯椀』（単）
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』（単）
- 道北先史文化調査団 1969 『当湧遺跡—第一報—』（単）
- 苫小牧市教育委員会 1963 『苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査報告書』（単）
- 苫小牧市教育委員会ほか 1965 『第四次苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査概要』（単）
- 名取 武光・峰山 敏 1957 「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』12所収
- 羽賀 憲二編 1974 『T310遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅳ
- 松下 亘編 1974 『西股』（単）
- 長野 正彦・佐藤 忠雄・兼重 達男 1970 「礼文島沖崎ウヰンナイボ遺跡調査概要」『考古学雑誌』56—2所収
- 溝口 潤 1965 「空室における先史遺跡の調査について」『北海道私学教育研究協会研究紀要』7所収
- 峰山 敏・高橋 穂一・倉谷 泰賢 1973 『中の沢B遺跡』（単）

- 三橋 公平 1968 『北海道虹田町入江貝塚第2次発掘報告』『北海道人類学協会通信』11所収
- 村越 潔 1974 『旧石器文化』雄山閣考古学選書10
- 森田 知忠 1973 『精進川遺跡』『北海道南茅部町の先史』所収
- 森田 知忠・高橋 正勝 1973 『サイベ沢B遺跡調査報告』(単)
- 山崎 博信 1966 『当沸遺跡—第一報—』(単)
- 山崎 博信・長谷川 功 1968 『智東遺跡B地点 本文篇I』(単)
- 山崎 博信 1968 『富岡遺跡』(単)
- 山田 悟郎 1974 『N293遺跡の花粉分析』『N293遺跡』札幌市文化財調査報告Ⅷ所収
- 山田 悟郎 1974 『石狩町紅葉山遺跡の花粉分析』『紅葉山43号遺跡』所収
- 古崎 昌一 1965 『縄文文化の発展と地域性—北海道—』『日本の考古学』Ⅰ所収



A 遺跡遠景 (雨より)



B 遺跡近景



A 第1号竪穴住居址状遺構（西より）



B 第2号竪穴住居址状遺構（南より）



A 第3号壑穴住居址状遺構（北より）



B 第3、4号壑穴住居址状遺構および第54号ピット（北東より）



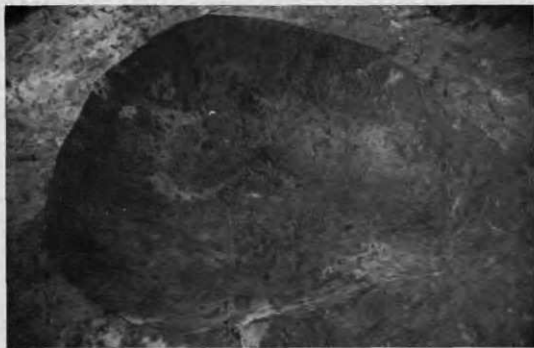
A 第4号竪穴住居址状遺構（北東より）



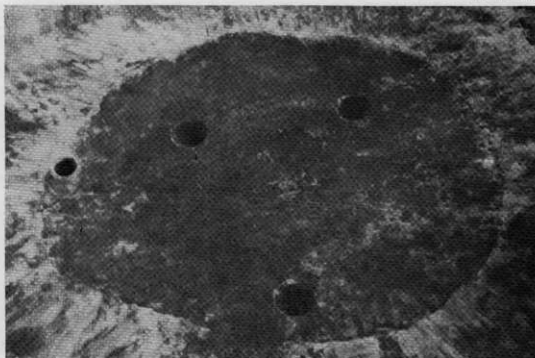
B 第4号竪穴住居址状遺構土器出土状態(1)（北西より）



A 第4号竪穴住居址状遺構土器出土状態(2) (北西より)



B 第5号竪穴住居址状遺構 (南より)



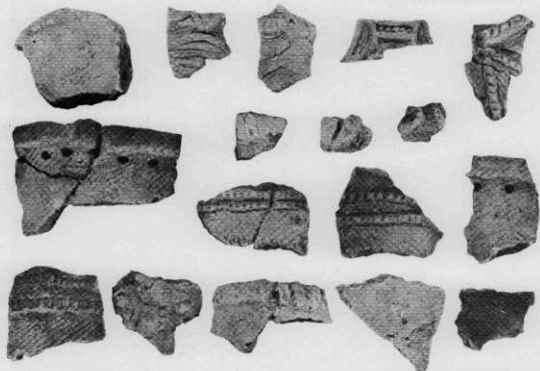
A 第6号竪穴住居址状遺構（北西より）



B 竪穴住居址状遺構出土土器(1)



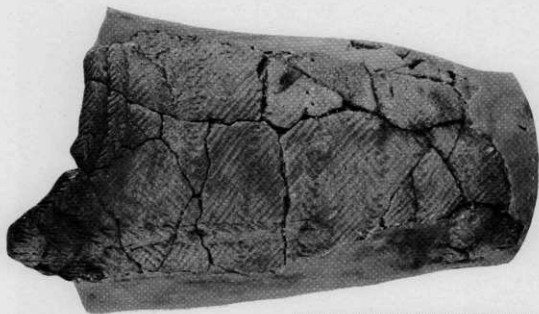
A 豎穴住居址狀遺構出土土器(2)



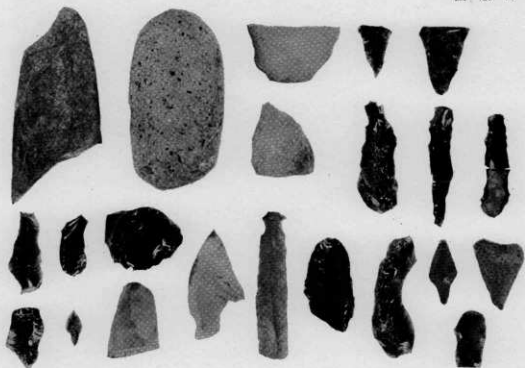
B 豎穴住居址狀遺構出土土器(3)



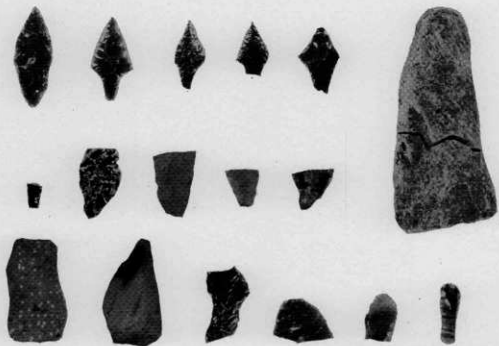
第4号竖穴住居址状遺構出土土器(4)



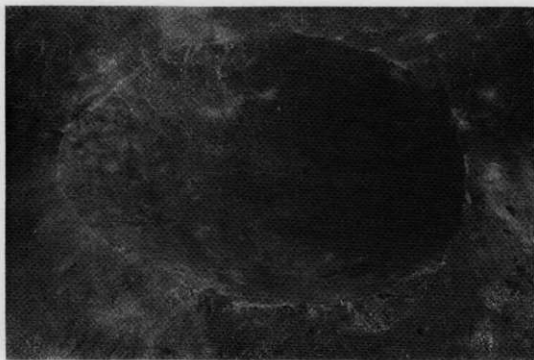
第4号および第6号壑穴住居址状遺構出土土器(5)



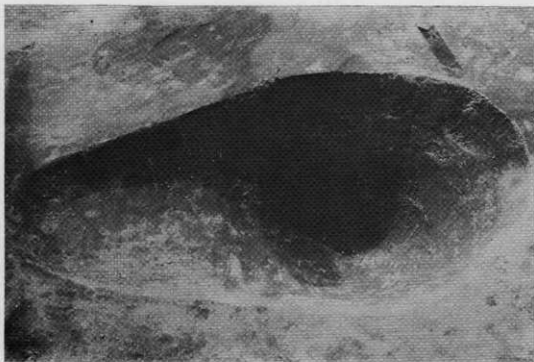
A 豎穴住居址狀遺構出土石器(1)



B 第4号豎穴住居址狀遺構出土石器(2)



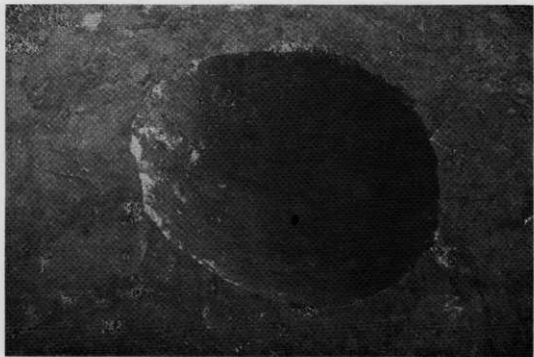
A 第1号ピット (北より)



B 第2号ピット (北より)



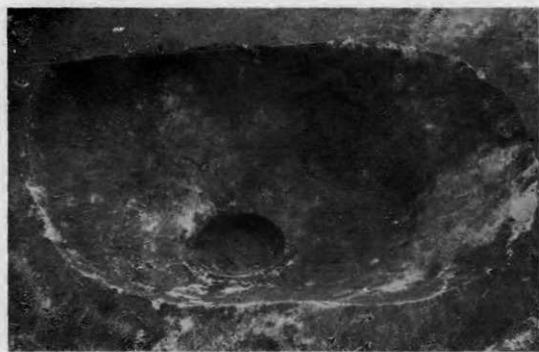
A 第3. 4号ピット (北より)



B 第5号ピット (東より)



A 第9号ピット (東より)



B 第10号ピット (東より)



A 第11号ビット (南東より)



B 第14, 15号ビット (南より)



A 第13号ピット (北より)



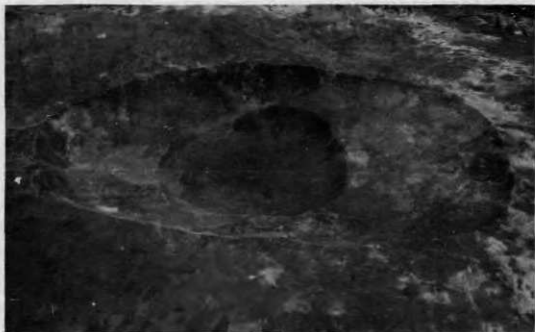
B 第13号ピット土器出土状態 (南より)



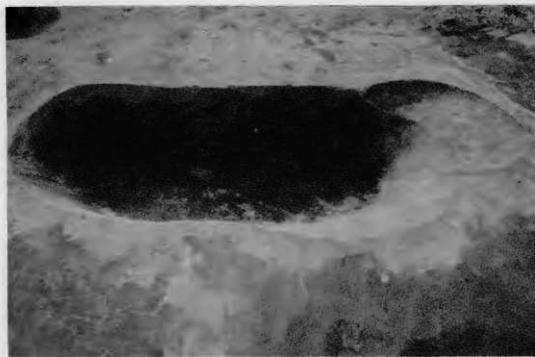
A 第17, 18, 19号ピット (北より)



B 第27, 28号ピット (北西より)



A 第31号ピット (西より)



B 第32、33号ピット (東より)



A 第34号ビット土器出土状態（北東より）



B 第34号ビット土器出土状態（南西より）



A 第34号ビット土器出土状態(2) (西より)



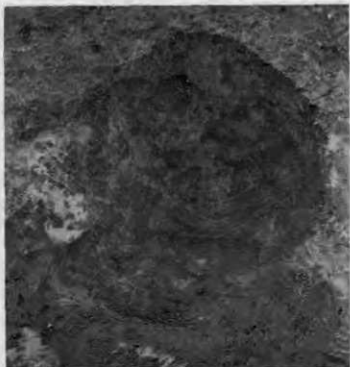
B 第37号ビット (東より)



A 第39号ピット (西より)



B 第41, 42号ピット (西より)



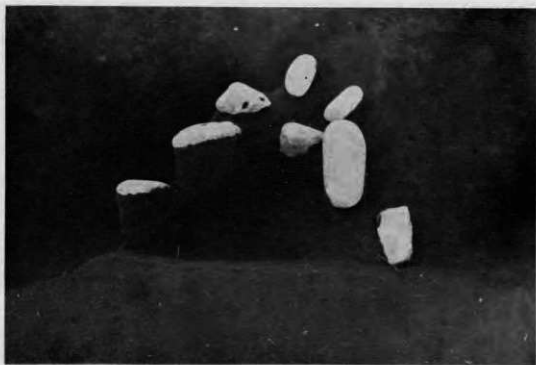
A 第45号ピット (北より)



B 第47, 48号ピット (北より)



A 第49, 50号ピット (南西より)



B 第51号ピット石組出土状態 (西より)



A 第51, 52, 53号ピット(1) (東より)



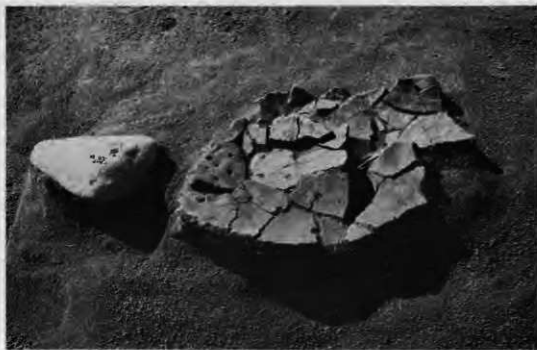
B 第51, 52, 53号ピット(2) (東より)



A 第54号ピット（東より）



B 第54号ピット土器出土状態（雨より）



A P-(-) 15区土器出土状態(東より)



B P-(-) 16区土器出土状態(東より)



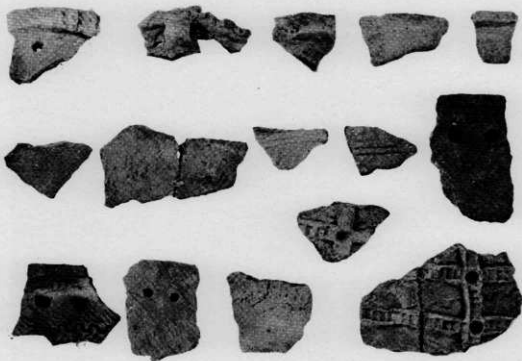
第54号ピットおよびP- (一) 15, 16区出土土器(1)



第54号ビットおよびPー（一）15、16区出土土器（2）



A P—(—) 15, 16区出土土器(3)

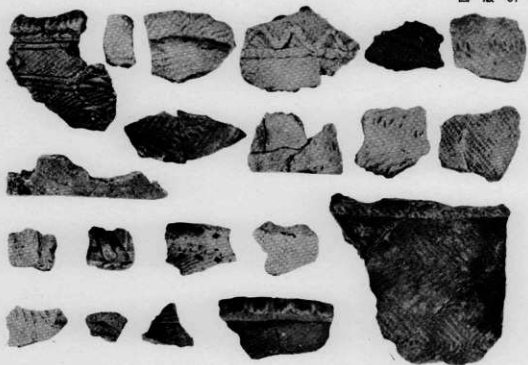


B P—(—) 15, 16区出土土器(4)

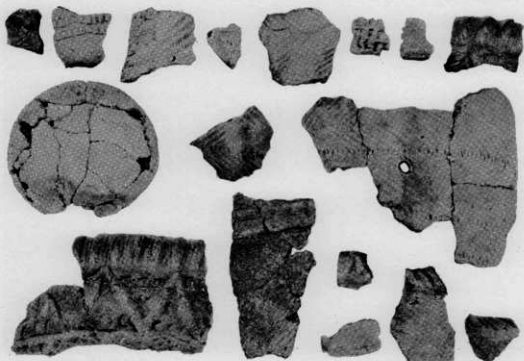


ビット出土土器(1)





A ビット出土土器(3)



B ビット出土土器(4)



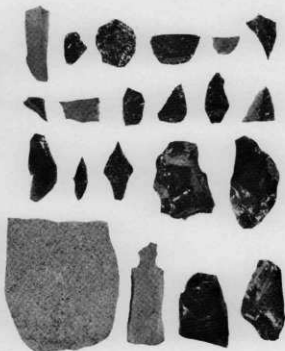
A ビット出土土器(5)



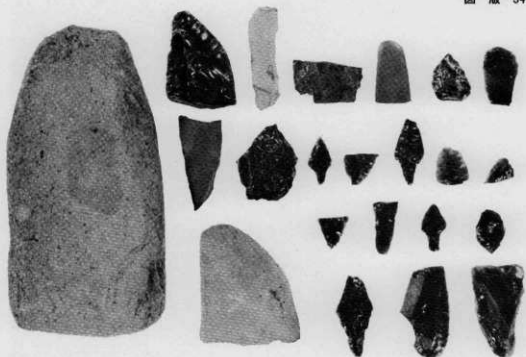
B ビット出土土器(6)



A ビット出土土器(7)



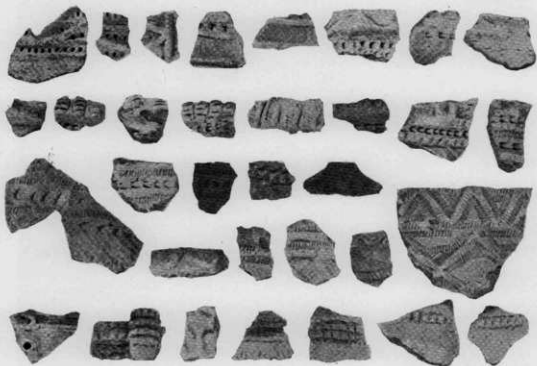
B ビット出土石器(1)



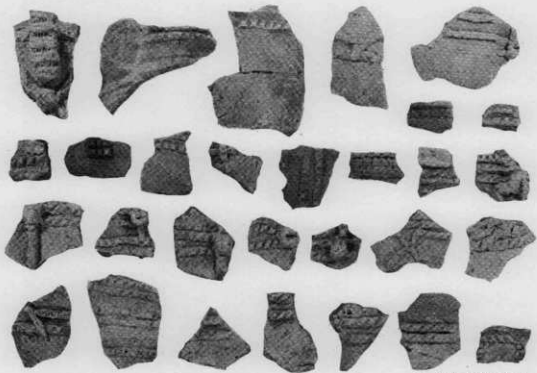
A ビット出土石器(2)



B 発掘区出土土器(1)



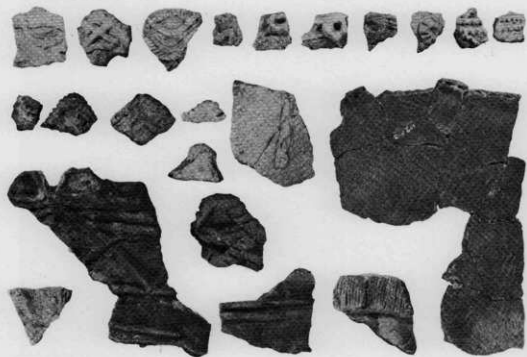
A 尧湖区出土土器(2)



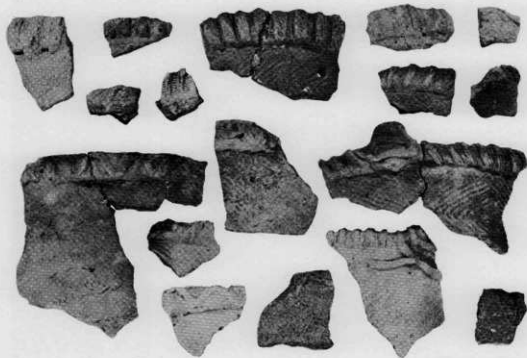
B 尧湖区出土土器(3)



A 兔狍区出土土器(4)



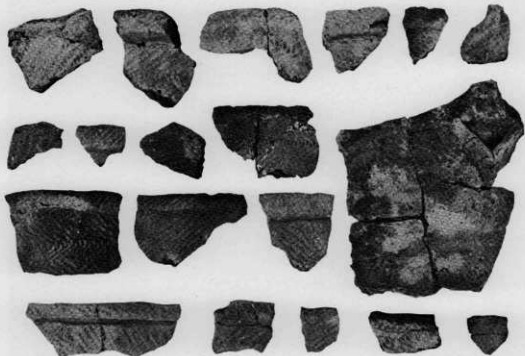
B 兔狍区出土土器(5)



A 兔欄区出土土器(6)



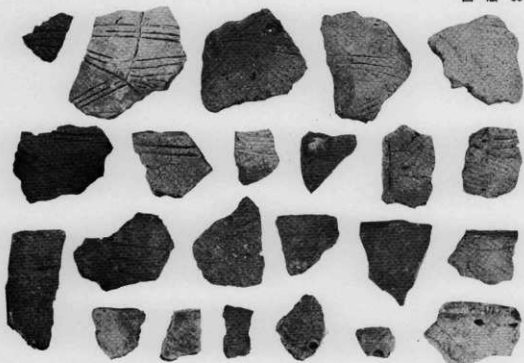
B 兔欄区出土土器(7)



A 兔掘区出土土器(8)



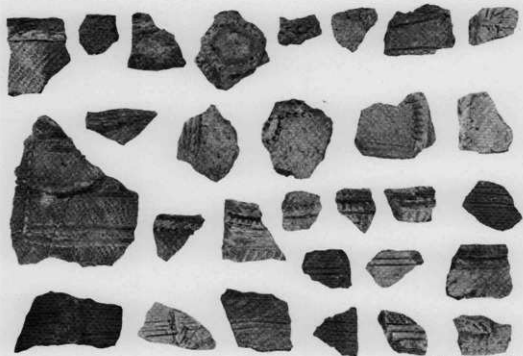
B 兔掘区出土土器(9)



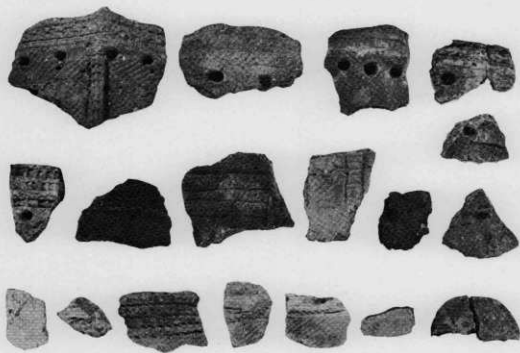
A 尧都区出土土器(10)



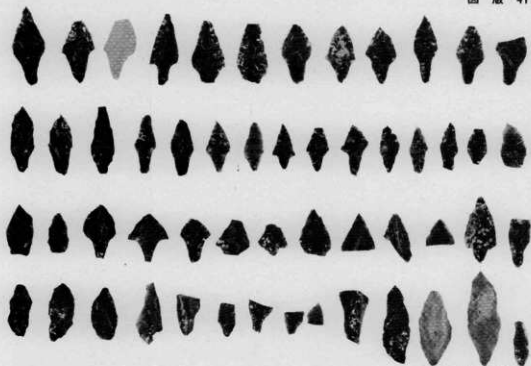
B 尧都区出土土器(11)



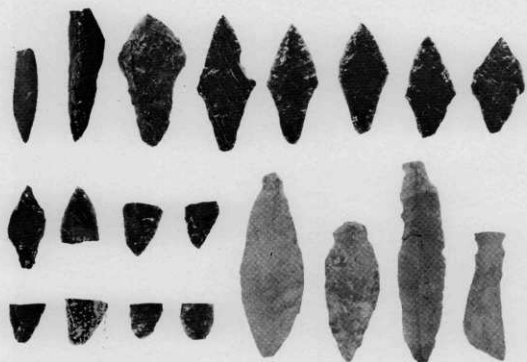
A 尧墟区出土土器(12)



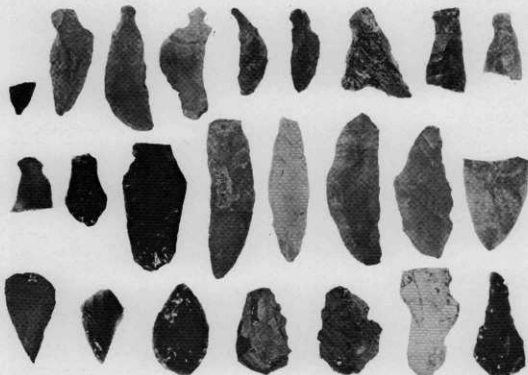
B 尧墟区出土土器(13)



A 免棚区出土石器(1)



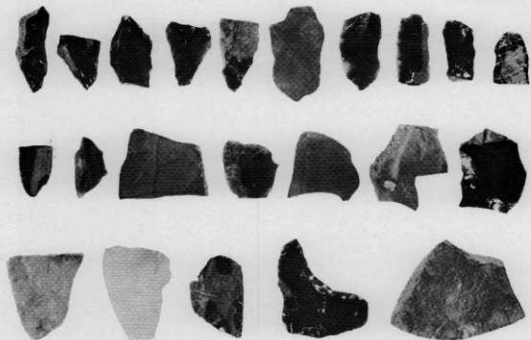
B 免棚区出土石器(2)



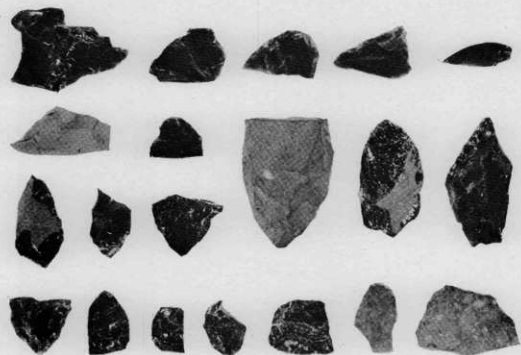
A 免棚区出土石器(3)



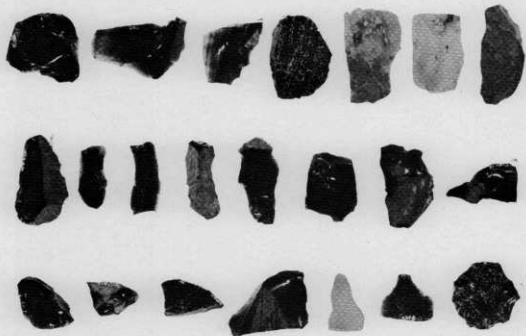
B 免棚区出土石器(4)



A 兔狍区出土石器(5)



B 兔狍区出土石器(6)



A 兔狍区出土石器(7)



B 兔狍区出土石器(8)



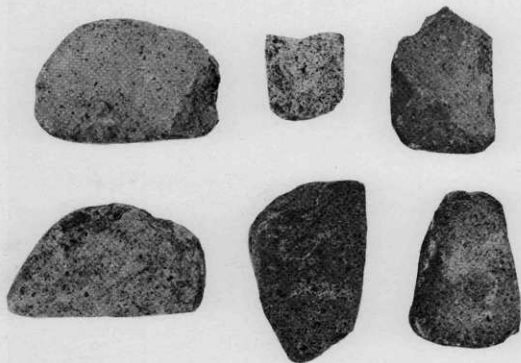
A 免棚区出土石器(9)



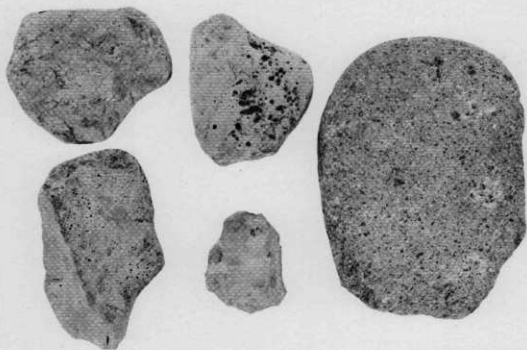
B 免棚区出土石器(10)



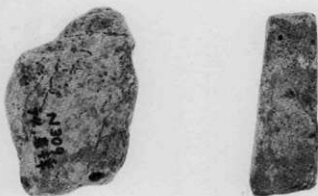
A 夹棚区出土石器(11)



B 夹棚区出土石器(12)



A 尧墟区出土石器(13)



B 尧墟区出土石器(14)

札幌市文化財調査報告書 Ⅺ

N 309 遺 跡

昭和50年7月30日印刷

昭和50年8月10日発行

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 三陽印刷株式会社
札幌市西区手稲東3北2丁目